

浄瑠璃通解

第三編

目次

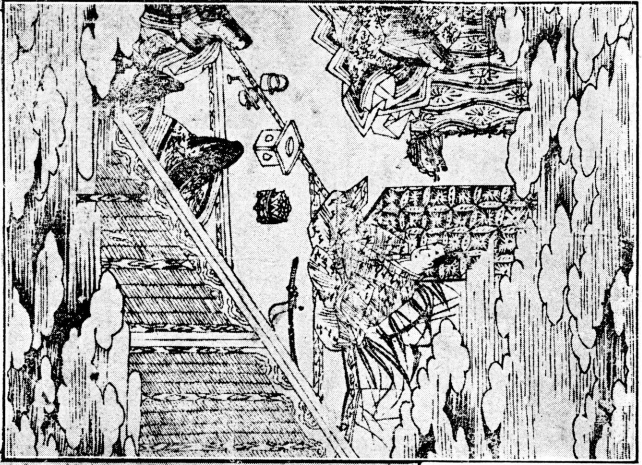
- 桂川連理欄……帶屋の段
源平布引瀧……綿操馬の段
源平布引瀧……松波琵琶の段
蝶花形名歌島臺……小坂部館の段
本朝廿四孝……百度參の段
本朝廿四孝……梗桔ヶ原の段
本朝廿四孝……景勝下駄の段
本朝廿四孝……勘助住家の段
本朝廿四孝……十種香の段
關取千兩幟……猪名川内の段

竹本攝津大椽 贊助
竹本彌太夫
山本九馬亭 著
竹本章太夫
淨瑠璃通解

第三編

東京博文館藏版

此十二段... 小解か通る
此十二段... 小解か通る
此十二段... 小解か通る
此十二段... 小解か通る
此十二段... 小解か通る
此十二段... 小解か通る



しうそ段二十板長慶

本珍の書奥人出蜀

上物り... 此十二段... 小解か通る
上物り... 此十二段... 小解か通る
上物り... 此十二段... 小解か通る
上物り... 此十二段... 小解か通る
上物り... 此十二段... 小解か通る
上物り... 此十二段... 小解か通る

尊翰拜讀貴著の淨瑠璃通解二冊御惠贈下し置かれ拜閱仕り候御丹精の至今日此種の書なかるべからずと兼々存じ居り候處此有益之著を得て大に心を強く致し申候抑々義太夫は我國俗文學中にて尤も大成いたせしもの二百餘年來演劇の脚本を作るにも他の淨瑠璃即ち一中豊後新内等を作るにも此範圍を今日まで脱し得ざるにて何に義太夫の勢力の大なるかゞ知られ申し候但し從來義太夫に付ては數々の批難もあり其一二を申さば

第一 文句野鄙に涉る處あり

第二 語勢の急迫に過る處あり

第三 曲節に不自然の處あり

是等が通常一般の批難點と思はれ候今これを辨ぜんに

第一 文句の野鄙に涉る處あるは是ぞ義太夫淨瑠璃の特色なり

當初の語りもの(平家等)謠ひもの(謠曲等)は専ら貴族的にして平民的のものとは極めて拙劣なる唱歌のみなりき近松門左衛門との間に出て宇治加賀椽井上播磨椽竹本義太夫の諸氏と提携して彼語りものを一變し平民的に成したるはこの義太夫なりその通俗を專としたるより特に野鄙に成りたるは自然の勢なり之を以て義太夫を擯斥せんとするは亦無情ならずや況や其野鄙と認むべきは詞に在りて叙事にあらず其叙事叙情の文は頗る優美のものありて存するに於てをや

第二 語勢の急迫に過る所あるは人形の爲し人形を見せると義太夫を聞せるとは視聽の兩者其趣を殊にする處あり然るを義太夫は之を人形に掛て見るも聞くも同時に於てする演劇と同様に即ち人形芝居の稱あるを以て一方には曲節を聞かすると共に

一方には人形の働を成さしめざる可からず無情の不器用なる木偶を有情の人間の如くに見せやうと云ふ處から大夫の語勢も其情を寫さんが爲に喜怒哀樂とも往々極端に走りて急迫に過る處なきを免かれず候

第三 曲節に不自然の處あるも亦前と同様にて全くは人形の爲なり左れば其作家は之を知りて曲節に不自然を生ずる事も語勢の急迫に過るの弊あるも承知しながら登場の爲に止を得ずして之をものせる事その苦心も亦察すべき事に候是等を察せずして一概に非難するは事を知らず併せて文を知らざる門外漢の批判とも申すべき歎要するに聞かせると見せるとを一ツにしたるより生ずるの罪のみ作家の罪にあらざるなり老兄博識わけて義大夫には研究を積ませらるゝ由承り及び候此邊の事は御承知と萬

々存じ候へは通解にも其心を以て筆とらせ玉は、實に讀者の爲
に其蒙を啓くに足り申すべし御報まで早々頓首

明治三十六年十一月

福地源一郎

山本信吉様

淨瑠璃通解第三篇

目次

桂川連理柵……帶屋の段……………	一
源平布引瀧……綿操馬の段……………	二七
源平布引瀧……松波琵琶……………	四七
蝶花形名歌島臺……小坂部館……………	六九
本朝二十四孝……百度参り……………	八五
本朝二十四孝……桔梗ヶ原……………	一〇三
本朝二十四孝……景勝下駄……………	一一八
本朝二十四孝……勘助住家……………	一三三

本朝二十四孝……十種香の段……一五三
關取千兩幟……猪名川内……一七〇

目

次終

淨瑠璃通解第三編

山本九馬亭著

竹本攝津大椽

竹本彌太夫贊助

桂川連理柵 帶屋の段

總解

お半長右衛門の死は情死にあらずして。過失なりとの説は傳はれど。書にも見當らず。取調べの手蔓もなく。京都に遊びて問合せたるも、これ亦要領を得ず。心得の方あらば、御教示を願ひたし、余が信ずる一老翁以前は京都にも住はれし人なるが。三十餘年前。所司代の記録寫しとか。淀奉行の取調書の寫しとかを見たるに。兩人の住所職業。其年月事實等詳しく載せありしが。大方忘れたる

由語らる。今此翁が記憶をたどりての説話を左に掲ぐべし。
長右衛門は押小路邊りの帶屋(判然せず)の忤なるが繼母との折
合悪しく若隠居せしものなり。花の上手にして聊劍道の嗜みも
ありて風流の町人なりきとぞ。其近所にお針の師匠ありて親し
く交りけるが。或る日師匠弟子の娘達を連れて芝居見を催し。長
右衛門其留守居を引受けたり。こゝにお半といへる少女泣く泣
く入來れるゆゑ。何故にかくは泣くぞと問へば。寺町三條上るあ
たりの金物屋より支度金にて我身を娶らんといいひ入れしを。母
上は既にうけがひ給ひて。式日も近づきたれど。我れは未だをさ
なきゆゑ。嫁入る事につらく覺ゆるまゝ。師匠の智恵をからん爲
め。來れるなりといふ。お半は餘りゆたかならぬ家の一人娘にし
て。父は身まかり。母の手に育ち。中々の美人なりしと。此家の針弟
子なれば。長右衛門とはかねて知合なり。長右衛門そは氣の毒の

事なり。生憎師匠は芝居見に行かれたれば日暮れならでは歸られまじ。母上の承ひき給ひて。仕度金まで受けられたる上は。事むつかし。誰ぞ外に縁者はなきか。其力を借るこそよけれと諭す。お半別にこれといふ身よりも無けれど。近郷に一人の伯母あり。母上の姉なりといふ。長右衛門さらば其伯母に話し見るべし。此雨に一人にては。行き得まじければ。伴ひたく思へど。留守居なればいかゞせん。夜ならばつれ立つべしと。お半大に悦び。夜を約して歸れり。其夜兩人出行きしが。雨夜にして足弱なれば。道はかどらず。桂川の渡しに着きし頃は。夜も更けにけり。雨に水層も増したれば。渡し守もはや退きたらんと。聲をかくれば。あなたの岸より舟子二人して舟を寄す。渡りつき御苦勞とて。過分に取りらすれば。これしきのものほしくて。渡さずといふ。長右衛門かく雨夜に。夜更けたればこそ。法外に取りらすれ。不足いふ事やあると詰る。彼等

うち笑ひて。今頃舟を呼ぶは只者にはあらじと。繫ぎし渡船を解きて迎ふれば。うら若き女子を伴れたり。必定駈落なるべし。女と衣類有金とを置きて。疾く去れといひつゝ。打かゝれば。長右衛門も聊腕に覺えあるまゝ。二人を相手にしばし鬭ひしが。過ちて足を河へ踏み込らす。お半あぶなしと。其裾をとらへしが。出水の勢につれ。二人ながら陥りて。行方知らずなりぬ。さて家にては。お半長右衛門同夜に家出し。且兩人話し居たるを見しなどいふものありて。欠落との評判立ちしが。其死骸裾をつかみしまゝ。淀の亂杭にかゝり(水死の者は皆然りと)淀奉行より京都所司代に通知ありしかば。心中と事定まれり。後一人の賊捕はれて。其夜の事實を白状せしかば。始めて心中ならざる事。明白せると同時に。今までかゝり合を恐れて。口をつぐみしお半の友達が。其夜長右衛門につれられて。伯母の許へ行くなど話せしと。語り出でしかば。愈

その眞相あきらかになれりとぞ。

此話をして事實ならしめば。一時心中との浮名立ちしを材料とし。兩人の死骸裾をつかみしまゝ。桂川を流れて淀の亂杭にかゝれるゆる。桂川。連。理。柵。と題して面白く作れるなるべし。これ以外に。いまだ聞込まねば。眞偽は知らず。讀者面白き説あらば。御教示を乞ふ。

此淨瑠璃は。安永五年十月十五日。北堀江座の興行に上せしものにて。作者は菅專助。

桂川連理柵

帶屋の段

「柳馬場」は南北の街、押小路は東西の街、東京の東部に於て丁字形をなす。虎石町は押小路にあり、名所圖書大谷の條に「親鸞聖人の廟塔は、後の山腹にして、墳上に虎石あり、石の形虎に似たれば名とす、此石初は開山聖人往生の地、柳馬場押小路虎石町にあり、秀吉公の御時伏見城中に移し給へり」と見ゆ、柳馬場は天正十七年遊廓を置きし所なる由、戀飛脚新口村を見よ、

「掛直を掛視」とかけ、虎石町とつづけたり、虎石は虎斑石ともいひ、近江の高島郡より産し、虎斑の如き模様あり、硯など種々の器に作る、

帶屋の段

柳の馬場を押小路。軒を並へし吳服見世。現金商ひかけ硯。虎石町の西がはに。あるじは帶や長右衛門。井筒に帶のうれんを。かけねじよさいも内義のお絹。氣の取りくるしい姑に。目ももらはじとたすきがけ。せんたく物を引のしの。しわはよつても五調作り。はゝのおとせは勝手を出。詞朝飯の箸下に置く。欠出した長右衛門。もふ晝過だに戻らぬは。大方又祇園で飲するてゐるので有る。コレおきぬ。ちつと云しやれぬかいの。イエく。遠州の殿様から。請取の脇差。研屋から來ると其儘藏屋敷へ。持つて參られました。サイン。脇ざしの研ができましたと。持つて行く斗りに。かう隙が入つて。内の見廻しができまる物かいの。ア、同じ事でも。又弟の茂兵衛めは。モかい、

「暖簾を掛け直」 「如在も内儀」 とかけたり
 「目をもらはじ」 はにらまれまじ、叱られまじ
 「引炭斗の皺ばよつても」 とつげたり
 「ぐわんじやうは」 丈夫にしつかりとしたるをいふ、頑丈、岩乘、岩牆、岩重、岩疊、強盛、五調など、種々の字を用ふれども、皆當字なりといふ、齊東俗談に「馬の強健なるを岩乘といふは、悪所岩石も乗るに堪へたる義なり、用ひて物の健なるにいふ」と見ゆ
 「祇園の事は」 近頃河原の逢引を見よ
 「藏屋敷」 は昔諸侯などの米倉のありし所、
 「痒い所へ手の行く」 はよく行届くをいふ語
 「もてはやし」 はほめそ

所へ手の行く様に。せい出しをるに。エ兄のらめにこまつたと。繼子をにくみ實の子を。もてはやしたるひるき口。聞きかねて隠居半齋。珠數つまぐつておくより出で。ア、コレおばぐ聞づらい。死れたとなりの次兵衛どのが。五ツに成るまで育られた長右衛門。無理にもらふて家の根つき。死んだ先の女房は。となりへの義理が有ると。あらいことばもかけなんだ長右衛門。後妻に直つた身を持つて。連子の茂兵衛ばかりを大事にかけ。兄が事と云ふとがみく。エ、ちとたしなやみく。ヤコレ嫁女。氣にかけてたもんなど。女房にかはる佛性。罰チ、其結構を見込んでの。アノ身代をさゝほふさにする長右衛門。ずいぶんと可愛がらしやれ。ア、やかましやのくく。コレおきぬ。隠居へ連れてゐて。晝寐なとさしてたもれと。まけてゐぬ口さからふは。後生の邪魔と半齋は。うらの隠居へ嫁引つれ。行と

やすこと、珠數は念佛の數
取りに爪ぐるもの、木櫛子、
蕪子、水晶、菩提子等にて
作る。

「根つき」 はあとより

「佛性」 は氣のよきな

ふ

「さゝほうさ」 はめちや

「後生の邪覺と」 こゝが

佛性

「くすねる」 はかくしと

ること

「金のいるそなたにやりた

さ」 と盗みとりて繼手に

ぬりつけんとす、繼母の非

道こゝに至るか、

「棒鞘」 は無反りの刀を

いふ「一腰さしつまる」と

かけたり、刀をすりかへら

れしゆゑにいふ、

「何と投首」 とかけたり

「やんぐわん聲」 はぐわ

ん

戻ると一時に。茂兵衛はとつかは内に入り。詞母じや人聞かし

やれ。一昨日兄貴が取りに行かれた駿河のかはせ。まだ金を見

ぬ故。がてんが行かぬと飛脚やへいて問たれば。きのふ長右衛

門殿に渡したと。爲替手形を出して見せた。すりやかはせの百

兩は。兄貴がかけでくすねたに極つた。ヲ、そうで有る共く。

戻りおつたら吟味して。父親殿へのつらあて。ぐつといがめて

よい樂み。イヤコレ茂兵衛。今一ツ能い事はのふ。昨日登つた

濱松の五十兩も。金戸棚の合かぎして。コレ見やちよつと盗ん

で置たは。コ、コレミヤ。金の入るわがみにやりたさ。爲替の

かねをくすねたからは。是も兄めにぬり付ける。できたく母

者人。コレ此五十兩はの。コレかうくとさやく弟。兄長右

衛門は棒さやの。一こしにさしつまる。なん義を何と投首し。

しほくかへる我家の内。見るより母はやんぐはん聲。五町か

んぐわめく聲
「あんまりでうでござらう」

は餘り長者めきたりと
の意にて、遊興に過ぐるな
いふと、其道の人の話なれ
ど、他に通ぜざるやう覺
し、案するに、てうは有頂
天に浮るゝ意にてはあらざ
るが、なほ尋ぬべし、

「耳へ筒抜け」 はよく聞
ゆるをいふ、

「しやら聲」 もわめき立
つる聲、

「吐胸」 はきくつと胸に
こたふること、條羅聲か、

「折角」 はわざ／＼の意、
もと前漢の朱雲が、五鹿充

宗を論破せしを、諸儒が、「五
鹿嶽々朱雲折其角」とい
ひしにもとづき、骨折る意
となれりとも、又郭林宗が
途申雨にあひて、巾角のれ
ち折れたるを真似て、時人

十町有る屋敷に。半日のうへかゝつて。内の事は何に成ぞいの。

朝から藝子やおやまぐるひも。餘りてうでござらふと。わめく

は隠居の耳へつゝぬけ。又鬼ばぐがしやら聲は。長右衛門が戻

つたかと。お絹を連れて親半齋。詞さつきにも云て聞すに。長

右衛門さへ見りやかみ付く様に。近所の手前もちと嗜め。長右

衛門もひたるかる。ソレお絹。早ふ茶をわかして飯をおましや

イヤ飯所じやないぞ。問にやならぬことが有る。ハイユリヤ。

長右衛門。こゝへこい。一昨日取りにいつた爲替の百兩。

ドレ金見やう。爰へ出せと。云れて吐胸の長右衛門。詞イヤせ

つかく參つたれど。先の亭主が折ふしるす。金は明日請取る約

束。ア、コ、コレ。兄貴。エ、ぬけ。エ、ぬけ。エ、ぬけ。

うそを云しやるな。おりやたつた今先へいたれば。金はこなた
に渡したと。爲替手形を出して見せた。ガそれでもこなた受取

の西端、野洲川の南岸におりて、今石部村といふ、昔京より伊勢に至る驛次、「今一番ア、イヤ今一度」茂兵衛きはどく讀みぢがへたり
 「御げん」 は御見、お目もじの意
 「ませ」 は老成など書く年よりれびたるをいふ
 「へげたれ」 は罵る語、茂兵衛頗るやけたり
 「水晶輪」 は明かにくもりなきをいふ、もと佛語か、「悪は悪でも當座の理詰め」かくては、繼子いぢめと知ながら、如何なる半齋もかばふ事出来ざるべし、此場合に此事露顯とは、やみ足にばれ足、
 「情けない事してくれた」日比情ふかきだけ、長右衛門の胸には百倍

ころしてゐると。近所から云立つれど。ア、いとしなげに。兄貴に限つて。みだりなこといはふか。マおとなげないそんな事よもや有るまいと思ふたが。コレくく。ちがいのないはコレ此狀で。エ、口の間は取つてのけて置いて。ト爰らあたりから讀かけふか。エ、何じや。書おつたな。エ、伊勢參の下向道の。石部の宿のかり枕。今しも忘れ兼ね。どふぞく今一ばん。ア、イヤ今一度。エ、嬉しき御げんを願上り。長様參るおはんより。ハ、アませたは。へげたれめが。ヤアくそりや又大それた不義いたづら。兄弟同然といふ。おん有る家の小娘をそゝのかし。嫁いりの邪魔を儕りや。マよふしおつたな。ヤアコレ親父殿。何とがみく云ふが無理か。水晶りんの様な茂兵衛。ひいき口でござるかやと。悪は悪でも當座の理づめ。長右衛門は身に冷汗。親半齋も胸せまり。コリヤ詞長右

極めたる秘事なりとぞ、此頭を振りまはすより、臍が石橋舞ふといへるなり、頗る面白し、
 「どやげば」 ほどなれば
 「疾しや遅し」 ば直ちにの意
 「おちつく布袋形」 とは面白く、ひたり
 「お半に心ある長吉には」 茂兵衛が布袋形の「覺ゆはないとソレさつぱりと」より、お絹が目まぜの「こまじや」ノ合點か」の方利くなるべし
 「長吉の」 エトツトモ、エ、何じや」のいひにくき口ぶり、頗る面白し
 「しちんどい」 ばしちくどひ
 「おほもじ」 はおほづかし、前に解せり
 「藝氣のないやつ」 長吉の

にゐるか。ちよつと来てくれ。一寸くと門口から。どやげば隣の内より長吉。としやおそしと走來る。茂兵衛はおちつく布袋形。詞「ユリヤきげ長吉。我れとそちのおはん女郎と。ねんごろしてゐるといはい。覺えはないとソレ。さつぱりと云てしまへ。コレく。コン長吉殿。爰じやく。ノがてんか。サア覺えのあること云ふたがよいと。お絹が目まぜ。のみこむ長吉。
 詞「エトツトモ。エ、何じやア何じや。皆様の手前も。エ、ちつくり斗。エ、ナンジャヤラ面目ないが。アノエ、何じや。伊勢參りの戻り。石部の宿屋で。エ、ちつくりと面目ないが。おはん様と女夫事。アイねんごろして居ますから。おはん様はわしが女房。ヤイく。そりや何ぬかすぞいやい。ユリヤ此狀にナ。長様まるるおはんより。エ、茂兵衛様しちんどい。長様まるるは。おほもじながら此長吉。エ、何のことじやぞいや

藝氣なきに、こぼれし仕組
み、天窓かく山の茂兵衛が
天窓かきむしるとはをかし
「そりやもうしよ事かない」
なさぬ中は、かくの如きも
のか、さても〜

「けつかる」 は居るの賤

語
「白川様からつり取る」は
極めて正直なるをいふ當時
の諺、白川様は神なるべし、
其道の人の話に、白河殿の
事にて、天下様から釣とる
といふに同じといへど、神
とする方、善光寺如來に對
して、味ひ深し、

「善光寺の如來様云々」は
人のよきをいふたとへ、善
光寺如來は信濃國上水内郡
長野町にありて、欽明の御
宇百濟より獻せし開浮檀金
の靈像なり、物部守屋が難
波の堀江に投ぜしを、信濃

い。テモげいぎのないやつと。茂兵衛はあたまをかきむしる。
そばにおきぬが心ちよく。詞申しかゝ様。げんざい戀の本人が
出たからは。夫にふ義はござりませぬぞへ。ハテそりやモウし
よことがないは。爲替の百兩と五十兩はどうしたぞ。サア長右
衛門白狀せい。申し母者人。いかにも百兩の金は。私がわる遣
ひなれ共。五十兩の金は存じませぬ。定めてどこぞに。合か
ぎした盗人めが。有なら出せ。サアその盗人は。サア誰じゃ。か
ぎ持てけつかつて居て。盗人は外に有る。ム、盗人は外に有る
とは。ア、何か。コリヤアノ白川様からつり取るやうな茂兵衛
や。善光寺の如來様見るやうな此母に。ぬり付けふとおもふの
か。コリヤヤイ。こじきの子やら盗人の子やら知れぬ捨子の儻
とは違ふぞや。素性正しいこちら親子に。とがをきせうとせる。
アノ爰な横道者めが。サア〜。五十兩の行はをいへ。云ぬか

の人本多善光拾ひとりて、
此處に安置せりといふ、川
柳に「善光も河童が呼ぶと
初手おもひ」
「あや」はしみけがれの
意

夫思ひのお絹に此繼母「か
み分けのある母様じやござ
んせぬ」とくやしませられに
目走るも無理ならず、おそ
の、おさん、おみつを始め、

やいはぬとかうじやとしゆるばふき。振上げてりうくく。
肩こし分けず打する。コリヤあんまりとかけ寄るお絹。はふ
きをしつかとうごかせず。詞「エ、くく」。お前はくナア。
何とした。何としたとは。エ、胴慾じやわいな。いかに
胤はら分けぬ。そうむごたらしうはせぬ物じやはいな。云は
ぬが禮義孝行なれど。お前方の氏素性も。あんまりあやはぬけぬ
ぞへ。サア云ませうか。いはふかくく。腹立まゝの捨こ
とば。まじめに成つた母息子。長右衛門は女房を引退。詞「コリ
ヤ母に向ふて慮外な悪口。夫でもお前。コリヤく云止まぬか
サアくく。何云しやんす。禮義も人に寄わいな。何ぼけつ
かうにあしらうても。かみ分けのあるか様じやござんせぬ。
エ、わしや腹が立つくくと。身をふるはしたる無ねん泣。
心根ふびんと引寄て。詞「道理じやく」。コリヤ親じやはやく

すべて心中する夫の妻は烈女傳に載せても、耻かしからぬ貞女なり、身の過ちと親といふ字に虫を殺す長右衛門、是非なしとはいふものゝ、苦しきおもひやらの「親といふ字に」といふを聞いて「それ／＼親じやぞ／＼」と笠にかゝる繼母の非道「見事兄をわりや打つか」と茂兵衛を押へる長右衛門「己れが名代じや」と押へる繼母、兄に指でもさしたらば」と繼母を押へる半齋、其仕組み頗る面白し、又何處までも繁齋が情ぶかき詞、ありがた涙に咽ぶの外なし

「つげ／＼と」

は憚ると

親と云ふ字で何事も。虫をころす胸の中。おもひやつてくれ女房と。こぶしをにぎり男泣。詞サ、夫々。親じやぞ／＼。親に向つて何をふそく。コリヤ茂兵衛ちつとかはつてほふきのやく。たゞきのめして金の行へを。チツトがてんとしゆるばふき。ふり上げる手をぐつとねぢ上。詞ヤ我にはよふたゝかれまいわい。見ごと兄をわりやぶつか。イヤ弟がぶつのじやないぞ。おれが名代にどづかして／＼。金の白状さするのじや。イヤ白状もへちまも入らぬぞ。兄に指でもさしたらば。此半齋がおのれらをぼいまくるぞ。コレ親父殿。金を盗んだ長右衛門、何でこなたひいきする。ソレ夫が。大だわけの親玉とやらじやわやい、長右衛門は此家のあるじ。百五十兩が千兩でも。我物を我が遣はふが。又まきちらさふが心次第。夫を取つたの盗んだのと。餘りあほくさいわい。つけ／＼物をぬかしたら。昔の飯糰お

ころなきさま

「親子はふくれる焼餅顔」
何たそ妙句ぞ、味ふべし

「大分臺詞がある」 長吉

せりぶあり、それが爲めに
茂兵衛失敗せり、

「つばを被ぶつた色事師」

長吉をいふ、甞をかぶるは
失敗又罪をかぶる時などに

いふ、京阪地方の俗語「こ

いつア壺じや」

「八方行燈」は行燈の一
種、東京にてハチケン・加賀

にてカサアンドンといふ、

別記を見よ

「二年く尻が云々」 繼

母の無法を説き、去り得ぬ
理由を述べ、隠居さすると

いひて夫婦の心を慰め「氣
のもめる事もあらう」とい

たけにばいさげ。長右衛門めをとがさうり直さし。親子共にぶ

ちのめし。せめ仕はずそと。道を立てたるて、親の情に女夫は

有がた涙。親子はふくれるやきもち顔。詞ア、茂兵衛。くたび

れたのふ。臺所で一ばいせふかへ。ヲ、それがよごんしよ。コ

リヤ長吉うせい。おのれには大ぶんせりふがあると。よわみを

見せぬ親と子が。跡に引そひできあひの。つばをかぶつた色事

師。打つれかつ手へ入る跡は。早暮かゝれば下男。燈す八方

行燈の灯ぶつだんの御明しは。年寄やくと半齋が。こてくと

もせどしめりをる。女夫の者をひざ近く。一年く尻がぬくも

り。道も義理も知らぬばぐめ。追まくるもがてんなれど。七

十に近い半齋。女房のりべつが見めでもない。堪忍の胸をさ

すつてゐる。したがいやと云はふがおふと云はふが。ちかいう

ち隠居へ呼取り。おもやの事は構はずまい。女夫ながら夫を樂し

ひて、長右衛門の心をおもひやり「逆さま事を見せたまもんな」と、御燈にたとへ、懇々と諭す須彌大海の慈悲心、謝する所を知らず

「身は有明行燈」とかけ「遠州の御用」とつけたり、「安堵」の語行燈の調をうけて書く、有明行燈は夜もすがら燈し置く行燈、遠州行燈は丸行燈のこと、小堀遠州の造りはじめしよりの名なり、伊賀越岡崎の段

みに煩はぬ様にしてたも。又長右衛門も何やかや。氣のもめる事も有らふが。浮世に長ふもぬをれに。逆様事やなど見せてたもんな。物のたとへはア、アノ御あかし。わづか燈心一筋でも。油との持合ひでともつて有る。油は半齋燈心は長右衛門。くらいと云てはかき立て。エ、ずり込むといふてはかき立て。だんくとかき立てく。もがきあせつて燈心がなふなれば。油が有つても家は闇やみ。ア、其氣の細燈心一本。コレ高が町人の身の上で。これが恥の立たぬとは。畢竟心がせまいと云ふ物。じつとこたへて。氣をかき立てさへせねば。いつ迄も身はあり明行燈。遠州の御用も相替らず。聞くやうに親にあんどを頼ぞやと。くゝめる様にはし折鏡。心は眞實かぐむ腰。のばして佛間へ入りにけり。親のじひ心身にこたへ。さしうつ向いたる夫の傍。いはんとすれど胸ふさがり。しばし詞も出ざりしが。詞

を見よ。

「くもめるやうにはし折鏡」

くもるといひたればはし

といへり、鏡をうけてか

むといひ、のぼしてといへ

り、はし折鏡の事、幽遠隨

筆に見えたれど、其書なけ

れば引くを得ず、追て記す

べし。

「差うつむいたる夫の傍云

々」 夫婦物思ひになや

むさま、見るが如し、

「愚鈍なものでも云々」か

ふる女房もちなし

「心の奉公」 この奉公は

ほめてよいやら悪いやら知

られど、死に角、夫につく

才真心は見ゆたり

「私しも女子の云々」

さ

コレ長右衛門様。

だうりは道理なれど。お前はきつうすまぬ顔

じやが。かならずひよんなしあんなど。けがにも出して下さん

すなへ。姑め御や小じうとに。つらひ氣がねと辛抱も。お前と

いふ人が有ればこそ。十年連添ふ女房の手前。立ぬ事も何にも

入らぬ。おやまぐるひも藝者遊びも。そりや殿たちの器量とい

ふ物。お半女郎と二人が中。ひよつと私が知つたがと。言譯に

さしやんす媒灼。詞ぐどんな者でも女房じやと。思ふての心遣

と。私しや心でおがんで斗りおりました。其返報ではなけれど

も。縁ぐみを變がへは。年はの行ぬあの子でも。若やお前の樂

しみに。成りもせふかと心の奉公。詞私しや。くくとふから知

つては居れど。りんき所か顔へも出さぬは。氣の毒がらすが笑

止など。けつかうな鼻御や。いちくね悪い姑御の。耳へ入る

かと夫が悲しさ。私も女子のはしぐや物。大事の男を人の花。

もあるべし、只つゝしむのみ

「六角堂」は頂法寺と稱し下京區六角通り烏丸にあり、聖徳太子の開基にして本尊は如意輪觀音、長一寸八分の黄金佛、なほ別記を見よ

「名さかば」浮名の意「いやることか道理だらけ云々」と悔むも道理

腹も立つしりんきの仕様も。まんざら知らぬでなけれ共。可愛殿御に氣をまし。煩いでも出よふかと。あんど過して何にもいはず。六角堂へお百度も。どうぞ夫にあかれぬやう。お半女郎と二人の名さか。立ぬ様にと立願も。はかない女の心根を。不便と思ふていつ迄も。見捨ず添ふて下さんせと。夫の膝に打伏して。くどき立てるぞいちらしき。長右衛門も目をすり赤め。詞女房共忝ない。云やる事が道理だらけ。道理のないはおれが身一つ。去ながら百兩の金を。色遣といふたは嘘。そなたの弟才次郎が。死ぬるを助た雪野が身の代。エ、夫はまあ。サ、サ、サアかたふ此事云まいとおもふたれど。浮氣らしひ色狂ひと。思はれまいための云ひ譯。我身の弟の事なれば。惜ふは思はぬ爲替の百兩。又五十兩の盗人は。しつかりと知れて有れど。サア詮議をすれば不孝に成る。此二口の譯は立ど。モ面目ないはお

「觸るゝ煩惱」 これ長右衛門のみにあらず、孔子も朱子もこれを恐れたり、枕元の食物は、兎角つまみたきもの

「面がぶりたい」

さう

半が事。遠州よりの戻りがけ。おはんは長吉乳母諸とも。伊勢参りの下向道。石部の宿屋で宿り合はせ。わしは口の座敷に寝てゐる。お半が来て起したも夢うつゝ。聞いてゐれば長吉が。参りがけよりむたいの戀路。あすは逝れば今夜はせひにと。コレ髪迄此様に仕おつたと。腹立ちなみだ。乳母を起せと草臥て目はさめず。どうぞお前のそばに。寐かしてくれと泣沈む。わしが知つては長吉も。氣の毒に思ふで有し。殊に又子飼の奉公人。内へいんでも。必ず母御へ告てやりやんな。サ夜明もちかし乳母が傍へと。いろくいふても聞入れず。又わしもねむたし蒲團の中へ。サさはるがぼん惱。かんにんしてたも女房共。ア、らつちもない事したも。我身ながらもあいそがつき。連そふそなたに顔上げて。云も云れぬ身の誤り。美しういふてたもる程。おりやモ面がぶりたい。堪忍してたも堪へてたも。併これ

なくては叶はぬ

「誤つて憚らぬ」は過ち

て改むるを憚らぬといふ意
もと論語より出でたり

「蒲團の中より手を合せ」
誰しもかくあるべし

「堪能」は満足の意

もさつぱり。埒明てしまふたれば。どこへ成共。嫁入するで有
ろぞいの。親父様の有がたい御るけんと云ひ。ハテあやまつて
憚らぬをれが身の上。何にもあんじることはない。とかく
是迄の事は。誤つた。エ、わつけもない。女房に
何の詫。もふくくく。此ことはさらりと流して。又云出
さぬ堅の盃。わしや肴拵へふ。一ツ上つてちとお休み。詞そん
ならそふせう。ア、氣草臥かぶらく眠たい。其間に一睡ヤツ
ころりと。こける夫にあてがふ枕。ふとん打させ女房は。勝手
へとつかは行く影を。ふとんの中より手を合せ。詞ふ所存な長
右衛門を。男と思ふて辛抱する。心いきの嬉しさ過分さ。千萬
年も連添ふて。禮が云たいたんのふさせたい。取分けて五ツか
ら。お世話になされた親父様。末期の水も上げませず。逆さま
事の歎をかけるは。不孝といはふか道知ず。詞さつきの御るけ

「捌けぬものはお半の腹帯」
日々にせり出すをいかにせ
ん

「雲を圍」 は當所なきを
いふ
「苦に苦をかけ不孝に不孝
の覆輪かける」 句よし、
覆輪かけるは輪をかけると
いふに同じ（覆輪は金銀な
どにて、器物の縁をとるを
いふ）
「愛想もこそ」 のこそ
は調を合せ意を強むる爲め
の字なるべし
「同じ思ひを信濃屋」と
かけたなり

んお絹が心底。聞けば骨身をさかるゝ苦しみ。親父様の御了簡
おきぬが心は捌ても。捌けぬ物はお半が腹帯。死なしやつた治
兵衛殿。おいし殿へは恩を仇。又其上屋敷へもつていた。政宗
の差添は。マアいつすりかへられたも知らぬ質物。ひいきづよ
いお留守居も。お國へ取なす詞がない。今夜四ツ迄にせんぎ仕
出せと。御了簡は付いたれど。どこをせんぎも雲をやみ、所詮
生ては言譯立たず。モ死ふとかくご極たれども、詞親父様やお
絹が顔。名残に一目と見に戻り。彌女房に苦に苦を懸け不孝に
不孝のふくりん懸ける。此身は何んたる大悪人。モ、ハ、あい
そもこそもつきはてた。我身の上と忍び泣。枕も漂ふ涙也。同
じ思ひを信濃屋の。おはんは胸のうさつらさ。餘所目を包む振
袖の。内を覗いてよい首尾と。そつと這入つて枕元。詞長右衛
門様。今朝さんじた文の返事。ちよつと逢ひにさんじたと

「雨やさめ」
泣くをいふ、もと雨や雨の
音便なるべし

ゆすりおこせばとぼけ顔。詞フウオ、お半か。返事に來たとは
合點がいたか。成程お前のおつしやる通り。得心して是切に。
とんと思ひ切ませう。チ、く出かしゃつたくく。夫で互
の身も納り。世間の噂も獨りやむ。サアく其心なら。かうして
居ると又浮名。ちやつと内へいんでたもヤ。アイく。私しや
モウ是れを限りに。さつぱり内へかへりませんが。お前はするぶ
んお達者で。詞見納めに今一度。顔をよふ見せて下さんと。
抱おこして顔つくく。見る目も明れぬ雨やさめ。長右衛門も
此世の別れと。口へ出さねど心の内。いとま乞ぞと抱しめ。詞
コレく。何もさなく思はずとのふ。コレ煩らはぬ様にく。
ヤ母様へ孝行。アイ。今迄はよふ可愛がつて下さりました。禮は
云ず氣をもまして。エ、やくたいもない子じや。死別れ。サ死
別れではなし。えんは切つても朝夕見る顔。コレくくく誰も見

「名残も惜し」を鴛鴦と
 かけ「離れ得ぬ衾」とつづ
 げたり、鴛鴦は番ひ離れぬ
 鳥、又鴛鴦の衾の句あり、
 契りの密なる間をいふ、味
 ふべし
 「見ぬ夜」を四辻とか
 げたり
 「かんきんの聲いつもより」
 あはれに聞はしなるべし

「桂川」は名所圖會に「大
 井川の流れにして舟渡しあ
 り、丹波道なり、上野橋は
 十町ばかり北にあり、梅津
 の南なり」と見ゆ、

ぬ内。サいにや／＼。コレいにやいのと突やられ。名こり

も鴛の離れ得ぬ。衾を分て出て行く。はては桂の川水に。浮名

を流すぞはかなけれ。虫が知らすか長右衛門。詞どうやらおか

しい今の遊様。合點が行かぬと門の口。落ちた一通灯かげにす

かし。書置の事。扱こそと。驅出しても宵やみに。影さへ見え

ぬ四ツ辻を。又欠戻つて見る書置。佛壇の間に半齋が。看經の

こゑいつよりも。無常を誘ふ鐘の音。なむあみだ／＼。な

むあみだ。詞エ、お前と縁切り外々へ。嫁入する心はなく。殊

にたゞならぬ此身。世間へ知れては。私をはぢはいとはね共。

おまへの名を出すのが悲しく。おきぬ様への詫言や。かゝ様に

呵られぬ中。桂川へ身をなげ候。エ、お前は御無事で御夫婦

中よふ。折々には一遍の御ゑかう。頼み上り／＼。エ、可愛や

／＼な。突詰めた娘氣で。苔みの花を散らさすも。皆此長右衛

「因果は車の輪」 佛典に因果應報車輪の廻るが如しといへるより書けり、

「宮川町」 は鴨川の東岸四條五條の間にある傾城町岸野などいへる因果物語は無論面白く作れるなるべし

「愛着に引かれてもどる後髪」 皆縁の語なり

門がなしたわざじやわいの。なむあみだノ。エ、詞噺やかゝ様のお歎き。力落しと存じ候間。江戸の兄様をよび登し。朝夕の御介抱。たのみ上り。コレそなたが死んで猶以て。生てゐられぬ長右衛門。一所に死ぬが親へ云譯じやわいノウ。ア、いか様因果は車の輪。十五年以前宮川町。げいこ岸野に登詰め。つまらぬ事で桂川へ。心中に出た所。先へ岸野が身を投たを。見るよりふつと死おくれ。人のしらぬを幸ひに。其場をのがれけふまでは。生のびしが。思へば最期の一念にて。岸野はお半と生かはり。場所も替らぬ桂川へ。我身をともなふ死出の道連。ハ、ア是こそ因果のつみ亡し。ナ、そうぢやくくと觀念し。出行く足も愛着に。引かれて戻る後髪。おはんじやないか。長右衛門様。サおじやと打連れて。桂川へと急ぎ行く。

源平布引瀧 綿繰馬の段

總 解

此段は平經正が竹生島詣に思ひつきて宗盛とし。手塚太郎金刺の光盛の名に思ひつきて母の片腕を塚に築かしめ。金刺と銘せる合口を作り出で。光盛が信州諏訪の生れなるより。義賢の生國とし。實盛が駒王丸(義仲)を母に抱かせて。中三權頭このかみの許へ落しやりしは其まゝにして。彼れが鬢髪を黒く染め。錦の直垂を着て。加賀篠原に手塚に討れたるより。其時實盛討手を乞うけ云々。軍の場所は北國篠原。加賀の國にて見參ノなど誓はしめ。砥並山の戦に擒はれて。備中の板倉にて殺されし。瀨尾兼康を取合すなど。作者が趣向の種を。如何なる處に取りて。如何に仕組めるかは。左の文を讀まば自ら明らかなるべし。

源平盛衰記に信濃國安曇郡に木曾といふ山里あり。彼所の住人に木曾冠者義仲といふは故六條判官爲義が孫。帶刀先生義賢には次男なり。義仲爰に居住しける事は父義賢は武藏國多胡郡の住人。秩父次郎太夫重澄が養子なり。義賢武藏國比企郡へ通りけるを久壽二年二月に左馬頭義朝が嫡男惡源太義平相摸國大倉の口にて討つてけり。義賢は義平には叔父なれば木曾と惡源太とは從父兄弟なり。父が討れける時は木曾は二歳名をば駒王丸といふ。惡源太は義賢を討て上京しけるが畠山庄司重能にいひ置けるは駒王をも尋ね出して必ず害すべし。生残りては後惡かるべしと。重能慥に承りぬとはいひけれどもいかゞ二歳の子に刀をば振るべき不便なりと思ひて折節齋藤別當實盛が武藏へ下りたりける。悦びて駒王丸を母に懷かせてこれ養ひ給へといひやりたりければ實盛請取りて七日置きて案じけるは東國と

いふは皆源氏の家人なり。愁に養ひ置きて討れたらんも憑む甲斐なし。討せじとせんも身の煩ひたるべし。兎も角も叶ひ難しと思ひて。木曾は山深き所なり。中三權頭は世にあるものなり。隠し養ひて人となりたらば。主とも憑めかしとて。母に懷かせて信濃國に送り遣す。齋藤別當情あり。母懷に抱へて泣くく信濃へ逃越へて。木曾中三權頭に見參して。抱き出していふやうは。我は女の身なり。甲斐くしく養ひ立てんとも覺えず。深く和殿を憑むなり云々。兼遠哀と思ひける上。此人は正しく。八幡殿には四代の御孫なり。世の中は淵は瀬となる喩あり。今こそ孤子にておはすとも。知らず末の世には。日本國の武家の主ともなりやし給はん。如何様にも養ひ立て。北陸道の大將軍になし奉つて。世にあらんと思ふ心ありければ。憑もしく請取りて。木曾の山下といふ所に隠し置きて。二十餘年が間育み養ひけり云々」

平家物語に落ち行く勢の中に。武藏國の住人長井の齋藤別當實盛は。存ずる旨ありければ。赤地の錦の直垂に。萌黃威の鎧着て云々。只一騎返し合せ。防ぎ防ぎ戦ふ。木曾殿方より手塚太郎進み出で。あなやさし。如何なる人にて渡らせ給へば。味方の御勢は皆落ち行き候ふに。只一騎残らせ給ひたるこそ。優に覺え候へ。名のらせ給へと詞をかければ。先づかういふ和殿は誰ぞ。信濃の國の住人盛衰記には。信濃國諏訪の住人手塚太郎金刺の光盛とこそ名乗りたれ。齋藤別當さては互によき敵なり。但し和殿をさぐるにあらず。存ずる旨あれば名乗る事はあるまじきぞ。寄れ組まう手塚とて。馳せ並ぶる所に。手塚が郎等主を討せじと云々。手塚の太郎郎等の討たるを見て。弓手に廻り鎧の草摺引上げて。二刀刺し。弱る所を組み伏す云々。手塚太郎馳來る郎等に首とらせ。木曾殿の御前に參り畏りて。光盛こそ奇異の僻者と組みて。

討ちて参り候へ。侍かと思見候へば。錦の直垂を着て候。又大將軍か
と見候へば。續く勢も候はず。名乗れくと思せめ候へつれど。遂に
名乗り候はず。聲は坂東音にて候。ひつると申しければ。木曾殿あ
つばれ。是は齋藤別當にてありござんなれ。それならんには義仲
が上野へ越えたりし時。をさな目に見しかば。白髮の糟生かすぶなりし
ぞかし。今は早七十にも餘り。白髮にこそなりぬらん。鬢髭びんひげの黒
きこそ怪しけれ。樋口の次郎兼光は。年頃馴れ遊びて見知りたる
らん。樋口召せとて召されけり。樋口の次郎一目見て。あなむさん。
齋藤別當にて候ひけり。とて涙を流す。木曾殿それならんには。早
七十にも餘り。白髮にこそなりぬらん。鬢髭の黒きはいかにと
宣へば。やゝありて。樋口次郎涙を抑へて申しけるは。さ候へば。其
様を申し上げんと仕り候ふが。餘りに哀あはれに覺え候ひて。先づ不覺
の涙のこぼれ候ひけるぞや。齋藤別當は。常に兼光にあひて。物語

し候ひしは六十に餘りて軍の陣へ向はん時は鬢髭を黒う染めて若やかうと思ふなり其故は若殿原に争ひて先を駈んもおとなげなし又老武者とて人に侮られんも口惜しかるべしと申し候ひしが誠に染めて候ひけるぞや洗はせて御覽候へと申しければ木曾殿さもあらんとて洗はせて御覽ずれば白髮にこそなりにけれ又齋藤別當錦の直垂を着ける事も最後の暇申しに大臣殿(宗盛)へ参りてかう申せば實盛が身一つにては候はねども云々今度北國へ罷り下り候はゞ定めて打死仕り候ふべし實盛もとは越前の國の者にて候ひしが近年御領につけられて武藏國長井に居住仕り候ひき事のたとひにも候ふぞかし故郷へは錦を着て歸ると申すことの候へば何か苦しう候ふべき錦の直垂を御免候へかしと申しければ大臣殿やさしうも申したりけるものかなと錦の直垂を御免ありけるとぞ聞えし云々

此淨瑠璃は寛延二年十一月廿八日。竹本座の興行に上せしものにて。作者は並木宗助三好松洛。いづれにしても。もう少し手際よく出来さうなものなり。趣向は巧に過ぎて作りものらしく。文章はいまはしく拙し。出雲半二等の筆と。くらぶべくもあらず。宗輔は嫩軍記の須磨陣屋の二段によつて。名聲嘖々たれども。他の作に至つては。大に疑ふべきものあり。こは餘言にいふべし

源平布引瀧

綿繰馬の段

「實盛」は武藏の人、壽

永二年加賀篠原にて、手塚
光盛の爲めに討たる、總解
を見よ、

「某元は源氏の家臣新院云々」

實盛が平家に降りしは、新院(崇徳上皇)御謀反

の時にあらず、主義朝が反

せし時なるを、かく作れる

なり、總解を見よ、

「矢橋」は近江栗太郡に

あり、天津より航路一里、矢

橋の歸帆として近江八景の一

なり、堀川次郎百首「には

てるや矢橋の渡りする船を
いくぞたび見つ勢田の橋も
り」

「御臺」は貴族の妻の稱

御臺盤所(俗にいふ勝手)の
略にて、婦人は食物を調理
するよりの名なりと、

綿繰馬の段

出して走行く。音しづまれば葵御前。太郎吉連れて立出で給ひ。

詞聞及びし實盛殿。お目にかゝるは初て。段々のお情。置忘れじ

と有ければ。是はく御挨拶。詞某元は源氏の家臣。新院の御

謀叛より。思はずも平家に従ひ。清盛の祿を喰といへ共。舊恩

は忘れず。今日の役目乞受たも。危きを救はん爲め。然るにふ

しぎなは此肘。詞矢橋の船中にて某が。切落した覺え有る。髓に

此手に白旗を持ちつらん。御存なきやと尋ぬれば。成程く。其

簾も手に入りしが。其切つたと有る者の。年恰好は。ホウ。年頃

は廿三四。せい高く色白成る女。髓に名は小まんと。聞より九郎

助夫婦共。詞のふ夫は。わしが娘の小まんど。まんじやとう

ろたへ歎けば。御臺も俱に扱こそれよと。骨身にこたへ太郎

「せらむふ」
あらそふ、

はからかひ

「宗盛」は清盛の第二子
實は京都清水坂の、一傘工
の子なりといふ、平氏の棟
梁なれども、性儒怯にして
檀の浦の戦、自ら決するこ
と能はず、擒はれて鎌倉に

吉は。只うろくと。わけも涙にくれ居たる。九郎助は老の逸
徹。息も涙もせくりかけ。詞コレ實盛殿。娘が肘は。何科有つ
て切つたぞ。チエ、むごたらしい事仕やつたのふ。此娘には。
六十に餘る親も有る。七ツに成る子も有るぞや。よもや盗も銜
もせまい。何誤りで何科で。サアく。サ、それ聞ふくと。
せちがひかゝれば女房も。詞ヲ、そふじやく親父殿。骸はど
こに捨て有るぞ。次手にそれも聞いて下され。ヲ、それもナア。
今頃は犬の餌食。當座に死んだか生きて居るか。サア有やうに
いへ。エ、言はぬかい。コレ情じや。いふて下されと。夫婦が泣
出す心根を。思ひやつて實盛。扱は其方達が娘よな。詞聞も及
ばん宗盛公。竹生島詣下向の御船。勢田唐崎の方へ漕出す所に。
矢橋の方より廿餘りの女。口に白絹を引くはへ。ぬき手を切つ
てさつくと。浮つ沈つ遊ぎくる。あれ助けよあれ殺すなど。舩

送られ、遂に近江の篠原に斬らる、年三十九。

「竹生島」は琵琶湖の北部にありて、淺井郡竹生村に屬し、方二十町ばかりの島なり、島中辨財天を祀り、

藝州嚴島、相州江の島と並稱して、三辨天と呼ぶ、源平盛衰記に、平經正此祠に

賽して、琵琶を彈ぜし由を載す、これ等の事より作れるなるべし、

「勢田」は栗田郡にあり湖水より流出する、勢田川に架せる橋(勢田の橋)を以て名高し、古來要害の地

「唐崎」は滋賀郡滋賀村湖濱の稱にして、八景の一なる、唐崎の一つ松を以て名高し、

「比叡の山嵐」は叡山おろしとて、昔湖船の最も怖れしところ、往々難破の不

たゝいてあせれ共。折からひえの山嵐。柴船の助もなく。水におぼれる不便さに。三間擡を投込んで。ねんなう御船へ助け乗せ。サユリヤ。いかなるものぞと尋ぬる内。追手と見えて聲々に。詞其女こそ源氏方。白簾隠し持つたるぞ。奪取ればひ取れと。叫る聲を聞よりも。船に居合す飛彈左衛門。飛かゝつてもぎ取らん。イヤ渡さじと女の一念。若や白簾平家へ渡らば。末代迄源氏は埋木。詞女が命にかへられずと。白簾持つたる肘をば。海へさんぶと切落し。水底へ沈みしと。船を汀へ漕戻し。からだは陸へ上げ置しが。廻りくつて此内へ。白簾諸共歸りしは。親を慕ひ。子を慕ひ。流寄つたかテ不便やと。涙交の物語。聞く程悲しく夫婦はせき上。詞ア、道理で孫が目にかゝり。取つてくれいとわんぱくも。むしがしらした親子の縁。三人かゝつて放れぬ白簾。心よふ放したは。我子に手柄させたさか。死んでも

幸を見る「急がば廻れ」といふ諺も、これより出でしものにて、船路は近けれど風の危険あるゆゑ、急ぎの事は安全なる、勢田廻りをすべしといふ意なり、「れんなう」はわけなくの意、

「埋れ木」は世に出づるを得ざるをいふ（埋れ木は土中に久しく埋れたる木、質黒檀の如く、仙臺地方にて、種々の器物に作り、埋木細工と稱す）

「健氣」は殊勝、

夫程可愛か。手にとゞまつた一念が。物いふ事はならぬかと。御臺諸共取すがり。泣より外の事ぞなき。涙おさへて太郎吉は。ずつと立つて。詞ヤイ侍。よふかゝ様を殺したなど。ぐつとねめたる恨の眼。自然と實盛膽にこたへ。詞ホウ健氣なりたくまじや。母が筐はソリヤそこにと。いふにかけ寄り肘を抱き。詞かゝ様呼んで此手をば。骸へ接で下されと。あなたへ持行きこなたへ頼み。身を投げふして泣しづむ。かゝる歎の折も折。所の者共死骸を持込み。詞コレく。是の娘が切られて居たが。肘がかたし紛失した。外はまんぞく渡しますと。言捨てこそ立歸る。ヤレ太郎吉よかゝが顔。是が見納め見て置けと。いふにかけ寄り抱付き。詞コレなふかゝ様拜ます。無理もいふまい。言ふ事聞こふ。物いふて下され。祖父様詫言して下されと。泣きこがるれば。詞ヤレ。夫がマア。詫言に及ばふか。こつちより

「權」を佛花に供するは其花無熱池の、青蓮花に似たるゆゑなりとぞ、

「涙とうかむ工夫」といへり、涙と共に工夫のうかむなり、

「五臟」は心、肝、脾、肺、腎、

あつちから。物言たうて成まいけれど。此世の縁が切れてはな。
 互に詞はかはされぬわい。死骸の有所をどふぞまあ。尋ふかと
 思ふたれど。なま中に持つて戻り。顔見せたらたまるまいと。
 そちがねる迄待つていた。詞へエ男勝な女で有つたが。それが
 却て身の仇と。成つて死ぬるか可愛やと。悔涙に女房も。詞ア
 、嗚死しなにこなたやおれに。言たい事が有つたで有る。ヲ、
 可愛や／＼／＼なア。太郎吉よ。水没で櫛の花でも手向てくれ。
 詞イヤ／＼おりやいやじや。かゝ様が物いはにや。聞かぬ／＼
 とわんばくも。ヲ、夫ばつかりが道理じやと。思ひやる程いち
 らし。實盛始終手を拱き。人々の愁歎に。涙とうかむ工夫。
 思ひ付いて傍に立寄り。詞斯かい／＼敷女。譬片腕切つたり迎。
 則座に息も絶まじきが。白簾を渡さじと。一心腕に凝かたまり。
 五臟に残る魂なし。再び肘を接合さば。靈魂歸り息する事もあ

「眉間尺」は干將の手にして、眉間一尺ありしゆゑの名なりと、楚王其首を七日七夜煮て、鼻の蓋を開けたるに、口に含みし劍の先を吹きかけて、父の仇を報じたりといふ、なほ別記を見よ。

「堅田」は滋賀郡にありて、大津の北三里餘、湖水の最も狭き處にして、埒頭に浮御堂あり、堅田の落雁とて、八景の一
「用心合口 金刺といふ銘を

らん。詞誠に彼眉間尺が首。三日三夜煮られても。凝たる一念。恨を報ぜし例も有る。今此肘に。濫り有るもふしぎ。又は御簾の威徳もと。切つたる肘に白簾持たせ。物は試と接合せば。我子を慕ふ魂魄も。御簾の徳にや立歸り。息吹返し目を開らき。詞太郎吉どこにぞ。太郎吉と。いふに恠り。詞ヤレ蘇生たは。爰に居る。爰にくと取絶る。詞ナア御臺様。白簾は御手に入つたか。太郎吉にたつた一言。いひたい事がと斗りにて。今ぞはかなく成にけり。詞ヤアこりや小まんよ。コレ小まん。小まんにやい。ハア可愛やな。モウそれが遺言かイヤイ。言たい事とは。チ、合點じゃく。そちが筋目の事である。イヤ申し。何を隠しませうぞ。此者は二人が中の娘でもござりませぬ。堅田の浦に捨てござりました。コレ御らふじて下さりませ。此懷に持つております用心合口。金刺といふ銘をほり付け。氏は平家何某

ほりつけ一 これ、手塚を金刺の光盛といへるより作れるなり、總解を見よ、

●●●● は産の時に用ふる薬、催生など書く、

「駒王丸」 は義仲の幼名父義賢の幼名を取れるとに作りしなるべし、總解を見よ、

「いと様」 は若様の意、今多く女兒に用ふ、

が娘と。書付もござりますれば。若親たちが尋ねてこふか。取返しにもこふかと。そればつかりを案じて居て。今死なふとは存じませなんだ。生返つたが猶思ひ。餘り是はどふよくな。ほいないわかれと取付いて。わつと斗りに泣居たる。俱になしむ葵御前。只ならぬ身にせきのぼす。五臓の苦しみ御産の腦。實も驚き。詞ヤアこりや夫婦の者。泣いて居る所でなし。御臺は産の惱あり。いたはり申せと。一間へ伴ふ間もなく。用意の屏風引廻はし。お腰抱やはやめやら。祖父祖母が介抱に。心利たる實盛が。彼白籬を押し立てれば。實にも源氏を守の印。若君安々御誕生。初聲高く上げ給ふ。父義賢の雅名を。直に用ひて駒王丸。後に木曾義仲と名乗り給ひし大將は。此の若君の事なりし。九郎助歎も打忘れ。詞ア、お生れなされたいと様の御家來には此太郎吉。チ、それ〜。かゝるめでたい折なれば。

「手塚の太郎光盛」 母の片腕を塚に築き「手塚の太郎」と名乗らせ、片腕のよい御家來とは、巧に過ぎて頗る拙し、如何にも作り事めきたり、

「信州諏訪」 は手塚の生國、義賢とは作れるなり、總解を見よ、
「橋の頭兼遠」 に義仲の預けられし事は、總解を見よ、
「瀬尾の十郎」 は瀬尾太郎兼康に取れるなるべし、維盛に従ひ義仲を攻めて擒はる、後備中板倉に死す

實盛様御執成と。願へば點き。ホウ幸ひく。詞死たる女の忠義を思へば。骸は灰に成る虫も。一心の凝塊りし肘。うかつには焼捨がたし。其手を直に塚に築き。太郎吉が名を今日より。手塚の太郎光盛と名のらせ。御誕生の若君。木曾殿へ御奉公。則是が片腕の。よい御家來と披露する。御臺は氣色を改め給ひ。詞尤父は源氏なれ共。母は平家の何某が娘と。九郎助の物語。一家一門廣い平家。若清盛が落し子も知れず。まづ成人して。一ツの功を立てた上でと。仰に實盛。ハ、ア御尤も至極く。詞先此所に御座有つて。若君御誕生と聞えては一大事。義賢の御生國。信州諏訪へ立越し。御家來權の頭兼任に預け。御成人の後、ふたゝび義兵を上げ給へ。九郎助夫婦御供と。すゝめに任する表の方。いつの間にかは瀬尾の十郎。小柴垣より顯れ出で。詞ヤアそりやならぬく。かく有らんと思ひし故。死骸を持せ

窺ひ聞く。義賢が悴。男子と有るは見遁しならず。いで請取らんとかけ入れば。實盛やがて立ふさがり。詞ア、これ貴殿も生通しにもせまい。海共山とも知らぬ水子。見遁しやるが武士の情ヤアいふな實盛。扱は汝二心な。平家の祿を喰で。源氏の胤を見遁す不忠。ぐつとでも言つて見よ。じたい此くたばつた女めが。白簀奪ひ取つたる故。平家方は夜がねられず。思へばく重罪人めと。死骸を立蹴にはつたと蹴飛し。詞サア生れたがきめ渡せ。異義に及ぶと撫切りと。飛でかゝるを太郎吉が。母の譲の九寸五分。抜より早く瀬尾が脇腹。ぐつと突たる小腕の力。是はと人々驚く中。詞よふかゝ様の死骸をば。踏たな蹴たなど。ゑぐりくるく流石の瀬尾。急所の痛手にどつかと伏し。ヤレでかしやつたくと。ほめそやしても夫婦共。跡の難義を思ひやり。胸轟す斗り也。暫く有つて瀬尾の十郎。詞何と葵御前。是で

「譜代」は代々の家臣の稱、

「肋をひけて金刺と」句
頗るいやらし。

「心も亂れ焼」 とかけた
り、亂れ焼は刀の刃のくも
りの、亂れうねりたる焼。
「難波」 難波は布引の淵
に入れりといふ、難波六郎
經俊に取れるなるべし（次
段を見よ）

太郎吉は、駒王殿の御家來になられうかや。平家譜代の侍。瀨尾の十郎兼氏を。討とめた一つの功。成人を待たずとも。召つかはれて下さりませ。誠に思へば一昔。部屋住の折から。手廻りの女に懐胎させ。詞堅田の浦へ捨てたる平家の何某は。某又廻り合ふ印にと。相添へ置いたる此劍。廻りく〜て我が骸。肋をひけて金刺と成つたるも。孫めが不便さ故。初めての御けらいに。平家の縁と嫌はれては。娘が未來の迷ひといひ。一生埋れる土百姓。詞七ツの年から奉公せは。木曾の御内に。一といふて二のなき家來。取なし頼む實盛殿。サア瀨尾が首取つて。初奉公の手柄にせよと。非道に根強き侍も。孫に心も亂れ焼。すらりと抜いて我首へ。しつかと當て兩手をかけ。ゑい〜と引落す。難波瀨尾と平家でも。悪に名高き其一人。最期は道健氣なり。夫婦も泣々其首を。太郎に持たせ御目見え。葵御前は若君抱き。

「主従三世」は其縁を深からしめん爲め、いひ出でたる語なり、前に解す、

「適々さりなむら云々」末に篠原にて、首を取らする伏線、

「古郷へ歸る錦の袖ひるがへし云々」實盛、宗盛より錦の直垂を請受けて之を着し、討死をなせしより書けり、總解を見よ、

「月額」は額白又月白ともいひ、額に月の如く白毛ある馬、

「鍵繩」は先に鍵のつきたる繩、

詞初ての見參に。平家に名高き侍を。討取つたる高名。主従三世のきえんぞと仰を聞くより太郎はつゝ立ち、詞サア是からわおれは侍侍なればかゝ様の敵。實盛やらぬと詰かけたり。ナ、適々去ながら。四十近き某が。稚汝に討れなば。情と知つて手柄に成るまい。若君と諸共に。信濃國諏訪へ立越し。成人して義兵を上げよ。其時實盛討手を乞請け。古郷へ歸る錦の袖。ひるがへして討死せん。先夫迄はさらば。いづれもさらば。

詞家來共。のりがへ引けと呼はれば。はつと答て月額。栗毛の駒を引出て。手綱追取り乗る中に。いづくに隠れ居たりけん。矢橋の二惣太踊出で。詞ヤア先達て注進の。褒美を無にした其かはり。實盛が二心で。駒王丸を北國へ下す段々。直に注進。詞つがふたあらそうなど。言捨てかけ出す。實盛透さず馬上より。用意の鍵繩打かくれば。首にかゝつてきりく。引よ

「綿繰馬に云々」これ綿繰の機械に、馬の如く乗りしなり、段の名となす、

「蛇は一寸にして云々」は啄木鳥は卵からうなづくといふ意、古諺に「蛇は一寸にして人を呑むの氣あり」「其元様は顔に皺云々」「其時こそは鬚髭を墨に染め」「坂東聲の首取らば」「此若が恩を思ふて云々」加賀篠原に、手塚實盛の首を獲て義仲に示し、名を問へど答へず、たゞ首を木曾殿に見せよと、聲は坂東音なりしといふ、義仲其實盛たるを思へど、鬚の黒きを疑ひ、

せ引上げひつつかみ。適儕は日本一の。大慾無道の曲者めと。

鞍の前輪に押付けて。首かき切つて捨てけり。其後に手塚の太

郎。母が筐の小合口。金刺取て腰にぼっこみ。綿繰馬にひら

りと乗り。ヤア／＼實盛。詞か、様殺して逃げるかいぬか。も

ふおれが名は手塚の太郎。コリヤ此金刺の光盛なり。いなすと

爰で。勝負／＼と呼はつたり。ナ、でかしたく。蛇は一寸に

して其氣を得る。自然と備はる軍の廣言。成人して母の怨。

顔見覺えて恨をはらせ。詞イヤ／＼申し。孫めが大きい成る中

には。其元様は顔に皺。髪はしらがで其顔かはる。ムウ成ほど。

其時こそ鬚髭を墨に染め。若やいで勝負をとげん。坂東聲の首

取らば。池の溜で洗ふて見よ。軍の場所は北國篠原。加賀の國

にて見参／＼。詞實其時に此若か。恩を思ふて討すまい。生な

からへておつたらば。此親父めが御簾持。兵糧焚はわたしが役

舊交ある今井兼平に見せしむ、兼平涙を垂れ、これ實盛なり、彼れ昔語るに、髪を染めて壯者に伍する事を以てす、今果して然りと、之を洗へば白髪に變ず、義仲これを見て、幼時命を助けられし事を思ひ、撫然として泣たりといふ、都て總解を見れば明なり、

首切る役は此手塚。 くび て づか ホウヲ、くく。 互に馬上でむんずと組。
りや は おつ らうむ しゃ かな い くさ かぜ くみ
兩馬が間に落る共。 老武者の悲しさは。 軍にしつかれ風にも
ぐめる。 古木の力もをれん。 詞其時手塚合點く。 ついに首を
も搔落され。 ナ、篠原の土と成る共。 名は北國の街に上げん。
さらばくくと引別れ。 歸るや駒の染手綱。 隠れなかりし弓取の
名は未代に有明の。 月もる家を跡になし。 駒を早めて立歸る。

源平布引瀧

松波琵琶の段

總解

此段は三人上戸の増補にして。今は淨瑠璃にも芝居にも。これのみを用ふる事となれり。さて題號を待霄侍從優美藏人源平布引瀧とせるは。近衛の大宮(近衛二條兩帝の后)に仕へたる待霄の小侍從(石清水の檢校別當大僧都紀光清の女)といへる才女と。後徳大寺左大臣(實定)に仕へたる優藏人といへるみやび男とを。本として仕組めるは論なく。源平布引瀧は仁安三年七月七日。清盛を初め平家一門うちつれて。攝津の布引の瀧に遊びしに。悪源太義平の怨靈雷となりて。其首を斬りし難波經房(盛衰記には經俊)をさき殺せしなどあるよりの思ひつきにてもあるべし。そはともあれ。此段は高倉天皇が。御秘藏の紅葉を折りて。酒を暖めし仕丁を

御咎めもなく。却つて唐詩の心を得たりと。ほめ給へる有名の御事蹟を骨子として。治承三年の冬(高倉天皇の御世)清盛の爲めに鳥羽殿に幽せられ給ひし。後白河法皇の御事とし。鹿が谷の密事を平氏に漏らせる。多田藏人行綱を優藏人にあてゝ侍霄侍従との間に。小櫻といふ子をまうけ。かれこれ巧みに趣向をめぐらして作れる事は。左に掲ぐるところと。本文とを對照せば。自ら會得すべし。

紅葉の事。平家物語に「去んぬる承安のころほひは。御年十歳ばかりにやならせおはしましけむ。餘りに紅葉を愛せさせ給ひて。北の陣に小山を築かせ。檣楓の誠に色をうつくしうもみぢたるを植ゑさせ。紅葉の山と名づけて。終日に叡覽あるに。なほ飽き足らせ給はず。然るを或る夜野分はしたなう吹きて。紅葉皆吹き散らし。落葉すこぶる狼籍なり。殿守の伴のみやつこ朝ぎよめすと

て。これを悉く掃き捨て、けり。残れる枝散れる木の葉をばかき
あつめて。風すさまじかりける朝なれば。縫殿の陣にて酒を暖め
てたべける。薪木にこそしてけれ。奉行の藏人行幸より先にと。い
そぎ行きて見るに。跡かたもなし。如何にと問へばしかぐと答
ふ。あなあさまし。さしも君の執し思し召されつる紅葉をかやう
にしつる事よ。しらず汝等。禁獄流罪にも及び。わが身もいかなる
逆鱗にか預らんずらむと。思はじ事など。案じつゞけて居たりけ
るところに。主上いとゞしく。夜のおとゞを出でさせもあへず。か
しこへ行幸なりて。紅葉の叡覽あるに。なかりければ。いかにと御
尋ねありけり。藏人なにと奏すべき旨もなし。ありのまゝに奏問
す。天機殊に御心よげにうち笑ませ給ひて。林間に酒を暖めて紅
葉を焼く。白氏文集卷十四、林間暖酒焼紅葉、石上題詩拂綠苔とい
ふ詩の心をば。さればそれらには誰か教へけるぞや。優しうも仕

りたるものかなとて。しきりに叡感にあづかりし上は。敢て勅勸
はなかりけり。

待。霄。の。侍。從。優。藏。人。の。事。盛衰記に「待宵の侍從と申しける事は
後徳大寺左大將。忍びて通ひ給ひけり。きぬくゝになる曉。又來ん
夜をぞ契り給ひける。侍從は大將の來んとたのめし兼言を。其夜
はゝるくゝ侍居たり。さらぬだに更行く空の獨り寢は。まどろむ
事もなきものを。たのめし人を待ち詫びて。更行く鐘の音を聞き。
いとゞ心の盡きければ。

待つ霄の更けゆく鐘の聲聞けばあかぬ別れの鶏はものかは
と讀みたりければ。誠に堪へずも詠みたりとて。待。霄。と。は。呼。ば。れ。
に。け。り。大將は終夜御物語ありて。あかぬ別れのきぬくゝを引分
けて。歸り給ひける明方の空。何となく物あはれなりけるに。侍從
も共に起き居つゝ。殊更今朝の御名殘。慕ひかねたる氣色にて。遙

に見送り奉り。泣きしほれて見えければ。大將も歸る朝のならひ
とて。振捨て難き名殘の面影。身にそふ心地して。せん方なくおぼ
されける。御伴なりける藏人を召して。侍従が今朝の名殘。何より
も忘れ難く覺ゆるに。立歸りて。何ともいひて參れと宣ひければ。
藏人ゆゝしき大事かなと思へども。時を移すべきならねば。聽て
走り歸りて見ければ。侍従なを元の所に立ちやすらひて。又寢の
床にも入らざりけり。藏人取敢ぬ事なれば。何といふべしとも覺
えざりけるに。明け行く空の鳥の音も。折から身にしみて聞えけ
れば。其前に跪き袖かき合せて。

物かはと君がいひけん鳥の音の今朝しもいかに戀しかるら
ん

と仰せなりとて還りければ。侍従

待たばこそ更行く鐘もつらからめ別れを告ぐる鳥の音ぞう

き

と藏人歸り参りてかくと申し入れければ。大將いみじく感じて
さればこそ汝をばつかはしぬれとの給ひて。所領などあまた給
ひたりけり。此藏人は内裏の六位など經て。事にふれて歌よみ優
なりければ。時の人異名に優藏人といひけるを。此歌世に披露の
後は。物かはの藏人とぞよばれける。

松波琵琶の段

「秋の雲井の御住居も」皇
 後の宮ならましかば一層味
 ひある句なり
 「憂目ばかりて後白河」か
 けたる積りなるべし。後白
 河法皇は、鳥羽上皇の御子
 にして、後鳥羽天皇建久三
 年三月崩御、御年六十六、
 高倉天皇治承三年の冬、清
 盛の爲め鳥羽殿に幽せられ
 給へり、これ等の事より書
 けるなり。鳥羽の離宮は山
 城紀伊郡鳥羽にあり、續世
 繼に「鳥羽殿は、この法皇
 のつくらせ給へれば、さや
 うにや申さんと思へりしか
 ども、白河にもかたなく御
 所とも侍りしかば、白河院
 とぞさだめまゐらせはべり

きのふ迄。秋の雲井の御住居も。けふは淋しき冬枯に。憂目は
 兼ねて御白川の。帝を押籠め奉る。鳥羽の離宮の配所の軒。君
 が叡慮に隨ふは。庭の楓葉斗りなり。うきつれくの官女達。
 一ツ所に寄り集り。詞ノウ若葉局。君様にも。いつもの御殿に
 おはしまさば。紅葉の御遊の御能のと。俱にこちらも樂しむ物。
 此北殿へ押し籠めとは。さつい殺生。わんばくな清盛様の斗ひ
 にて。御宮仕へする者は。漸う仕丁とこちら斗り。ほんの裸百
 官百司。嗚御不自由に有らふのふ。詞ヲ、何によりの御不自
 由は。此程よりの遠ざかり。夜の御殿へ入御成て。女御様とし
 つぼりと。汗かこふとの綸言が。有らふぞいのと打ち笑ひ。暫
 しのうさをはらしける。掖門の官人兩手をつき。詞重盛公より

けると見ゆ。君が御慮に随ふは、庭の楓葉ばかりなり。面白し。且後に紅葉の事をいばんとする伏線。

「お能」の事は關取千兩幟にいへり。

「仕丁」は昔主殿寮に屬して、禁中の掃除庭火などの、雜役につかはれし者。

「裸百官百司」とは面白くつづげたり。「裸百貫」の俗語より書く、百官百司は多くの官人をいふ。

「夜の御殿」は御寢所

「女御」は天子の御寢に侍する女官、中宮に次ぎ更衣の上なり。

「繪言」は天子のお詞

「重盛」は清盛の長子にして、文武忠孝を以て名高き人、父の狂暴を憂ひて、死

を熊野に祈り、治承三年薨

御慮を慰んと。松波檢校出仕なりと。訴ふる間もなく。胸に一

物庭先へ。人目くられます行綱が。探りくつて高欄を。便りに登

る廣椽先。詞たぞお取り次ぎ下されよと。いふに紅葉が差よつ

て。詞ノフ松波檢校とはそなたか。冬されの厭ひもなく。太義

く。幸い火鉢も爰に有る。あたらずしやれとわるざれに。か

たへにそつと取り退くれれば。詞ハ、ハ、ハ、ハ。たつた今迄爰に有

つた火鉢。脇へ直すとは。コリヤ。又意地のわるい事なされま

す。テモがをれ。そんなら是はと紅葉の局。有りあふ紅葉の一

枝を。鼻の先にさし付ければ。詞見る人もなくてちりぬる奥山

のもみちは花の錦なりけりでござりませうがな。ほんに奇妙な

檢校殿。帝様のよいお慰み。此通り奏問せん。ちとの間そこに

と打ちつれて。次ぎの御殿へ入りにける。ア、申しどふぞ私し

も御一所に申し。是は扱胸欲な。又退屈さすので有らふ。

去、年四十二、よき人なればよき役にまはさる、

〔檢校〕 ば盲人の官、もと建業と書き、生佛坊(後鳥羽天皇頃の人)にして、始めて平家物語をうたひしといふ)が其始めなるよし、將軍足利義滿頃より、檢校の字に改め、次座に勾當、座頭を置きしとぞ、

〔行綱〕 の事は總解を見よ

〔冬ざれ〕 「わるざれ」相應ず。冬ざれば冬のあれさびたるをいふ「冬ざれば」などいへるより、出でたる俗語にはあらざるか、
「かわれ」 ばあきれたる時の嘆辭

「見る人もなくて云々」此歌古今集に見ゆ、錦を着て夜行くが如しといへる語り作り、盲人の前に紅葉

御所勤ごしよとらは是これにこまると。つぶやく折をりから小櫻こざくらは。しとやかに一

間まを立ち出いで。詞檢授けんじやう殿召とのめしまする。イザこなたへと何氣なにげなふ

顔かほつくくくと打ち詠なめ。詞ヤアお前はと様さま。コリヤ密ひそかにく

と。行綱ゆきつなは傍見あたみ廻まし。にちり寄より。詞コリヤ小櫻こざくらか。久ひさしやのふ

兼ねて申まを含しめし此度このたびの大望たいぼう。年端としはも行ゆかぬに。父ちちにまさりし大

役やく。出でかしたういやつ。シテ母ははの待宵まちよは。無事むじに暮くしてお居ゐや

るか。いづれの御殿ごてんに勤つとめてをるぞと。問とれて娘むすめはないじやく

り。詞ことばイ、エおかゝ様さまは。清盛公きよもりこうの御殿ごてんに宮仕みやづかへして。過すぎし

御殿ごてんの歌合うたあせの夜よ。只ただ一討ひとうちとねらひ寄より。シテくどふした。

サア見付みけられて口惜くちなしや。敵かたきの手てにかゝつて。はかない御最ごさい

期ご。ホイはつと斗はかりに行綱ゆきつなは。暫しばし詞ことばもなかりけり。小櫻こざくらは涙なみだ

を押おさへ。詞ことばおゝかゝ様の死ししやんした様子やうすも。此御殿このごてんで聞きいた

斗はかり。もふ是これからは杖共つえとも柱共しらとも。思おもふは父上ちちうへお一人ひとり。もしおかゝ

を出して、夜の錦といはしめたる、引用頗る妙「花の錦」などしたる本あれど誤れり、

「待宵」は當時石清水の別當法印、紀光清の女にして、近衛天皇の皇后に仕へたる、待宵の小侍従といへる、有名の才女あり、これをかり用ひて作れるなり、なほ總解を見よ、

「いもせの別れ」は夫婦

の別れの別れ
「とのぬ」は宿直

「けとられ」は様子にて
さとりたるをいふ

様の様に見付けられ。ひよんなお別れをせうかと。それが悲しうござります。云付けられた一々は。私しが首尾よふ仕負せませふ。見咎められぬ中。早ふ逝で下さりませと。稚心の孝行心。不便と思へど聲荒らげ。詞何を心弱い。氣遣ひするな。我れも多田の藏人行綱。ウヌ清盛め。主君の仇妻の敵。今宵の内に首引提。其方にも悦ばせる。君の爲に相い果てし。女房は手柄者。泣いて返るか悔んで返るか。泣くなくと。立派にいへど心には。遠いもせの別れの涙。袖に時雨の霽間なき。未練と心取直し。詞其性根では心元ない。親にふかくを取らするな。アイよふ心得ております。シテ帝の御座は。廓下續きの見付の御殿。直宿の武士仕丁斗りでござり升。フム、よし／＼と。ひそく咄しのみ。折も折。楓の木の間に聞ゆる人音。けとられまじと空とぼけ。詞お同様左やうなら御案内を。頼ます。サア／＼

「一間の中に入相」 とか

けたり

「塵塚や紅葉の落葉云々」

縁の語よくいへり

「螢の虫はよべ云々」

時の流行唄なるべし

當

「幸の此紅葉枝ぶち折つて
焚ませう云々」 これ盛衰

記、平家物語等に見ゆる
有名的事蹟、これを取り來

りて趣向の骨子とせり、し
かして高倉天皇の御事なる

を、後白河天皇に作れり、
なほ總解を見よ、

「咸陽宮の煙の中」 謡曲

紅葉狩に「咸陽宮の煙の中
に、七尺の屏風の上に云々」

咸陽宮は秦の始皇帝が建て
たる大なる御殿にして、項

ござれと手を取つて。奥の一間へ入相の。木々の梢も哀れそふ。

峰に響きし淋しさを。爰にこたふる塵塚や。紅葉の落葉掃寄せ

く。ほうきてん手に仕丁共。扱もやさしやナ。螢の虫はよべ

忍ぶ。心か火を燈すへ。ハリヤサ。コリヤサ。ヨイヤサ。詞ヤ

コレ詞平次。おいらに掃除ふり向けて。悪いぞよく。ア、イ

ヤおれも漸々今仕廻ふた。サ、何と一あたりあたたらうか。チ、幸

ひの此楓。枝ぶち折つて焚火にせうと。心なき仕丁共。盛りの

枝葉へし折踏み折。落花狼籍。木の葉かき寄せすり火打。ほく

ちにうつせば秋の山。烈しき嵐に吹付られ。咸陽宮の煙の中。

ヤア藤作來てあたれと。足投出し尻もつ立。詞エ、心地よいは。

是で惣身があたゝまり。とんと寒さ忘れたと。暖氣を衛士の簞

火ならで。三人焚火に餘念なく。鼻歌交りの折りこそ有れ。一

間を出づる若葉の局。夫れと見るより悔りし。詞コレそこな衆

羽が之を焼きし時、三月月火消ぬざりしとぞ、曾子固が詩に「咸陽殿裏三月紅、
 稱業已隨三煙盡一滅」
 「暖氣を衛士」とかけたたり、衛士は昔衛門府に屬して禁闕を守りし武士、夜篝火などを焚く、こゝは衛士も仕丁も同じ事なり、
 「叡聞」は天皇のお聞き
 「林間酒を暖めて云々」白氏文集に「林間暖酒焼紅葉、石上題詩拂緑苔」
 「寒夜に御衣を云々」これ延喜の御代とて、後世目出だきために引く、醍醐天皇の御事なり、天皇は宇多天皇の御子、別記に大鏡を引く、
 「九献」は宮中女官等の酒の異名（九献の式より出するべし）

大事の紅葉を。焚火にするとはめつそうな。叡聞に達したら。大體では有るまいぞや。我君様へ此通り。申上げんといひ捨て。局は奥へ入る跡に。恟りはいもう仕丁共。焚火を打ち消し踏消して。狼狽騒ぐその所へ。紅葉の局は白銀の。銚子土器たづさへて。しとやかに立出て。詞ノウ仕丁共。御寵愛の紅葉を折つて焚火とせしは。狼籍に似て狼籍にあらず。林間に酒を暖めて紅葉を焚くといふ詩の心。下々には有る者共と叡感有り。寒夜には御衣を脱し帝も有り。嘸寒からんと。君より九献を下さるゝ。皆有り難ふ思やいのと。聞より三人一同に。蘇生たる心地にて。おづくと這出で。詞科を御赦さへ有るに。勿體ないく。我々に御酒を下さるゝは。ノフ又五郎。平次。有がたいと申しませうか。忝ないと申ませうか。宜しうお禮おつしやつて下さりませ。エ、有難いくく。とゑらいめに逢ふかと。案じたと

「殿上から」は御殿からの意、天子の常に居給ふ清涼殿に、殿上の間といふあれど、それまでにておなし

「舌つゞみなるは瀧呑」面白し「津の國の鼓が瀧をうち見れば川邊にちやんとたんぼの花」

「火入れず」は上酒なり「くだを巻き上げし御籠」

は違ふて忝ない。マアく「ばい呑ふ。爛仕や藤作。合點じやと。木の葉落葉をかき寄せく。吹付たき付是を見よ。詞綸言に。酒を暖め紅葉をたくとやら。殿上から御赦された。天井拔の酒盛じや。サアく。爛もよいはと又五郎。大土器を取出し。詞是で一つづゝやらかそう。マアく藤作から。ハテ年役に又五郎始めや。ナ、そんなら我れ等と丁とつぎ。息なしにがぶく。扱ア、忍いはく。こちとらが呑む酒と違ふて。いや又格別。どふもいへぬ。ム、味い／＼と舌づゝみ。なるは瀧呑み引受く。詞藤作ちよつと押さへふかい。然らば平次が問いたそと。さいつさゝれつ數重りて。とろく目。詞何んと藤作。平次。忝い事じやないか。さつきに。しほり首でも討たりよかと思ふたに。火入れずを下さるゝとは。此又五郎有りがたふて。涙がこぼれる。わがみ達は何ん共ないかと。そろくくだを巻上

とかけたり。くだを巻くは竹の管に糸を巻くより、酔などして小言を長くいふものを稱す、

「尋常」 はずなほ、しなやかなどの意

「胴ばりめらう」 は剛情あま

「金輪際」 ほどこまでもの意、佛説に大地百六十萬由旬の底に金輪あり、といふより出づ、

げし。御簾の内より小櫻は。おかへ銚子とさし出せば。平次立ち寄り。詞是れはマアく。お氣付けられて忝い。取分けて小櫻様。年はも行かぬに大内の勤。よふなされますな。マアく。爰で一トあたりなされませと。無理にこなたへ抱おろし。詞テモ扱も。尋常な生れ付。コレめつたに色事せまいぞへ。ヲ、そんな事はしらぬはいのと。立上るを抱き留。詞ハテマアくあたかいな。コレ小櫻様。いつぞは問ふと思ふていたが。幸いじや。アノおまへのと、様の名は。何んといなど。問れてはつと赤らむ顔。詞マ、コレ。お前のと、様の名は。多田の藏人行綱と云はふがな。イ、エ。アノ源氏方で有ふがの。イ、エ。エ、是程事を分けていふに。隠しあがる胴ばりめらう。斯云ひ出したら金輪際。うぬが親の假名實名。聞き抜かにや置かぬのじやと。早ねちかゝる腹立上戸。藤作は高笑ひ。詞ハ、ハ、ハ、ハ

「しかつべらし」は尤も
らしの意、「しかありつべ
し」の略なりと、俗に鹿爪
など書く
「ちつべい」はちさきも
のを罵る語

、、、、平次がしかつべらしい顔をして。年はも行かぬ子を
とらへ。おとなげない嗜みやいのく。ハ、、、、。ヤイく
藤作。此ちつべいめ。合點が行かぬ頬がまへ。詮義するのがな
におかしい。ハ、、、、。ワハ、、、、。エ、笑やあがるな。お
かしくないぞ。サア小悴。ぬかさねばしめ上げると。かさにか
つて罵れば。こらへくし又五郎。わつと斗りにむせ返り。
詞エ、無得心な平次。いかに忠義じゃ迎。白状せねばしめ殺すと
は。餘り胴欲といふ物じゃはいのく。コレく小櫻様。マア
く爰へと手を取つて。涙ながらにひざ摺寄せ。詞コレ平次が
どの様に云はふと。何んにもこまる事はないぞや。マア可愛そ
ふに。おろくしてゐるわいの。あのお前のと、様の名を云は
ぬと。痛いめにあはねばならぬ程に。サアわしに云ふて聞かさ
つしやれ。サ、誰れも聞かぬやうに。ちいさい聲で云ふて聞か

「臍がよれる」 は可笑さ
 に堪へぬをいふ、餘り笑へ
 ば、腹にきくよりいふなる
 べし、
 「むつと顔」 は憤とした
 顔。三人上戸の書き方頗る
 拙し、箱根靈驗記と比べ物

さつしやれ。サ、誰れも聞かぬやうに。あいさい聲でいふて聞か
 さつしやれ。ヤ、イ、ヤそんな事はしらぬわいの。チ、く
 子心に親の大事を隠すのは。尤じゃくく。道理じゃはいの。
 ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、泣くはく。こりやおかしい。ヤこいつ
 は有り難いわい。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、エ、腹が立つくく。
 あたまだるい。爰へ引き摺てこいやい。ハテ其様にむごふせい
 でも。詮義は成る事じやはいの。何んじや又泣くか。ハ、ハ、ハ、
 ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、チ、おりや又我れが笑ふので。猶悲しいくと。
 霰の様な涙をこぼし。しやくり上れば。詞コリヤたまらぬ。ハ、
 ハ、ハ、ハ、臍がよれると打ち轉て。腹をかゝへる笑ひ上戸。泣き
 上戸。中に平次がむつと顔。詞何にかわいらは。おれが源氏の
 餘類を。詮議する邪魔するのか。エ、おれに任して部家で休め
 達つて意地ばると。清盛様へ此通り申し上げふか。ハ、ハ、ハ、ハ、

にならず

「袖は涙のぬれ翼云々」 縁

の語一寸面白く書きたり

「せひも渚」とかけ「千鳥足

とつづけて「ぬれ翼」に應

ず、

「高小手」 は背にて小

手を高く縛り上ぐるをいふ

「責せつてう」 は此上な

く責めさいなむこと

「驚く胸も板椽先」 とか

けたり、紋切形

「折檻」 は罪を責めこら

すこと、漢の朱雲が直諫し

て、檻を折りし故事を轉用

したるなりと、

其やうに腹立ちやんな。行けなら行くわいの。ハ、ハ、ハ、ハ。サ

ア泣殿ござれと引つ立てられ。何んとこたへも正躰なく。袖は

涙の濡翼。ぜひも渚の千鳥足。泣いつ笑ひつ連れて行く。平次

は用捨もあら繩たぐり。逃行く小櫻驚掴み。ぐつと引きよせ高

手小手。詞サア是からが根くらべ。ぬかし上れと竹箒。遠慮會

釋も小腕にくつと。差し込みこち上れば。詞アレエく。術な

いわいの。苦しくば白状せい。イ、ヤしらぬ知りませぬ。しら

ずば斯と責せつてう。虫がしらすか松波が。御殿を下る庭の面

叫ぶ我が子の聲聞いて。驚く胸も板椽先。歩みかねて座に直り。

詞申しく。どふか年の行かぬ子を。御折檻なさるゝ様子。何

に事でござりますと。わざと尋ぬる心はそゞろ。平次はそれと

舌なめずり。詞イヤお檢校。此女郎が親は源氏の殘黨。多田の

藏人行綱。エ、イヤサア藏人行綱と。にらんだ眼は違やせぬ。

「琵琶は女、媧氏の作にして、廉妾夫より云々」琵琶は四絃の樂器にして、もと胡より出づとも、魏の武帝の作ともいひて、詳ならず、女媧氏の作などいへるは、女媧氏笙簧を作る由いへるを、聞きかじりて、推あてに書きしなるべし、此器の我國に傳はれるは、仁明の御宇、藤原貞敏入唐して、藤承武に學べるが始めなりといへど、已に奈良時代に渡來せるもの如し、なほ別記を見よ。
 「十二の律管」 とはもと

白狀せよと責さいなめど。うかつにぬかさぬ胴ばり者。それで斯して云はすのぢやと。腕を限りのつゞけ打ち。うたるゝ身より聞く親が。こたゆるつらさは百双倍。まぶたにそゝぐ血の涙こなたは猶も聲高く。詞サアぬかしやがらにや打ち殺すぞ。イエ、たとへどの様な責にあふても。知らぬ事はいつ迄も知らぬわいの。しぶといやつじやごんせぬかいの。いかさま片意地な生れ性。夫れ程の責苦にあふても。親の詞をきつと守り。我氏素性を明さぬとは。ナ、しほらしい。ハ、ハ、ハ、よふいひ含た物じやなあと。紛らかす。詞イヤナニ御坊。おりやこな様にちと無心が有る。手前に無心とはな。外でもない。大内に奉公はすれど。終にこれ迄。其琵琶とやらを聞いた事が無い。何んと爰で。ちよと弾て聞かさんせぬかいの。エ、サアそれは。弾かれまい。是ばかりは機嫌らしう弾かれぬ筈じや。琵琶は女媧氏の作にして。廉妾夫より日の本に傳る。十二の律管に五

音律は、もと管によりて定めたる故にいふ、十二律は、壹越、斷金、平調、勝絶、下無、雙調、鳧鐘、黃鐘、鑾鏡、盤涉、神仙、上無、以て五音に配す、此十二律は黃帝の世、俗倫なる者、解谷の竹を取りて、制せるものなりと、

「五音」は宮、商、角、徵、羽、

「四筋の糸の善惡邪正」昔音楽の調聲によりて、其人の心を察せし事は、支那などによりしやうおもはる「詞の鏝打つけに云々」拷問さるゝ我子の前で、琵琶を弾くといふ、悲惨極まる趣向、泣せ場の積りで筆を揮ひしなるべし、

「松波、漣、琵琶の湖水」皆縁の語なり、てうし口に調子をかけ亂るゝ心とつゞ

音をわかち。内心に愁有れば。音律に顯はるゝ。四筋の糸の善

惡邪正。うかつには弾かれまい。いつそ爰へおりて。此小悴の詮

議して下んせぬか。ア、やくたいもない。琵琶はまだしも手馴

し業。胴欲なげに其詮議が。どふ成る物。サアそんなら一曲聞

きたいと。いやと云はさぬ詞の鏝。打ち付けに。望む一物松波

が。胸に漣立ち騒ぐ。琵琶の湖水のてうし口。亂るゝ心しらせ

まじ。悟られまじと是非なくも。手に取り上ぐる琵琶の音の。

しらべもしどろ恩愛の。血筋四筋の糸筋に。いざや諷はん是迎

も。浮世は夢の現とや。さは有れど恩愛の中。心とゞまつて。

腸を斷ち魂をうごかさずといふ事なし。詞ア、琴や三味線と

はちがふて。格別な物じゃ。ドレ此間にまた一責。ユレヤめら

うめ。サアぬかせ。どふじゃ。ぬかさぬかく。ぬかさきにや斯

して云す。術ないわいのふく。彼芝蘭の契りのたもとは。

けたり
「血筋四筋の糸筋に」 調

をあげたり

「浮世は夢の現かや云々彼

芝蘭の契りのたもとには云

々」 琵琶歌などにもあ

るか、謡曲修羅物の中にこ

れに似たるは多けれど、其

まゝなるは未だ見當らず、

二三の人に問合せたれど詳

ならず、追て取調べの上、

其意を解すべし、

「芝蘭の契り」 は密なる

契りをいふなるべし、芝は

鐘芝、蘭は蘭草、いづれも

仙草なり、

「紅蓮」 は八寒地獄にし

て、小紅蓮大紅蓮の別あり、

寒さの爲め、肉の紅蓮の如

く、さけ割るゝゆゑの稱、

「地獄の責」 剣の山「七重

の厚氷」 皆前の曲歌の

意をうけて書けり「解けて

かばねをしうたんの炎にこがせども。紅蓮の氷とくる事なし。

我子は目前地獄の責。揚げつおろしつ幾度か。紅葉の古木は劔

の山。取亂さじとくひしばる。胸は七重の厚氷。とけて流るゝ

行綱が。涙せきくる瀧津浪。膝に淵なすばかりなり。庭には苦

しき息をつき。詞ノウ申しお檢校様。例へつらひ責に合ふて

も。わしや何ぼでもとゝ様の。名は云や致しませぬ。見ずしら

ずのあなたなれど。不便と思ふてくださりませへ。サ、武士も

及ばぬ健氣の覺悟。ハレ適な魂じやなア。サアどの様に響られ

ても。大方爰で責殺され。死ぬる命は惜まねど。たった一言

とゝ様に。暇乞が仕たふござります。詞母様の死目にも得あは

ず。せめて一人のとゝ様に。とつくりと逢て死にたいなつかし

い。親子は一世のわかれとや。此世で逢はねば未來でも。あふ

事ならぬ悲しさを。推量してたへ檢校様。あひたいわいのと

流るゝ云々」厚水をうけて
かけり、

「五臟六腑」 は前に解す

「熱鐵」湯玉」 相應す

「脾腹」 は横腹、前に解す

「ぬくよと見えし稻妻や」

ぬくよと見えしや否やの意
を含めり、

「難波の六郎」 は経後に

「越中」 は越中次郎盛嗣

「上總」は上總介忠清にかる

「胴丸」 は胴の左は番ひ

なくして屈曲し、右の脇に
て合せ結ぶやうに作りたる
鏡、後に委しくいふべし

ばかりにて。親は目さきにありながら。いはず語らぬ暇乞
をさな心のいちらしさ。こらへくし行綱は。思はず御階を轉

びおり。ヲ、健氣な出かしやつた。嚙ぞ親達が聞かれたら。

嬉しからふくく。嬉しからふといだきしめ。忠義一途の行

綱も。五臟六腑をしぼり出す。熱鐵の涙はらくく。湯玉た

ばしる如くなり。歎きの油断見濟して。はくきに仕込みしあら

身の刀。ぬくよと見えし稻妻や。行綱覺悟と切り込む平次。心

得たりと身をかはし。我が子を小脇にかひ込んで。ぬけつくぐ

りつ飛鳥のごとく。刀たくつて脾腹を一當。うんとたちろぐ其

隙に。奥庭さしてかけ込んだり。平次は無念の大音上。詞ヤア

松波檢校こそ源氏の殘黨。多田の藏人行綱に相違なき條

難波の六郎見とゞけたりと。呼はる間もなく越中上總。とくよ

り是にと以前の仕丁。用意の胴丸小手すね當。庭上にかけてつく

れば、詞ヤアく旁。多田藏人行綱は。もみちの林へにげ込し
ぞ。我れは帝を守護の役。御油斷あるなど制する六郎。聞くより
かけ出す二人の勇士。人数をくばる御殿の騒動。上を下へと。
三重かへしけり。

蝶花形名歌嶋臺 小坂部館の段

總 解

此表題は柴田勝家の娘大隅が所持せし父の辭世の短冊夏の夜の夢路はかなきあとの名を雲井にあげよ山ほととぎす」と恨みに双を磨ぎし眞柴大内の兩家和睦して小田家の姫君春姫が義廣に嫁しよぶ追善や御祝言蝶花形は春姫の輿入り國入り若君を云々」とあるより名けしなるべし十冊目の末に見ゆ。

作者は若竹笛躬中村漁眼にして寛政五年七月十六日豊竹座の興行に上せしものなり随分混雜したる作ゆる煩しき事は總て餘言に譲る。

蝶花形名歌嶋臺

小坂部館の段

「すだく」は集る事なる

を、後世鳴く意に用ひたる

が如し「さな鹿のすだく鹿

の云々」落の葉にすだく鹿

の云々一皆集の意なり

「臺子」は茶の湯の式に

用ふる棚

「數寄屋」は茶會に用ふる

四疊半（又二三疊の小座

敷をも）のことにてこれに

は數寄屋庭とて必ず植こみ

の小庭あり（すきは好きに

て風流の意、數寄と書くは

借字なりとぞ）

「心は先へ飛石づたい」と

かけたり、

「風にびやうの柳腰云々か

よわき糸薄亂す云々」女の

争ふさまよく書きたり、び

やう柳は未央柳と書く、高

さ二三尺にて葉柳の如し、

小坂部館の段

秋は殊更物さびし。干草にすたく虫ならで。臺子の釜の音すみ

し。數寄屋待合前裁の。露路と勝手を忍び足。隔合たる姉妹が

心も先へ飛石傳ひ。夫と眞弓が姉様か。ナ、妹爰へは何仕に。

エ、聞えた。私を出抜父上を。大内方へ味方に付ふと思やるか。

そふいはしやんすお前こそ。先へ廻つて久吉方へ。すゝめる心で

ござんせふ。エ、つべこべと口こたへ。そこ退きやらぬかと突退

て。行も姉がい隔つる眞弓。邪魔しやんなと振ほどく。風にび

よりの柳腰。帶際取つて引戻す。腕のかよわき糸薄。亂す黒髪

兩方が。摺み合ひたる姉妹喧嘩。争ふはづみ椽側へ。轉る拍子

にばつたりと。思はず開く障子の内。閑を樂む音近が。臺子に

かゝり獨服の。濃茶の手前他念無。詞出海加藤が妻と云るゝ身

「音近」 小坂部音近の名
 は、長曾我部元近に取れる
 事論なし、
 「はしたなき振舞」 は見
 苦しきしうち、
 「まんぢら」 は出すきた
 るといふ、
 「あた蓋あけて」 このか
 けは紋切形、
 「けふの細布云々」 袖中
 抄に「陸奥のけふの細布は
 どせばみ胸あひかたき戀も
 するかな」と戀の歌なる
 を、面白くきり取りて謎と
 せり、意は音近の解に任す
 の外なし、
 「秋來月を見て云々」 これ
 唐の雍陶が句、「秋來見月
 多歸思、自起開籠籠放白
 鷗、鷗を鴉とかきかへたる
 なり、詩の意は、秋になり月
 を見て、故郷へ歸りたき念
 益深ければ、おもひやりて

を以て。はしたなき振舞。去ながら主家を思ふの貞節。さのみ
 はしからぬ。中直は幸ひく。姉妹中も濃茶の盃。サ茲へく
 と機嫌よき。父の詞に葉末は差寄。詞今四海一統に。久吉様へ
 したがふ時節。理を非に曲てもお味方を。イエく姉様まんが
 ちな。申し父上。義廣様へお味方せふと。つい云つて下さんせ。
 ハテかしましい。ぜひ返答が聞たくは。双方共罷ならぬ。此上
 はそち達が。持參の品を改よと。取出し渡す以前の箱。心濟ね
 どめいくが。あた蓋明て取出す。様子は何か白布に。詞ムウ
 けふの細布胸合すと。古歌の下の句。手跡は夫正清。私か方は
 コレ此扇。ドレく。秋來月を見て歸思多し。自籠をひらいて白
 鴉を放つ。ム、コリヤコレ。故郷をしたふ詩の心。娘共。とく
 と工夫を仕つれ。アイとはいへど姉妹が。夫の心白布と。かけ
 し扇のはんじ物。とけぬ色目を見て取る音近。詞眞柴が招きに

籠に閉ぢこめし、白鷗を放ちやりしといふも、鳥を古巢へ放ちしといふ意より、離別の謎に用ひたるにてもあるべし、されど詩の句などは、作者の力にては、なしきれず、往々誤用することあれば、先づ文の通りに心得置くべし、

「夫の心白布と云々」縁の語面白く書きたり味ふべし、

「目には涙の玉手箱」とかけたり、玉手箱は浦島太郎が、龍宮よりもちり来りし箱にて、これを明けたれば、俄に年とりて死せりといふ、故に「明けて悔しき」とつづげたり、

「しなれし葉末も露もつ心地」味ひあり

「もつれ、ほどけ、引しめる」皆縁の語、

「わんぱく」はわらは(童)

従はざる。舅も婿も心々。けふの細布胸合すと。一家の縁も此如く。斷切布は離縁の印。エ、そんならわたしは正清殿に。チ、そち計で無い妹も。故郷を慕ふ詩を。扇面に書し送りし左衛門。要をはづせし其扇。親骨子骨ばらくに。因を切つたる扇の去状。ハアはつと斗りに詞なく。目には涙の玉手箱。明けてくやしき思ひ也。時しも次より近習の武士。眞柴家より使者として加藤正清。大内より使者として出海左衛門宗貞。只今是へと知らすれば。しをれし葉末も露持つ心地。詞チ、能い所へ夫の使者。子迄なした夫婦合。がてんもさせず去られた様子を。チ、そふでござんす共。私し迎も同じ事。お使者で有らふが此恨み。頼むは姉様。呑込んだと。初めのもつれはどこへやら。ほどけあふては引しめる。帯も眞身の姉妹思ひ。詞ヤア縁切れたれば他人向き。無禮の挨拶仕るな。身も禮服に改んと。云つ

の音便、わつばの轉訛なり
といふ、腕白など書き子供
の手にのらぬをいふ、

「入る間に程も長廊下」と
かけたリ

「虎之助親の名をかる笹市」
虎の威をかる狐、の句あり

又笹は虎に縁あり「竹に虎」
「年も相生ふ松太郎」とい

ひたり、妙、謡曲高砂にあ
ひに相生の松こそめでたか

りけれ」
「梅檀のみばぬ」梅檀は

二葉より香し、の句より書
く、

「ゆゑしく」は立派、
「と、梅と縁切つた云々」

十歳ばかりの子供にして、
實際いひ得まじき事ながら、

全段を通じて、けなげに
武士らしく書きたれば、讀

むものゝして、漫に涙を垂
れむ、

つ立つて奥深く。入る間に程も長廊下。加藤虎之助正清と。親

の名をかる笹市が。まだ十才のわんぱくざかり。年も相生ふ松

太郎。父左衛門と是も又。名はかんばしき梅檀の。みばえゆ

しく打通れば。思ひがけなき母と母。詞「ヤア左衛門殿と思ふたは

松太郎か。よふおじやつたの。笹市もと、様の御名代じやの。

長上下の着こなしぶり。よふ似合つた事はいの。サア、御使

者の口上此母へ。イエ、と、様と縁が切れた。お前は餘所

の伯母様じや。ナ、笹市殿のいはしやる通り。コレ餘所の伯母

様。祖父様へのお取次。お頼み申し上ますと。云合はさねど兩

方が。利發にこまる母親も。何と答も口ごもる。一間に斯とも

れ聞く兵部。老の氣丈の長袴。左右に小太刀携へて。作法亂さ

ず歩み出。詞久しく對面せざる中。ハテおとなしく生育しな。

娘が縁に引かれざる。小坂部が性根を知り。縁を切つて孫共を。

「もし此祖父が承引せずば云々」子供への問として頗るむづかし、これにけなげに答へしめて、ますくけなげならしむ、

「おとなも及ばぬ云々」いづれの親もかくあるべし「どなたでも」の當りすりよく利きたり

「誰も口では立派にいへど」これしつべし返し「憶病風初めの嵐吹もどされて」よく書きたり、味ひあり、

使者に差越す發明く。がもし此祖父が承引せずば。其儘では歸られまい。とくと思案を定よと。詞も待はず松太郎。詞此役目仕負せねば。生て屋敷へ戻るなど。父様のお詞と。云つゝ手早に上下うは着。脱ば白無垢淺上下。母は見るより。詞ヲ、そふのふてはならぬ筈。おとなも及ばぬけなげさを。眞似が成ならどなたでも。仕て見やしやんせと聞けがしの。詞も耳に當さはり。詞コレ妹。親の口から子を譽るは聞にくい。それ程の事仕兼ねる様な。笹市ではないわいの。アイ。祖父様が味方に付いて下されずば。死る覺悟に極て居ます。ヲ、そうで有ろく。早う用意と上下の。紐を解やらほどくやら。上着脱せば同じくも。下は無紋の死出立。見よりはつとは思ひ乍。詞ヲ、出かしやつたのふ。眞實極たそなたの覺悟。誰も口では立派にいへど。まさかに成ると憶病風。出安い物と初の嵐。吹戻されて。コレ姉

「コレ姉様憶病風とは」か
く咎めざるを得ず。

「義によつて命を惜む」命
は義によつて輕しの句より
書く、朱穆傳に「命縁義輕」

「しどろ」は亂るゝをい
ふ。

「われ達」は汝達

「出づる心のしをり門、親子
の中を隔つる切戸」よく
かけたなり、よくいひたり、

「獅子の兒をためす云々」

様。憶病風とは誰が事。義によつては命を惜む。松太郎じゃこ

さんせぬ。ソリヤこちの子も同じ事。父上のお返事次第。立派

な覺悟見物仕や。イヤ松太郎が覺悟を見せふ。見事そなたが。

お前がと。我子びいきに取のぼし。詞しどろに争へば。詞ヤア

無益の論談。左程離縁が悲くば。切つたる縁を繼合す。工風は

さまゝ。去ながら我達は。此座に叶はぬ。早く立て。うちく

と立兼ねるは。父が詞を用ひぬかと。老のいら立ぜひもなく。

出づる心のしをり門。親子の中も隔つる切戸。鑿かけて申し祖

父様。詞久吉方へお味方有らば私や侍が立ちませぬ。ヲ、武士

が立ふが立つまいが。祖父様はこつちの味方。イヤそうは成る

まい。仕て見せふ。ヲ、出かすく。適勇者の倅共。併し大内

に付けば笹市が耻辱とならん。と有つて眞柴に従はゞ。松太郎

が身の上。いづれを捨ていづれを取ん。彼獅子の兒をためすに

こは佛典より出でたるならんか、太平記にも、正成が櫻井にて、正行と別るゝ時、此語を以てとせり、

「腰にさす差すかは武士の小太刀(子達)の目釘」とかけたり、

「やるせなき」は晴さん方なし、

「鼓」は古名吳鼓、又三の鼓といふ、専ら猿樂に用ひたり、大鼓小鼓の別あり「研」とはよく名づけたり、味ふべし、

「互のかけ聲鼓の矢聲」かけ聲をうけて矢聲とはよくいひたり、するどくすこし川柳に「イヤオーをいふて教ふるつゞみの師」

「有かたや治まる云々」謡曲養老の句なり、養老は美濃の養老の瀧の、めでたき孝子の事を作れるものなれ

ひとしく。此場に於て兩人が。眞劔の勝負をこゝろみ。勝たる方へ祖父が味方。心覺えの此二腰。是を以て立合へと。渡せば取つてめいゝが。腰に遣は武士の。小太刀の目釘くひしめし。股立りゝしく身ごしらへ。戸の透間より差覗く。母と母とはあらぬ思ひ。年端もゆかぬ二人の子供。命にかゝる眞劔の。勝負さすとは餘りな。むごひわいのとかきくどく。親の思ひぞやるせなき。耳にもかけず音近は。床に直せし鼓取上げ。我壯年の頃。武將足利義晴公。數度の軍功御賞美有り。猶も武名を鳴せよと。劔と號し此鼓を下し賜り。年賀毎に打か吉例。今ま六十の賀を祝す。謠終らぬ其中に。用意よくばと打ならず。鼓のしらへ白刃の刃。抜放して立向ふ。互のかけ聲鼓の矢聲。有かたや治まる御代のならひとて。山河草木穩に。五日の風や十日の。雨が下照日の光り。劔の光り打合ふ双音。見る目ひやいさ

ば、祝の時の謡ひとせり、
「五日の風や十日の天が下
照る」とかけたり、儒者太平
の瑞應を頌して、風條を鳴
さず、雨塊を破らず、五日
に一風、十日に一雨といへ
り、

「日の光り打ふ双音」と

つゞけたり、

「武士の育ちの直焼刃」と
かけたり、直焼刃は刃の曇
りを真直に現したる焼刃、
「さもいさぎよき山の井の」

これも養老の句、

「切りつ切られつ云々」流

血淋漓の状、眼前に髣髴た

り、名文味ふべし、

「祖父は早むる謡の責」胸

中裂く、如し、

「君は船く云々」これ

も養老、皆飛々のつゞきな

り、荷子に「君は舟にして
庶人は水なり、水則ち舟を

あぶなさに。こらへ兼ねてかけ入るを。いつの間にかは物影に。
忍び姿の宗貞加藤。せいし留むれば詮方も。泣けど叫べど白砂
を。一足さらす切結ぶ。武士の育の直焼刃。付入る刀請はづし
弓手の肩先松太郎。切込まれてたちくく。母は見るより悲
しさの。心あせれど詮方涙。さもいさぎよき山の井の水く。

山の井の手疵も屈せぬ松太郎。突き双先笹市が。高股四五寸切

付くれば。詞アレ笹市が切られたわいの。ソレくく。油断

しやんな。ア、あぶない。必負てたもんなど。あせりながらも親

々が。詞の助太刀牛角の手練。切りつ切られつほどばしる。血汐

染なす秋草も。色を争ふ修羅の庭。勝負何と氣を配る。父と父と

は千萬無量。母は外面に血の涙。祖父は早むる謡のせめ。君は

船く。臣は水。水よく船を浮べく。臣よく君を。仰ぐ御代

とて返すくも。よき御代なれや。萬歳の道に歸なん。

載せ、水則ら舟を覆へす、孔子家語に「夫君は舟なり庶人は水なり、水は舟を載する所以、亦舟を覆へす所以」

「とどめ」 は殺せし後咽

を刺す刀、息の根を止むる

よりの稱、

「身をしづに」 は身をお

もしに、

「疾しや遅し」 は直にの

意、

「御馬の前の云々」 御馬

前の功名は武士の最もほまれとせし處、

「孫は子よりも」 これ昔

よりの諺、意地悪き姑女も

孫出来れば、其愛に引かれて、邪見の角を折るとかや

深手ふかてによはる松太郎。氣がさの笹市ささいちまくり立たて。留さとどめんと立寄たぎるを。詞ことばコレ待まち。勝負見届しょうぶみとどけたぞ。娘共むすめどもは手負てをひの介抱かいほう。早はやくと母と母。我身をしづに東西とうざいの。鏝かきがねはづれ押おしめる。としや遅おそと駈入かけいつて。我子わがこくくに縊すがり付き。詞ことばヲ、嬉うれしや笹市ささいち。其方そなたは淺あさ疵きず。神かみや佛ほとけのお蔭かげぞと。姉あねは悦よろこぶ妹いもうとは。手負てをひにひしと抱いだき付き。介抱かいほう愚泣おろかななきけ叫けいぶ。詞ことばヤア武士ぶしの家の育そだちながら。未練みれん至極しごく。笹市勝ささいちかち負まけに切勝きりかつ上うへは。兵部へいぶ音近おとぢか今日けふより。久吉公ひさよしへ味方みかたぞと。聞きくにいそく姉葉末あねはすゑ。御馬おんうまの先さきの高名かうみやうにも。まさつた手柄てがらと讚ほめそやす。余所よその悦よろこび子心こころに。聞きし無念むねんさ松太郎まつたらう。詞ことばエ、わしや負まけけたが口惜くちあしい。今一勝負しやうぶと刀かたなを杖つゑ。立上たてあればよろよくく。見みる目めに母ははたへ兼ねかねて。ヲ、道理だうりじやくく。道理だうりじやわいのう。武士ぶしの意地いぢとは云いながら。孫まごは子こよりも可愛あひいと。世よの諺ことわざも有ある物ものを。見殺みころしにする片意地かたいぢは。むごい難面つれな父上ちやうじやうと。恨うらみの數矢かずや

「數矢眞弓、引入る、張詰め」皆縁の語、よく書きたり、よくいひたり、

「負けたはわしが未熟から」此けなげの詞、ますく哀を深からしむ「笹市に負はせぬ云々」流石は武士の子

「双引」は又つぶし、

「血の緒」は血筋

かぞへ立。いふも眞弓が子に迷ふ。悔にいとく苦さの。引入る息を張詰て。詞ア、かゝ様。祖父様に恨はない。負たはわしが未熟から。大事の役目を仕損じた。憎いやつじやと父様に。しかられうかとそれが悲しい。もし尋てなら笹市に負けはせぬ。怪我につい切れたと。いふて話して下されと。今端の際も名を惜む。稚心のいちらしさ。こたへくし祖父兵部。以前の刀拔より早く。腹へがわと突立つれば。ノウ何故の御最期と。右と左に姉妹。取付き歎は氣丈の手負。眞弓が顔を打眺て。涙を浮め。詞ヲ、恨は尤去ながら。何をか包まん。松太郎へ最前渡せし一腰はな。刀引も同じなまくら物。去るに依て笹市が手疵は薄手。斯斗ひし一通り。本意ならねと云聞かさん。姉のはずゑは早世し。我兄元胤が忘れ筐。某とはなさぬ中。同じ血の緒と云ひながら。義理有る孫の笹市が。命を助け肉身の。松太郎を殺

「義理といふ二字が、劔云々」
 戦國時代の武士氣質、義に
 よつてこれに類する行ひな
 くとせず、同じ血の緒とい
 ひながら、産の娘が生の縁一
 月にも花にもかへぬ一人の
 孫を、眼前に殺す音近、身ふ
 しも碎くる思ひなるべし、
 血涙滴々、讀むに堪へず、

せしは。さす敵加藤正清に。縁を引いたる親左衛門。返り忠も
 あらんかと。主家義廣の疑念を晴すは、骨肉の一子を殺す義者
 の潔白。此上なしと思ひ寄しも。義理といふ二字が劔となつた
 るかや。月にも花にもかへぬ程。いづれおとらぬ不便さも。産
 の娘が生縁。わけて可愛い松太郎。コリヤむた死とばし思ふ
 なよ。年こそ寄たれ無双の勇者、小坂部兵部音近を。そちが刀
 で此如く。小腕の仕留め潔く。討死せし手柄者。出かしおつた
 と爺親が。賛こそすれしかりはせぬ。心残さず臨終をと。義理
 の孫子の恩愛に。捨てる命の有難さ。姉は元より妹が。そふと
 はしらず父上を。恨んだが勿體ない。詞コレ松太郎聞きやつた
 か。そなたが死ぬるは爺御の爲。負たのじやない勝ちじやといの
 ふ。ア、嬉しうござります。そんならお前も縁切らず。元の通り
 にとゞ様と。中よふ添て下されや。母様。母様は何所にじや。ヲ

「斷末魔」は臨終の苦み、利刃の觸るが如しと、

「二百三十六地獄」地獄

の數は大別して八、小別して二百三十六ありといふ、

「呵責を一度に」胸中苦患の狀いひ得て妙、

「孫子の爲めにお命を云々」謝するに詞なし、

「アノ姉様の勿體ない」これ姉への義「約束事とあきらめても云々」これ親の情

爰に居るく。悲しやそなたは。もふ目が見えぬかいのふ。ア
侍の子が未練など。笑はれうか知らねども。死る今端にと、
様や。お前の顔がたつた一目。それがくといふ跡は。舌もも
つる、斷末魔。詞チ、苦しかるせつなかる。其苦痛より此祖父
が。切つはつゝの度々を。謠鼓で紛らしても。骨肉を裂く苦しみ
は。二百三十六地獄の。呵責を一度に請けるとも。よも此上の
有るべきか。可愛の孫やと取亂し。歎は姉はせき上げく。孫子
の爲にお命を。捨て惠の父の恩。船車にも積れふか。それ斗り
かはいとし子を。義理の刃に殺すのが。悲しうのふて何とせふ。
こらへてたもと妹に。手を合はしたる詫涙。詞アノ姉様の勿體
ない。斯成り行くも先の世の。約束事と諦ても。こんなゆゝし
い子を殺す。其日もかへず父上迄。同じ刀の憂別れ。神も佛も
無き世かと。手を取替し姉妹が。返らぬ悔み宗貞も。加藤か手

「親は泣寄り」は身よりの情の厚きをいふ語、世話盡に「親は泣寄り、他人は食寄り」、これにて明なり
 「涙々に暮近き秋や哀れを」句よし、

「大内義廣征伐に云々」思ひつきよし、

「北辰」は北斗七星、即ち貪根、巨文、祿存、文曲、廉貞、武曲、破軍にして、和漢共に古來尊信せし星なり、殊に第七座の破軍星は、斗柄又搖光とも稱し、劔の形を圖して、破軍の劔先などいひ、武家の最も敬ひ畏れしものなり、軍事を始め凡

前耻らいて。爰にとだにも得も云はぬ。胸の苦さ目に餘る。涙見せじと喰しばる。心を察し正清も。たもち兼ねたる俱涙。親は泣寄眞實の。涙々に暮近き。秋や哀を添ぬらん。左衛門非歎の涙を拂ひ。詞一子を殺し二心なき。我誠忠をあらはすと。悴が孝心舅の情。命を給はる返禮は。再びむすぶ智舅。詞ホヲ、正清迎も左のごとし。大内義廣征伐に。小坂部が討死と。記録に残さは松太郎。舅の追福此上なしと。聞よりにつこと打笑て。詞ハ、仁有り義有る味方は名のみ。相果る兵部が末期の置土産。笹市に與へし太刀こそ我重代。北辰の二字を彫し。武運守護有る七星丸。萬夫不當の正清に。劔の威徳加はりて。和漢に美名を残されよ。此上頼は末子和三郎に。小坂部九郎音近と。我若年の名を續せ。厚恩有る久吉公。御子孫の時に至り。スハ御大事と見るならば。粉骨つくし忠義を立てなば。草葉の陰より悦ぶ

ての勝負事、これに逆へば必ず破ると、故に北辰の字又其形を彫みて、七星丸など名つけし刀はありしなるべし、これにつき、聊聞込みたる事あるやう覺ゆれど、今思ひ出さず、追て其道の人にも尋ねべし、
 「和漢に美名を殘されよ」
 清正が朝鮮にて鬼將軍の武名を輝せしより書く、
 「其甲斐も風も告る」と
 かけたなり、
 「木村和田藏」は木村父藏の思ひつきなるべし、
 「山口」は周防國吉敷郡にあり、舊毛利氏の藩地
 「絶所」は切所に同じ、
 かためのある地、
 「破竹の勢ひ」は、竹を割るが如き勢をいふ、竹を割るに、數節の後、又を迎へて自ら解く、

と。傳へておくりやれ聲殿と。末期の一句孫娘。ノウ是今が別かと。歎けと更に其かひも。嵐が告る螺太鼓。遠音に響き物凄し。加藤が郎等木村和田藏。かけ來つて大音上。大内が本城山口は。要害堅固の絶所なれば。數日の對陣時を待ち。計知たる海手より。足利慶覺西國へ。下向と流布せし六字の旗。武器を隠せし兵船に。押立く押渡る。味方は必勝の破竹の勢ひ。急ぎ御出馬然るべしと。申し捨てぞ引つかへす。スハ一大事と左衛門宗貞。おとらぬ正清双方が。忍び裝束脱捨つれば。肌には小具足身をかため。勢ひ込んだる軍馬の出立。やをれ正清慥に聞け。久吉樂毅が術をなすとも。味方は臥龍の備を立て。只一戦に追散さん。早く歸つて猿冠者が。首を堅固に用心せよ。シヤ案外成る非禮の過言。山口如きの破れ城。正清先陣を蒙らば。一攔みにひしいでくれん。ほえ顔かはくな左衛門と。互ひに廣言双方が。

「小具足」は籠手歴當な

どすべてをつけて、胴のみ

を着けざる出たちをいふ、

「樂毅」は支那戰國の世

燕の昭王に仕へ、五年の間

に齊の七十餘城を下し、武

勇の名を轟かせし人、

「臥龍」は孔明のこと、

孔明は支那三國の時、蜀帝

劉備(玄德)に仕へ、天下三分の計を立てし人、智謀ありて兵法に精しく、後世兵家の重する八陣の法は、彼れの畫せし所なり、初め徐庶と

いふもの、孔明は臥龍なりとて、劉備に勧めしゆゑ、此名を得たり、

「猿冠者」は秀吉のこと其面襟に似たりと、

「枯れる老木と諸ともに惜しや緑の松太郎」縁の語にて書き下せり、名句、味ふべし、

「白眼相智同士」とかけたり

「哀を跡に三つ(見)羽の征矢」とかけ「射るが如く」とつゞけたり、尋常の者の書き得べき句にあらず、感服、征矢は軍陣實用の矢にて、三

つ羽に翹く(直矢の轉にて雁股尖矢などに對する名なりと)

詰寄せ詰寄る勇者と勇者。女房くは正體も、涙ながらにいたは

れど。枯る老木と諸共に。をしやみどりの松太郎。あへなく息

はたえにける。わつと一度に聲立て。妻が歎に目もやらず。互

に白眼相智同士。又も聞ゆる攻太鼓。哀を跡に三ツ羽の征矢。

射るが如くに兩人は。戰場さして出て行く。

射るが如く」とつゞけたり、尋常の者の書き得べき句にあらず、感服、征矢は軍陣實用の矢にて、三

つ羽に翹く(直矢の轉にて雁股尖矢などに對する名なりと)

縁の語にて書き下せり、名句、味ふべし、

「白眼相智同士」とかけたり

「哀を跡に三つ(見)羽の征矢」とかけ「射るが如く」とつゞけたり、尋常の者の書き得べき句にあらず、感服、征矢は軍陣實用の矢にて、三

つ羽に翹く(直矢の轉にて雁股尖矢などに對する名なりと)

縁の語にて書き下せり、名句、味ふべし、

「白眼相智同士」とかけたり

「哀を跡に三つ(見)羽の征矢」とかけ「射るが如く」とつゞけたり、尋常の者の書き得べき句にあらず、感服、征矢は軍陣實用の矢にて、三

つ羽に翹く(直矢の轉にて雁股尖矢などに對する名なりと)

本朝二十四孝 百度參りの段

總 解

何れの書も一部通讀せざれば。意義の了解し難きものなれど。別きて此段の如きは。假面の人物がもの陰の活動はたらきゆゑ。其由來を知らざれば。雲を攔むが如し。左に之を略記して。讀者の便に供せん。

將軍義晴の館へ。井上新左衛門と稱し。南蠻渡來の鐵炮献上を名として。面謁を請ひ。一發の下に義晴を斃して。逐電せる曲者あり。

武田上杉の兩家は。法性の兜の事より。元來不和なりしが。疑の身に及ばん事を恐れ。信玄謙信。後室手弱女御前の前にて。三年の中に必ず曲者を搜し出すべし。若し能はずんば。各一子の首討つて。潔白を證すべしと誓へり。しかして三年を経れども。曲物を見出し得ざるゆゑ。愈勝頼景勝を。首にせざる可からず。

こゝに武田家の家來に。板垣兵部といへる奸佞の者あり。我子と勝頼と同年月に生れ。其容貌も酷似したれば。ひそかに取かへて眞の勝頼を一生不通にて。諏訪の民家へつかはせり。これ即ち蓑作なり。母常磐井御前は。これを知らずといへども。信玄はよく看破して。内々家來に命じ。これを保護せしめ置けり。勝頼切腹の段に及び。母御前の愁嘆より。兵部の驚愕一方ならず。身がはりを索めて。蓑作に諏訪明神の社前に遇ひたれば。大に悦び。其難をすくひ。宿へ伴へるなり。

濡衣は齋藤道三の女むすめ。道三足利家の爲めに美濃を切取られて。遺恨やる方なく。將軍を倒し。武田上杉兩家を滅して。天下を奪ふの志あり。濡衣父の意をうけて。武田家の奥方に仕へけるが。兵部の子なる勝頼と密通し。其死をすくはん爲め。こゝにお百度を踏むに至る。

前に義晴を斃せし曲物。こゝに力石の下より出づる有髮の老人
後の花守りの關兵衛は。皆齋藤道三なり。しかして山本勘助なる
横藏に「七重八重」の歌と共に菅蓑を脱ぎて與へたるより。遂に篇
尾に至り。同人に道三なることを見破らるゝなり。これは作者が
頗る巧みたる趣向にて。もと醍醐天皇の皇子兼明親王の藤原氏
の專横を憤りて。詠み給へる御歌なるを。太田道灌が鷹狩の節。俄
雨に遇ひ。茅屋あはらに入りて蓑を借らんとせしに。少女山吹の花を出
し。此歌の句「實みの蓑かさ」一つだになきぞかなしき」の意を寓せて。こと
わりたりといへるより。道灌の歌となし。道三を其子孫として。此
句に。足利家に切取られて。美濃を失へる意を寓せしめ。これによ
りて。勘助が看破するやう仕組めるなり。

諏訪明神 上下二社あり。上。諏訪は諏訪郡中洲村にありて。上宮と
稱し。建御名方命たけのみかたのみことを祭り。下。諏訪は同郡下諏訪村にありて。下宮と

稱し。其妃八阪刀賣命を祭る。其間隔たること壹里餘。俱に今官幣中社に列せられ。昔より國內無双の名神にして。後奈良天皇の御宇。正一位南宮法性大明神の神號を賜はれり。祭事歳に三十餘回。就中御頭祭。御射山祭。御柱祭等は。頗る盛式なりといふ。當社の縁起は。二三種あるが中に。後光嚴院勅題の。諏訪大明神縁起書詞といへるは。足利尊氏の奥書ありて。續群書類從にも收められ。最も有名のものなりと。此建御名方命は。大國主命の御子にして。天孫彥火瓊々杵尊。天降りまします時。天照大御神大國主命に。其領土をまゐらすべき由。建御雷命を御使にて。申させ給ひけるに。父命は。謹て命を奉ぜるも。建御名方命大に憤りて。干引石を掌に撃げながら出來り。我領土にまゐりて。かく無禮の言を吐くは何者ぞ。力競へせんと申さる。力石の事は神社へ問合さざりしも。ありとすれば。これより出しなるべし。建御名方命。力競に負けて。逃行き

しを。建御雷命信濃の諏訪の湖うみにて追詰め殺さんとし給へるに。
建御名方命我を殺し給ふことなかれ。今後は此地より外へは。決
して行かじとなげき申して。からき命たすかり。遂に此所に鎮り
給へり。これ即ち諏訪明神なり。又下宮を下照姫といへるは。名高
きと句調よきとによりて書ける。例の作者がみたらなり。因にい
ふ。下照姫は建御名方命の妹にして。古今集の序に。和歌の始めと
書ける姫命なり。

井上新左衛門は。炮術を傳へし人。其名をかり用ひしなり。
こは別にいふ時あるべし。

本朝廿四孝

百度参りの段

「下諏訪の神垣」 げ下諏訪神社、信濃國諏訪郡下諏訪村にありて、今官幣中社に列す、殿社二字ありて、毎歲初春に遷座するを春宮といひ、初秋に祭典を行ひ秋宮に鎮座せしむといふ、祭神は建御名方命（上諏訪明神）の妃、八阪刀賣命なりと、下照姫とせるば、句調よきまゝに書けるみだりなり總解を見よ、

「禰宜」 は神官の稱、れざらひの略にて、神を慰ひ和ぐ意とも、れがひの約なりともいふ、

「鼓」 に大鼓小鼓の別あり、

「神樂歌」 は今も神樂の時神社にてうたひ、庭燎、

百度参りの段

恵は四方に隠れなき。下諏訪の神垣は。下照姫の御神にて。靈驗あらたにまします故。近國の貴賤。歩みを運ぶ賑はひに。禰宜が小鼓。神樂歌。神慮も嘸としられける。殊に今日は卯月の初。御神事の宵宮迎。商人。百姓。草苺の小童迄。お千度。お百度。絶間なき其中に。車つかひの簀作。馬場前に車引捨て立寄て。「ホ、ウ皆。近在の知た者共。太郎よ。丑松よ。能ふ参つたな。ヲ、簀作。遅かつた。さればおれも上諏訪迄。油粕付て行て。草臥果た。ちつと休で跡から往のと。神前の大石に腰をかすれば。コレく簀作。「其石は明神様の力石迎。其石に腰をかすれば。其豪い石を上ねばならぬ。サア左様ぢやげな。けれど神は見通し。見て見ぬふり。そんなら休で下向仕や。後に逢ふ

阿知女、櫛等、三十七曲ありといふなほ別記を見よ

「卯月」は陰曆四月の異名

「宵宮」は祭日の前夜をいふ、拜殿にてお籠りなどをなす、

「車つかひ」

は車ひき

「上諏訪」は下諏訪より

一里餘北

「力石」の事は間合されど、ありとすれば、御名方

命(諏訪明神)の千引の岩を攀げ給ひし古事より出でしなるべし、總解を見よ、

「神は見通し」は神はいづこにても、よく見通ふし

給ふをいふ

「肩臂をいかつ聲」といへり、いかつき聲、

「石の手話」堅き手話なるべし

「下内」

は内證の意

「せちがふ」はからかふ

と別れ行く。是等も同じ車遣ひの悪者共。宵宮参りに肩臂を。

いかつ聲で。コリヤ義作。「わりや此神前の力石の事知つて居る

か。ほんにさうぢや。たつた今も子供等がいふたけれど。あん

まりしんどうさに忘れてひよつと。イヤ忘れたとは言はれまい。

昔から當社のならはし。腰をかくれば叶はぬ義作。ナア勘八九

助。ナ、權六がいふ通。其石上い。上にや宮へ斷で。明神様の

お神酒代を上るか。サアくどうぢやと、石の手話に義作が。

「知つて居ながらおれが麁相。二人三人かゝつた辻。地放しもな

らぬ力石。どうぞ皆が沙汰なしに。下内で。イヤ濟されぬ。上

げねば宮へ引ずつて行く。ナ、さうぢやく。日比から女たら

しで、生しらけたしやつ煩。踏にじつてこませい。サア立て。

動けと兩手を引ばり。せちがふ折から。武田家の奥家老板垣兵

部。供人引連れ参詣に。此躰見るより家來共に引分させ。「始終

「板垣兵部」は武田家の奸臣にして、義作を助けて連れ行くは、勝頼の身がはりにせん爲めなり、總解を見れば明かなるべし。

「訴人の科に」をどし文句なるべし

の様子聞たるが。社法を背し不届とな。併ながら。慈悲第一の御神なれば。法に行なふにも及ぶまじ。爰は身共が義作とやらんに。成かはつての詫。コリヤ若い者共。侍が詞を下る。了簡してとらせやい。サアお侍の詫なれば。了簡したい物なれど。宮の掟が。サア其處が有るによつての詫。身は信玄の家來。畢竟わいらは義作が訴人なれば。我領分へ連歸つて。訴人の科に急度行ふ。サア何と了簡するか。否なといへば云分有りと。氣色かはれば三人が。ア、申し。夫程におつしやる事なら。お宮守へは沙汰なしと。言ふに悦ぶ義作。何方様か存せぬに。お詫なされて下されて。有がたう存じますと。手を合すれば。「テ、禮には及ばぬ。其代には。其方へ少し頼たい事が有る。旅宿迄來てくれまいか。是は、所縁かゝりもない私。お詫なされ下されて忝い。譬へ左様なく共。お侍のお頼。身に叶ふた事な

「過分」 は分に過ぎたる意より、此上なくありがたきをいふ。

「かへりまうし」 は報賽と書く、神佛にかけたる願のかなひたる時、禮参りするをいふ。

「目」 は博奕より出たる語にて、無錢にて酒飲む時などに、引當てに置く品物をいふ。

「鳥居」 はもと笠木の名にて、鶴をすましむべければいふとぞ。

「神さび渡る」 ばかうんしきをいふ、實際上諏訪の社は壯麗なれど、下諏訪の社は古雅なり。

「十七か破竹(八九)草履」

らば。御用の仔細。爰にて仰せ下さりませ。ヲ、夫れは過分。

去ながら。爰は社内参詣も多ければ。身が旅宿へ同道して。密

々に咄したい。殊によらば隙取らう。さう心得て太儀ながら。

歩でくれうか。何が扱何國迄も。來てくれうや。重疊く。家

來共。簀作を同道せいと。報賽して板垣兵部。旅宿をさして立歸

る。「エ、簀作めをゆすつて。酒買さうと思ふたに。いはれぬお

武士が挨拶で骨折損。最ふ此上はやけの勘八。權六。九介も。

鳥井前で目で一杯やりかけう。サア來いくと鼻唄で。鳥居の

前へと急ぎ行く。夕暮時は参詣の。人も途絶えて神前の。御燈

の光森々と。神寂渡る其景色。年も漸十七か。破竹草履も足輕

に。見ゆる所躰もぼつとり風。武田の姫濡衣が。何か願ひは鳥

居より。かざす櫛に數取て。お百度参り大幣も。引手に神や廳

くらん。跡から憎い風俗の。大道はたかる鳥居前。信心白砂踏

とかけたり

「お百度参り」 東鑑文治

五年に「今日於鎌倉、御臺

所以御所中女房數輩、有

鶴岳百度参、又古今著聞集

に「神主一日に百度をなん

しける」と見ゆ、古くより

行はれたる事にて、佛家よ

りうつれるなるべし

「大幣も引く手に」 古今

集、伊勢物語などに見わた

る「大幣の引く手あまたに

なりぬれば思へどほこそた

のまざりけれ」の歌より書

けり。大幣は大穢の果た

る後、人々ひきとりて其身

をなづる事あり、故に「引

く手」といふ「神も靡くら

ん」美人の願は殊別感應あ

るやう、誰か目にも見ゆべ

し、よく書きたり味ふべし

「懐手して神参り」これ

信心白砂踏つけた仕方、神

付た。懐手して神参り。「姉さん能ふ参らんすの。おれも明神せ

ぶりに来た。お百度の連に成やんしよ。是はマア／＼。どなた

か知らぬが。幸な道連。最ふ日も暮かゝつて。女一人は心細い

左様であろ／＼。地躰マア日暮から。大膽なげんさい様ぢや。

マア一度鳥居から百度は太儀。姉様しんどか。手を曳こかえ。

ハテしんどい沖大事の願。身をこらさいで好い物か。ム、身を

凝すとは戀である。イエ／＼そんな事ぢやない。夫れなれば好

い着物か。欲しいといふ願ひではないかや。何をわつけもない

事計り。さうおしやんすお前の願はえ。おれが願は商賣の四つ

ぼ。此間腐り續け。さし計りに成たから。思ひ付の百度参り。

如何様。姉様の足の軽さは、よく／＼の願ひと見えた。コリヤ

連立るゝ物ぢやない。其様に歩かしやるので。ア、好もしい股

の邊が。摺れませう。マアそろ／＼歩いておれが言ふを聞つ

は所詮靡き給はじ、面白く
いへり、
「せぶり」 は強請の意、
いたぶりともいふ
「げんさい」 は街妻など
書く、辻君のこと、又女を
いやしめいふ語
「姉さんしんどか云々」 此
御親切にもあるべし
「身を凝すとは戀である」
誰しも着目の第一
「おしやんす」 はおつし
やる
「四つば」 は博奕の稱。
賽を四つば用ふ
「耳に諸の不浄を云々」 六
根清浄の祓に「耳に諸の不
浄をきかず、目に諸の不浄
を見ず」
「から手水」 は水なしに
手を清むる真似をすること
なるべし
「叶へ給へ靡き給へ」 面

しやれ。色事いろごとでなくば。おれとはどうぢや。ア、味あじい腰付こしつきぢや
と。とんと擲たげば。「ナ、笑止せうし。大事だいじの〜お百度どに。悪魔あくまをさ
して貰もらふまい。耳みみに諸もろくの不浄ふじやうを聞きて。心こころに諸もろくの不浄ふじやうを聞きかず。
祓はらひ給たまへ清きよめて給たまへと。から手水てうす。「コリヤ興疎けうとい神道しんだうづかひ。
堅かたい所ところが奥床おくゆかしい。コレ神様かみさまは粹すみぢや。ついちよこ〜と叶かなへ
給たまへ。靡なびき給たまへ。てんごういはずと信しんを取とて。祈いのる功德くどくの神かみよ
りは。跡あとから口説くどく神様かみさまも。ほつと草臥くたばれ。「ナツト待まちたり。ナ、
しんどや〜。佛ほとけの顔かほさへ三度さんどといふに。神様かみさまのお百度どは。足あしも
腰こしも抜ぬけ果はた。ちつと休やすもと大石おおいしに。腰こしをかくれば濡衣ぬれぎぬは。一
心しん不亂ふらん。「是これで丁ちやうどお百度どの。數かずも大方おほかた榲かきを幣ぬさ。大願だいがん成就じやうじゆなし給たま
へと。伏拜ふしなみ引ひく鈴すずの綱つな。切きれて落おつれば濡衣ぬれぎぬが。胸むねに當あたりし
案あんじ顔かほ。横藏よこざう傍そばへ立寄たちよりて。「コレ何なんとさしやつた姉様あねさま。サイナ妾めかけ
が。お百度どは。大事だいじの〜お主様しゆうさまの命いのち乞こ。鈴すずの綱つなの切きれたのは。お

白し「破ひ給へ清め給へ」
「祈る功德の神よりは云々」
何たる妙句ぞ「佛の顔さへ
三度といふに云々」これ亦
頼るの名句、

「神頼み」 する女として
鈴の綱の切れしにも驚ける
なるべく、十七歳の男子息
災延命といはれたるにも、
悦びしなるべし

「願ひの甲斐の國」 とか
けたり、

「胴」 はばくちの胴親、
以下博奕の語は、問合せて
書きたるにて、自ら知らず、
又學ぶべき事にもあらなば
詳しくは心得られず、誤れ
る事多かるべし、御承知の
方は御教示を乞ふ、
「三つば」 は博奕の稱、
賽を三つば用ふ、

命のないと云ふ。明神様の知らせかと。涙ぐめば。「エ、氣の弱
い。有繫は女子と鈴の綱。手に取上。「こなたの命乞するお主は
男か女か。アイ殿達でござんす。夫れなら吉左右。此鈴の綱に
書て有るは。十七歳の男子。息才延命と有るからは神も納受。
夫れはマアくお嬉しやお主のお年も丁ど十七。ナ、よし。く。
此鈴の綱持ていんで戴つしやれ。ア、成程。好いお方にお目に
かゝつて。お命乞の願成就。重て御縁も有るならば此お禮。神
に願ひの甲斐の國と。詞殘して鈴の綱。押戴て濡衣は。嬉しさ
足も地に着かず。悦びいさみ立歸る。横藏は跡見送り。「餘所は
ない命でさへ。神の納受で生るのに。生る事は扱置。胴取りや
くさる。はればかゝれる。最ふ今夜の資本がない。是からは明
神様を。おれが仲間の胴頭にして。此箱の賽錢を胴錢。マア試
に神様を相手にして。三つばの廻りして見やうと。くはらりと

「神の四苦八苦」とは面白し、皆三つぼの賽の目の名にて、四九は四、九、十四、八九は八、三、十三、十八、四苦八苦の事は前にいへり「一廉は立棒で受まする」これは錢を數へずに、棒に立て、張るを、胴も同じ高さに立て、受けるをいふなり、
 「ひり十」 ひりは七、十二、十四、十は五、十、十五、
 「根だ切りお出でか」 あり錢を殘らず張るをいふ
 「南無骰子明神なり給へ」至妙の晒落、なりは六、十一、十六、
 「でつくの」 は一、四、
 「ぶさ」 は無沙汰にて、不義理の意、借りて返さざる等
 「暗骰子ば」 不正の骰子

打明。「チ、むくで是程有れば。今夜の資本は樂々。サアマア神様から振らしやませと。張も投るも我一人。三つぼのさいをめたばり。「おつと神の四苦八苦。一廉は立棒で受まする。是からおれが親の番。サア、神様張らしやませ。ハハアひり十にねだ切お出か。爰を一番當度いが。南無骰子明神なり給へ。當り給へと。ぼいと投れば。でつくの一。サア仕てやつたと攫へる賽錢。「神様も一文無し。是からは拜殿燈籠。神樂太鼓なんなりと。形を見ねば錢貸さぬ。譬へ貸ても。正直を面にする神様なれば。よもやおさは打しやるまい。負たと思ふて神腹を立てさしやんな。全く我等暗骰子はつかやせぬ。イヤはや。どうといふた逆。あへんど一つ打しやれぬ。結構な神様と。錢の有たけ財布へねち込。「コレ盗みやせぬ。相對づくで勝た錢。勝ついでに何なりと。せしめてくれんと。邊うそく。欲の眼に見付

「あへんど」はこたへの意、

「首はころりと落合藤馬」とかけたり

「先へ」跡に」 相應ず、
味ひあり、
「百年目」 は絶體絶命の
かれぬ場合にいふ語、百年
目のなりといふ意、

る太刀。是幸ひの一資本と。拜殿に駈け上り。潜りの鐵物捻切
 く。己がせしめる奉納の。太刀脇はさみ駈出す。向ふへ長尾
 の家來落合藤馬。供人引連れ追取廻し。最前より窺ふ所。御主人
 の奉納の太刀。盜取るには仔細ぞあらん。白狀させんと飛かゝる
 を。引ばづして拔手も見せず。首はころりと落合藤馬。スハ狼
 藉と取まく家來。博奕打には似合ぬ横藏。薙立く追ふて行く。
 折から出合ふ長尾三郎。人音太刀音心得ずと。窺ふ足元落たる
 首。御燈の光りに能く見れば。家來落合藤馬が首。ハツト驚き
 邊を見廻し。思案廻らす横藏は。血刀提立歸り。心がゝりは以
 前の首。後日の邪魔と暗がり。さがせば景勝聲をかけ。「汝が
 尋る心の一品。今神前で某が。拾ひ取てコレ爰にと。差出す首
 を見て恟り。返答一句も先へは出ず。跡に家來がはらくく
 「奉納の御太刀を盗み。落合殿迄殺せし曲者。最早遁れぬ百年め。

「社燈の光り顔つくぐ」
景勝身がはりにせんとて助くるなり

「成敗」は仕置き之意

「ぶまん」は不運の意

腕を廻せと追取りまく。待てく者共。眼前の家來の敵。身が手
にかけんと社燈の光り。顔つくぐと打守り。落合藤馬が首討
つたる手の中。多勢を相手に薄手もおはぬ。力量をしながら。
盜賊と聲をかけられ。刀を投出し。誤入つたる頼付は。まんざ
ら理非の辨へない奴でもない。こりや儕出來心ぢやな。武士の
家來を手にかけてし憎い盜賊。只今成敗するやつなれ共。命は助
けた。エ、すりや御赦免下さるゝか。ナ、長尾三郎景勝。身が
手を下して討べき首は。天が下に一つか二つ。儕ごときに目は
かけぬ。此社に一七日參籠の大願。未だ満てざる内なれば。一
命を差赦す。餘人に个様の狼藉せば忽絶命。頼魂に見所有る奴
性根を改め。其首の胴に付いて有やうに。慎をれと和らかに。
生れ付たる大名風。供人引連れ悠々と。心残して立歸る。「ア、
ひやいな事。命一つ拾ふた。是から博奕場へ行た迎。此ぶまん

「信濃烟草」 名物なるべし

「すつば」の車遣ひとつづけたり「すつばすば」をうけて「すつばの車遣ひ」といへりすつばは泥坊又悪者なすふ

「やまい事」 面白し

「千手観音」 は七観音の一、前にいへり、

「有髮」 は髪を垂れ被りたるをいふ、もと佛語にて、髪を蓄へたる正行者（優婆塞の類）の稱、此老人は齋藤道三にして、濡衣の父なり、總解を見よ

では埒が明くまい。一服香でいんでこまそと。力石に腰打かけ
 摺火燧取出し。信濃烟草をすつばすば。すつばの車遣ひども。ど
 やくくと社内に入り。横藏を取廻し。「わりや此力石の法知つて
 居るか。チ、知つてゐる。此石を上る覺が有つて。腰かけたが
 何とすりや。ハ、ハ、ハ、ハ。己に千手観音の手が有つても。な
 らぬく。石は扱置。おいらが相手に成つて見よと。兩方より
 小腕取れば。ぐつと捻上。「やまい事すなやいと。右と左へ踏み
 のけ蹴のけ。後へ取付勤八が。首筋擱で引廻し。宙に提げ二人
 が中へ人礮。こりやたまらぬと三人が、頬も體も砂まぶれ。ほ
 うく逃て立歸る。「エ、弱い奴等。力石くくと仰山にぬかせ共。
 拍毬程な此小石。まつとおつたら上るのを。見せうにと兩手に
 ひんだき。かるくと。ぐつと上たる石の下。穴を穿てぬつと
 出る。白髮交りの有髮の老人。身には菅簀異相の體。さしもの

「血判」は誓ひに指を刺して血を捺すをいふ、至誠の意を表するなり、佛家より出でたる事なるべしと

「胸中を巻込んだ此一巻」

よくいひたり、極めて秘事なるを知る、互に血判を望み、互に家來にせんといひ、互に胸中を明さぬ趣向、頗る妙

「とゞまる所は天下」語頗る壯

「同腹同性」は同じ心なるをいふ

「志す方は六十餘州云々」

涙人にして天下を望む意、よく知れたり

「七重八重花は云々」此歌の「みの一つだになきぞ

横藏ぎよつとして。下界の人か仙人かと。顔をながむる計也。

「若者力量見届た。此一巻に血判せい。ム、此地の底を住家にし

て。人をためす心の底。問ねど聞ねど。大望有る人と見た。品に

よつたら頼まれませう。が此横藏も。其元様の器量を見立て。

頼たい事がござります。ホ、ウ小賢しくも申したり。主従は一

體。主は家來を頼。家來は主を頼むならひ。汝が頼みの仔細は

如何に。則ち是にと懷中より。一卷を取出し。「老人是に血判が

して貰たい。ハテ思ひ合つた頼ぢやな。汝も。御邊も。かはら

ぬ大望。身は其方を家來にする氣。身共は御邊を家來にする氣。

どちらへどう共決せぬ中は。胸中を巻込んだ此一巻。滅多には打

明られぬ。此方逆も此胸の中。開かぬ中に返事が聞たい。身が

返答より。其方が住所は何國。ソレ聞たい。イヤ只野山を住家と

すれば。住所としては定らず。とゞまる所は天が下。ム、面白い。

悲しき」の句にて、後に横藏(山本勘助)が、足利氏の爲めに美濃をきり取られたる、齋藤道三なることを看破るなり、歌は醍醐天皇の皇子、兼明親王の詠なるを編尾に太田道灌の作とし、道三を其子孫とせるは、道灌が蓑の斷りに、山吹を出されたりといふ故事(此時は實のに蓑をかけたるなり)に思ひつきたる趣向なるべし

「蓑」を、うけて「七重八重」といひ「十府の菅蓑」とつゞけたり、これ夫木集、陸奥の十ふの菅なも七ふには君なし寝せて三ふに我れ寝む」より書く、十ふは十あみの意、作者が古歌を極めて巧みに用ひ、これを面白くあやなして書きたさ、手際は感服、宜しく味ふべし、

よし所在は聞かず共。一旦我目にかゝつた上は。雲の裏でも尋さがし。味方に付けるは折が有ふ。天が下を志す汝が望も。某と同腹同性。我も定めぬ旅の空。志す方は六十餘州。雨舎りする天が下。人目を凌ぐ雨具をくれんと。着たる菅蓑ぬぎ取つて「七重八重。花は咲け共山吹の。みの一つだになきぞ悲しき。重て逢ふと投やれば。」ム、天晴餞別。受まして。手前も寸志の置土産。返辨申すと力石。ぐつと引上げ投付れば。心得たりと受留めて。「慥に落手仕る。ボ、ナ御邊の力量も。試申して先安堵。再會く。再會するは此蓑を。印にあふは。七重八重。十府の菅蓑打かたげ。さらばくと諸共に。口にいはいはねど胸と胸。知らせ合たる曲者共。別れてこそは。立歸る。」

本朝二十四孝 桔梗が原の段

總 解

此段は、桔梗が原は信州東筑摩郡にありて、鹽尻より松本に至る四里許にわたり、古戰場にして信玄謙信も此あたりにて雌雄を争ひし事あれば、以て甲斐領と越後領との境とし、武田家の臣に高坂彈正、保科彈正とて二人の名士ありしが、高坂は智謀ありて、機を察し難を避けて、敢て危きに臨まず、保科は剛勇にして、敵を衝き難を犯せしかば、時の人、高坂彈正逃彈正、保科彈正鎗彈正とうたへるを取りて、高坂を武田、保科を長尾の臣とし、兩領の界に二度の争をなさしめ、前の荊草の小事に鎗彈正を勝たし、後の捨子の大事に逃彈正を勝たし、即時にしつべい返しをなさしめたる趣向、頗る巧に且妙なり。しかして妻は勿論、奴等まで、其主の氣を

受けしめたるもおかし。これもと。信玄を智謀。謙信を荒氣の大將と。其性質を書き分けしより來れるなり。

さて慈悲藏の由來につき一言せん。彼れは直江山城とて上杉家に仕へ。景勝に隨つて京都の將軍義晴の館に居て。其妾賤の方に仕ふる女中八つ橋と通ず。義晴不慮の死に際し。守護せる賤の方を。何者とも知らず。奪取られ。申譯の爲め切腹せんとせしを。謙信が情のはからひにて。勘當して八つ橋と共に落せしなり。かくて母の膝下にありて孝養し。兩人の間にまうけしが此捨子なり。其理由は次段を讀まば自ら明なり。

桔梗が原の段

「名も山深き云々」 桔梗が原とは頗るやさし、よく書きたり、桔梗が原は東筑摩郡にある廣き野原、これを甲斐越後兩領の界として面白く作れるなり、總解を見よ、

「さい目」 はさかい目
「やつこらさ」 奴等をかけたなり、
「二本きめた云々」 刀より鎌の手利なるべし、
「威光を刈場」 とかけたなり、
「どつてう聲」 は下種者の大聲をいふ、前に委し、
「下主」 はいやしき者の稱、下種、下衆、下司など書く、
「ひろいだ」 はしろいだ、東京の下種ばひをしとい

桔梗ヶ原の段

名も山深き信濃路に。優しき花の名に呼し。爰ぞ桔梗が原とかや。甲斐と越後の領分に。わけて立たるさい目の場所。秣を茹にやつこらさ。一本きめた刀より。研立つ鎌でぐわツさぐわさ踏あらしたる名々が。主の威光を刈場の領。是も同じく二人連籠に柵を指荷ひ。見て悔りのどつてう聲。「ヤイ下主め。うらが部屋では。ついに見た事もないしやつ頼共。誰に斷り此秣を茹ほした。悪く言譯ひろいだら。二人共に首が飛ぶ。盗人めらと云はせも立す。「ヤア下主の口から下主呼はり。しやらくさい。忝くも甲州の主。信玄公のお馬の飼領。うぬらが知つた事でない。すつこんでけつかれと。猶も引きぬく手先を捉へ。「ヤイ此印が目に見えぬか。甲斐の領分は是より東。西は越後領分と書て有

ひ、大阪の下種はしをひと
いふ、これ一奇、
「下主の口から下主呼はり
然り、世間に往々これあり
「返答こつゝり」 とかけ
たり、

「聲襠の」 とかけたたり、
紋切形、
「腰かけ奥家老」 とかけ
たり、

「沓藏百内」 名面白し、

「狼藉者」 は無法者、前
に解せり、

「國がかはれば云々」 あ
てこすり妙、入江が夫の氣
性をうけて、出過ぎたる動
作、よくかきたり、

るは。うぬらが眼にかゝらぬか。盗人といふたが誤りか。サア
く何とゝきめ付られ。返答こつゝり後から。握り拳を二つ三
つ。「ヤア傍輩をぶたれては。後日に主君へ云譯立たぬ。やぶれ
かぶれと二人の奴。いどみ争ふ折こそ有れ。「兩人共にしづまれ
と。聲襠の裾けはらし。高坂彈正が妻の唐織。越名彈正が女房
入江。夫れと指圖に姦共。用意の腰かけ奥家老の。女房と見る
より下部共。わかつてこそは躡る。入江邊に心を付。「誰ぞと思
へばお厩の沓藏。百内。何故の争ぞ。事によりては聞捨られず。
包まず語れと尋ぬれば。「ハイ」。喧嘩の元は馬の飼領。信玄
殿の家來とぬかし。此方の領地へ踏込。苳あらせし狼藉者。我
々に見付られ。云譯なさの摺合と。語る中より最ふよいく。
「夫れでさつぱり様子が知れた。國がかはれば心迄。かはればか
はる。甲斐の國は。すべて盜賊はやりしと。人の噂も嘘ではな

「確執」はあらそひ、い
ばかひの意、

「花咲く木々の枝とても」
頗るきびしき掟
「落花狼藉」の語よく利

いと。あてこすられて唐織も。勃とはせしが押しづめ、「互にお
主の確執より。おのづと隔たる兩家の中。家來の仕落は幾重に
も。お詫申す筈成れ共。只今のお詞に。すべて甲州には。盜賊
有りとおつしやつた。其一言が承はりたい。ナ、唐織様とした
事が。何の根間に及ぶ事。元此信濃は村上左衛門義清殿の領地
成しが。謙信様と信玄様。兩人して切取り給ひ。此所にさいめの
印。夫れを知つゝ狼藉せしは。あなたの御家來。國の守の扶持
人さへ是じや物。ましてや町人百姓は。猶以て狼藉するは知れ
た事。イヤおつしやんな。印有りとは云ながら。一つに續し原
なれば。過て踏越しも。いはゞ下郎の苅取る草。イ、ヤ下郎に
もせよ。誰にもせよ。其過をさせまい爲。建たる榊木は國家の
禁制。花咲く木々の枝朮も。折取るまじと記せしを。手折は則
落花狼藉。此領分の印に限らず。譬へ白紙に書連も。事を制す

きたり、

「國を盗むも同じ事」

針

小捧大、

「一口」 には同一に、

「高坂様は辻彈正云々」 高

坂彈正辻彈正、保科彈正鎗

彈正といへるより書く、總

解を見よ、此過言、段尾にて

鼻明さるゝもと、

「違ひやんす」 奥家老の妻

の詞としては、甚だいやし、

淨瑠璃にはまゝ此きらひあ

り、

る理に等しく。是皆國の教として。掟を守るは貴人より。下々

の掟とする。「謙信様の息のかゝつた領地へ踏込。草一筋でも蒞

取つたは。國を盗むも同じ事。其儘に指置ては。夫彈正が越度。

女房の身として見て居られず。高坂様はとも有れ。私が夫彈正

殿。ついに一度も名を穢せし事なければ。お前の殿御と一口に

は。ほんに言ふても下さんすな。「コリヤ面白い聞所。お前の殿

御が執權なら。私が夫も執權職。イエ〜そりやお前の胸一つ。

深い様子はしらね共。侍衆の口癖にも。高坂様は辻彈正。こち

の夫は鎗彈正。人に勝れた鎗の上手と。辻足早いお侍とは。異

名さへ違ふ物。まして心の内外も。違ひやんすと。ほのめかす。

「イヤコレ入江様。武士の身は情によつて。退くも逃るも軍のな

らひ。チ、好い口な事おつしやるな。情でそんな異名を取る。

武士の法がござんすかと。いはれて唐織當惑の。何とせんかた

「越度」は過失の罪をいふ、もと關所渡津などを抜道する、法律の語にて、落度と書くは、却つて誤れりといふ。

「さみする」はあなどる、けなす、(もと扱みする意と)

「今日の御禮は云々」段尾にてお禮申さるゝ伏線、「非太刀は受けぬ」一本參らるゝやうな事は、しな

いとふ意なるべし、「露程もお障り有らば」これも後にしつべし返さる、

「残す詞も針の先云々」書ぶり頗る妙味ふべし、「筑摩郡」は東西に分れたり、慈悲藏の住めるは、西筑摩郡の木曾山中としたるなり、

「生得」はうまれつき「郭巨にもかからで積る

此場の無念。廣言憎しと思へ共。入込た越度といひ。夫をさみする詞の端。聞につらさもいやまさる。涙隠して。入江様。「花

によそへ名に顯はし。非を改るお前の存分。かへす詞も家來の仕落。今は此儘歸る共。滿れば欠るの道理にて。今日のお禮は

重ねて急度。「ナ、そりやおつしやる迄もない。私が方に非太刀は受けぬ。此以後主人の領分へ。露程もお障り有らば。二度と

赦しは致さぬと。残す詞も針の先。眞綿に包む唐織が。立寄る所をとむむる下部。是非も涙の道筋を。左右へ「こそは別れ行

く。爰に信州。筑摩郡の邊に住む。慈悲藏といふ者有り。生得親に孝心の。道は昔の郭巨にも。かはらで積る年の數。三十路

の上は漸と。二つか三つの稚子を。抱入れたる懷の。内曇なる冬の空。寒さを凌ぐ種ならで。歎の種となりふりも。茫然とし

てぞめり。「ハ、誠や人間の吉凶は。生るゝ時の運に任すといふ。

年の數云々」よく書きたり、郭巨は唐土廿四孝の一、母へ孝養の爲め、子を埋めんとして、黄金の釜を掘出せしといふ人、捨子の所ゆゑに、孝の例に出せるなり、なほ次段の總解を見よ、「腹の内曇なる冬の空寒さを凌ぐ云々」捨子のさまあはれなり、「やぶんざ」は「飲めやうたへやさぶんざ」濱松の音はさぶんざ」などいひて當時流行の小唄、目出たき時などによく唄ひしものと見ゆたり、委しくは伊賀越婚禮の段を見よ、「わづか慈悲藏」とかけたり、親の思うすきをいふ「親の心子知らず」とは昔よりの諺、二つか三つの稚子、眞に知らざるべし、「現なく」は他あいなく

母の胎内を出しより。誕生の祝儀迎。さぶんざ諷ふ悦びは。貴人高位はいふに及ばず。下萬民の我々迄も。悦びに悦びを重るが親子の縁。夫に引かえ其方は。わづか慈悲藏が躬と。生れ來るもそちが因果。親の心子しらずと。我肌付れば現なく。結ぶ榮花も夢の夢。頑はなけれど聞いてくれ。「親として子を捨るは人間ならぬ境界と。笑ひし此身に廻りきて。今といふ今。其方を爰に捨置き。此親が獨の母へ孝の爲。捨れば拾ふ神佛の。力をかつて成長せよ。親と思ふな子でない。思ひ切ても切り兼ねる。産の母が歎きといひ。我も不便さ身にせまれど。そちをかばへば不孝と成り。孝を立ればそちが難義。理にせまりたる思ひ子を。捨る此身の孝行より。捨らるゝおとが孝行。慘いとはし思ふなど。云譯涙目も明かねば。そつと傍に置土の。上に伏たる稚子が。わつと泣出す。聲に恟り抱き上。泣を道理と爰

の意(俗間に夢うつゝなどいひて、現を夢と同じものゝやうに心得るは誤なり、現は夢に對して覺めての行爲なり。)

「捨れば拾ふ神佛の」捨てる神あれば拾ふ神ありといへる諺より書けり、

「かつて」ばかりで、東京にては買ふ事をおつてといひ、上方にては借る事をおつてといふ、余これにて

屢失敗せり、
「おこと」ばそなた、
「山を越えて里へいた云々」
子守り歌なり「寢兒の守りは何所へいた、山を越えて里へ往た、里の土産に、何もゐた、でん／＼大談に云々、
「思ひは二重」羽二重をかけたるか、
「一世の別れ」親子は一世、

かしこ。「山を越えて里へ往た。里の土産の見納めと。抱きしむればすや／＼顔。道童の氣さんじと。打守り／＼。名は慈悲藏の慈悲もなく。今目前に捨置て。歸るとしらぬ心根を。思ひ出せば不便やと。いと／＼涙のやるせなき。「ハア我ながら誤つたり。心よはくて叶はじと。包み廻せし絹の香の。思ひは二重胸の闇元の所へ押直せと。知らぬ子供寝入ばな。一世の別れと練言を。跡に残して雪國の。つもる歎としられたり。かゝる折ふし。

甲斐國の執權。高坂彈正時綱。供人數多引具して。當所筑摩の御社へ。詣の道もぼう木の傍。件の捨子に眼をくばり。「人音稀な街道に。捨られし稚子は。犬狼の餌食は治定。見捨るも本意ならずと。家來をとぐめ歩み寄り。「ム、最早嬰兒といふでもなく。男子と見えて氣高き寐顔。いやしからざる者の悴。何故爰に捨置し。仔細はいかにと。見廻す小袖の付紐に。付たる下札

「跡に残して雪國の」と
かけたり、信濃は有名な雪國。

「執權」は鎌倉時代、政を執る第一の職にして、北條氏代々これに任ぜり、此種の本には家老といふ程の意にて、無闇に用ひたり、「高坂彈正時綱」は昌信を書かへたるなり、武田信玄の臣にし、海津城を守り、北條上杉の侵掠を支へし人なり、性沈雄にして謀を好み、機を察して遠く慮り、危難を避けしかば、逃げ強正と稱せらる、勝頼の長篠に敗るゝや、海津城より來り迎へ、心を盡して盡策せしも用ひられず、國勢の日々に衰ふるを憂ひ、天正六年五月十一日、遂に病みて歿す、年五十三。「箕摩の御社」松本市の

手に取上げ。「何々甲州の住人山本勘助と。讀も終らず不思議の顔色。」此山本勘助といふは、生國は三河の者。山賤と見えて魂は。異國の韓信。孔明にも劣らぬ軍者。主人豫て御懇望。かゝる亂世の其中でも。諸方に招く今日只今。此稚子に名を記し。捨たる主こそ芳しき。勘助を味方に入るゝ。信玄公へよき土産。ヤン／＼者共。身が屋敷へ連歸れと。詞にはつと若黨中間。抱き取らんとする所。「高坂殿暫くと。聲をかけたる立派の侍。家來につかせし鎗印。長尾入道謙信が郎等。越名彈正忠政。我領分に打通れば。高坂は甲斐の領。ぼう木の中に挾箱。不和成る中の兩執權。すは事こそと下部迄。片唾を吞で聞居たる。「イヤなに高坂殿。只今物かげより承はれば。是成る捨子が下札に。山本勘助と書付し故。お拾ひなさるゝ御所存。尤とは存ずれ共。見まする所双方の領分へ。かゝり合せし土は。貴殿のまゝにも

東南を筑摩と稱し、筑摩郡社八幡宮あり、これを取りしなるべし、

「みづこ」 はうまれたての子、

「山本勘助」 は三河國牛久保の人初め今川義元に見

はて用ひられず、去つて信玄に仕へ、任用せられて大に武功を立つ、永祿四年川中島の戦に戦死す、年六十九兵法の達人にして、信玄

新道の鬼神なりと嘆賞す馬場山縣の宿將を始め、彼れに従ひて兵法を學び、名を擧げし者多し、委しくは

次段の總解を見よ、「やまがつ」 は木こりなどするいやしきもの、

「韓信」 は漢の高祖に仕へ、所謂三傑の一なり、兵を用ふる事神の如く、漢家

一統の武功は、殆ど此人に

成ますまい。手前の主人長尾謙信。日比望みし折に幸い。其姓名を書顯はし。爰に捨しは某が。願ふてもなき忠義の一品。貴殿に遣ては武士が立ぬ。是非連て歸りたくば。彈正が首諸共。さもない中はいつかな叶はぬ。ホ、さい目の論なら金輪際。拾はにやならぬ稚子が。踏たる足は手前の領分。イ、ヤ左にあらず。物の始を頭といへば。此方の領分を枕としたる山本勘助。越後の國の旗大將。見事貴殿は拾ひめさるか。ヲ、いふにや及ぶ。我方へ踏延したる足元が。肝心要の甲斐の國。高坂彈正か拾ふて見せう。イ、ヤ越名彈正が連れ歸る。イ、ヤならぬと刀の柄。理を非にさせぬ詞詰。争ひ爰に二人の女房。とくより立聞く此場の時宜。見やる眼も角菱の。めい／＼夫を押隔て。高坂が妻威儀繕ひ。及ばぬ私が一思案。女の差出がましけれど。彈正殿聞しやんせ。一甲斐と越後の領分へ。捨置し稚子は。兩家に

歸す、就中趙を破りし背水の陣は、後世の感嘆する所なり。

「孔明」は三國の時蜀の劉備(玄德)に仕へ、天下三分の計を盡せし人なり。兵法の達者にして、屢奇策を用ひて強敵を破り、孔明出でて、蜀衆は孔明死して蜀衰ふ、といはれしほどの柱石の巨なり、彼れが作れる八陣の法は、後世兵家の尊重するところ、又よく文を屬し、出帥の表前後二篇は、三國唯(の)名文と稱せられ、これを讀んで泣ざる者は、忠臣にあらずと嘆せらる。「越名彈正忠政」は保科彈正正俊を書替たるなり、正俊は信州高遠の城主にして勇猛の士なり、天文中武田信玄に屬し、陣に臨むこと八十二、功を立つること

望む山本勤助。是を手筋に召抱える。お前方の胸の内。一方へ拾はれては。是非一方の國の恥。其争ひの基と成り。肝心の此子に乳も吞さず。若もの事が有たらば。お望も水の泡。何にもせよ兩方より。乳房含まし其時に。いづれへ成共吞付く方。夫を印にお拾ひ有らば。どちらにひけも劣りもないと。わしや思へ共跡や先。思案してたへ我夫と。遺女の智慧の海。實に高坂が妻なりし。「女房出かした。争ひとむる乳房の鬮取。幸ひ其方が持合せし。乳をあたへて試せん。彈正殿も相應な。乳母でも有らば出されよと。入江に當たる詞の端。聞くより嚇とせき立つ入江。おかもじ様の御思案に。鼻毛延した今のお詞。「越名彈正忠政か女房。乳母奉公は致さぬぞ。今一言おつしやつたら。赦しはせぬと腹立聲。一ヤイく馬鹿者。大事を前に置きながら。無益の舌の根動すな。イヤなに高坂殿。負ふた子に教られると

三十七、人之を賞して槍彈正と呼ぶ、高坂と共に武田家の臣なるを、上杉の家來として面白く作れるなり「ぼう木を中に挾箱」とかけたり、ぼう木は界標の木をいふ、挾箱は挾竹の遺製にして、舊幕の頃、士より以上の者、他行するとき着替の上下など入れて、供に持せしもの、大名の行列にも用ふ、

「金輪際」 ほどこまでもの意、もと佛語、大地の下にありて、之を支ふる三輪の一なる、金輪のある所をいふ、

「踏たる足は手前の領分此方の領分を枕としたる」 いづれも面白く、いづれも有理、

「見やる眼も角菱」 とか

やらで。内寶の詞に服し。女房／＼が乳を勧め。どちらへ成り共方を付け。此場の別れは如何ござらう。ホ、そりや此方も望む所。呑むか呑まぬは互の運づく。唐織早くとすゝめられ。だくつく胸も押しづめ。抱上れば目をぼつちり。明て三つの稚子がわつと泣出す口の内。乳房ふくめて賺しても。呑む躰さらに見えざれば。見合す夫婦が顔と顔。「コレ申し唐織様。何ぼう勧めさしやんしても。子供はどうでも正直な。わしが代ると抱き取る入江。心に拜む神よりも。頼みに思ふ此乳を。たつた一口呑んでたもと。揺振り歩けどけがな事。猶も正躰泣きさけふ。聲をとめんと手に汗を。握り詰たるいたいけも。憎やとすねて置く露の。頼みもつなも切れ果し。入江が思ひ唐織も。残り多さに又立寄り。賺し宥めて抱上ぐれば。泣やむ不思議女房より。高坂彈正大に悦び。「軍師山本勘助。信玄公の御味方と。いほせも

「聞かしやんせ」の語も

いやし、

「兩方より乳房含まし云々」

流石女の妙案、裁判の妙法

といふべし、

「女の智恵の海實に高坂」

とかげたり、智恵の海は智

恵の深きをいふ、味ひあ

り、

「おかもじ」は御かみ様

の略、婦人の語に何文字と

いふ事、足利時代の末に起

れる由、前にいへり、

「鼻毛延した」は女など

の愛に溺るゝをいふ、鼻毛

の延びたるは阿房めきたる

よりいふか「鼻毛にてとん

ぼをつりし罪咎はあほうら

せつの責やうくらん」

「負た手に教へられる」

負ふた兒に教へられて淺き

瀬を渡るといふ諺、自身よ

りあさどきものに教へらる

立ず。ヤアくくらくらく。兩方共に吞付かねば。未だ善悪知

れざる中。其方が連歸る。其譯聞んと詰かくる。ホ、合點行ず

ばよく聞れよ。入江殿が抱上れば。泣くは治定。あの如く。身

が女房が手に有る中。泣ぬが縁有る是れ證據。又二ツには。甲

州の住人。山本勘助と有るからは。紛ふ方なき手前の領分。最

前ちらと承はりしが。越後領へ指さば。此後は赦さぬとやら

ナソレ御内寶の詞も有れば。是連もまつ其如く。稚けれ共甲州

の町人。其元がお構あらば。却つて狼藉國賊の名を取るか彈正

殿と。先にかけてたる詞の裏釘。折返されてさしもの彈正。返答

せき切る女房入江、思へば無念と唐織が。抱し稚子無理やりに

引取ればわつと泣。是は無禮な入江様。「さつきの喧嘩に負たる

かはり。其子計は叶はぬと。あなたこなたと挑あふ。棠ほらほ

ら妻と妻。顔はほのめく薄櫻。亂れちつてぞ争ふ風情。一度に

をいふ、

「内實」は他人の妻を呼ぶ語、内方の當字なるべし

「だくつく」ほどきづく

「目をぼつちり明けて三つ

の稚子」とかけた、

「心に拜む神よりも云々」

句よし、

「けがな事」

はどうして

の意、

「いたいけ」は子供の愛らしきさま、

「すれて置く露の頼みも」

とかけた、頼も綱もは頼

の綱もといふなかく書なれ

しなり、

「先にかけたる詞の裏釘折

かへされて」果してしつ

べいかへされたり、筆頗る味あり、

「正直は頭にやどる神の慈悲」諺に「正直な頭に神やどる」又菅公の詠に「心だにまことの道にかなひなば祈らずとても神やまもらん」

「一陽の春を待つ」一陽來復の語より書けり、冬の陰去て、春榮ゆる陽來るをいふ、

「耶等」は家來の意、委しくは前に解す、

「鎗彈正、逃彈正」の事は總解と通解中の傳を見よ、受けてはたまらぬ云々「これはしつべい返し、頗る妙、

わくる夫と夫。中にも高坂聲勵し。實やいたつて正直は。頭に

やどる神の慈悲。一陽の春を待つ。雪中の梅にも優る主君の悦

び。此身の忠義。さればいな。お慈悲深い信玄様の。御威勢が

顯はれて。私が無念もたつた今。サア申し入江様。最前のお詞

に。お前の殿御を何とやらおつしやつたが。今一言御所望と。

嘲る女房。「ホ、聞たくば名乗て聞けん。長尾入道謙信の郎

等。越名彈正鎗彈正。イヤモ天晴手練の此鎗先。受てはたまら

ぬ大事の稚子。連て手前は逃彈正。唐織來れと立別る。胸に

一物二人の彈正。爰に捨子の隨一と。其名も高き山本氏。伴ひ

歸るぞ「ゆゝしけれ。

景勝下駄及勘助住家

總 解

此二段連絡し居るゆる。合せて總解すべし。本朝廿四孝の題號は。これよりつけしものなるゆる。作者が最も意匠を凝らして。作れる事はいふ迄もなく。隨分妙所もあれど。子細に看來れば。巧に過ぎて混雜を來し。條理亂れて。作りものらしくなりたる所あり。武田の軍師に山本勘助。上杉の重臣に直江兼續(山城守)とて。智謀の名士ありしを取りて兄弟とし。兄の横藏は。横に車の横道者にして。不孝の有丈を盡し。弟の慈悲藏は。虫も殺さぬ慈悲者にして。孝行の限をなす。兄の不孝も理由あり。弟の孝行も理由あり。いづれ劣らぬ孝行者。忠義者。双びなき智勇の士にして。右は左へ。左は右へ。兩家に分れ仕ふるといふ。趣向のたくみなり。氷に魚を取るは王

祥。雪の筍を堀るは孟宗。子を埋めんとして。黄金の釜を堀出せるは郭巨の故事。いづれも唐土廿四孝の一にして。これになぞらへて書きしゆゑ。本朝廿四孝と題せしなり。しかして。景勝が老母の下駄を取りてさゝげしは。本文にもいへる如く。黄石公と張良との故事によれる事いふ迄もなく。枕にて打たんとするは。伯瑜の事に思ひつけるにはあらざるか。武田信玄姿をやつして。一人庵を訪ひしといふは。蜀帝劉備が孔明の草蘆を三顧せし故事に似たれど。信玄勤助の英名を慕ひ。姿をかへて再三芽舎を訪ひ。終に迎へて軍師となせり。といふ説は傳はれり。此説の孔明の故事より出でしやは知らず。左に。人々の傳を略記すべし。

山本勤助三河國寶飯郡牛久保村の人にて。有名なる豊川稻荷の西凡一里ばかり。其宅地と稱する所は田野となり。守本尊といへる摩利支天は。同所長谷寺に安置す。勤助長短く。一目にして跛足

なり。大林氏に養はれ、伯父成氏及鈴木重辰を師として兵法を學ぶ。出で、駿河に遊び、今川氏に仕へんとせしが、義元其容貌の醜なるを見て輕蔑し、肯て用ひず。去つて甲斐に往き、信玄に謁す。信玄其才を識り、舉げて用ひて軍師とせしかば、勘助も心を盡して之に仕へ、屢功を顯せり。永祿四年上杉謙信侵入して川中島に至る。勘助晴信に戰を勧め、其諸將を部署し、陣營を分布する。皆勘助の籌策する所なり。既にして越軍兵を潛め、曉霧に乗して猝に咫尺に迫る。勘助長嘆して曰く、兩國干戈を交へしより幾んど十五年。戰を挑む事十餘度。未だ一回も敵の軍機を見誤る事なし。今河霧の爲めに大軍の近くを知らず。是我が運命の盡くる時なりと。部下一團を従へて敵陣に突進し、縱横奮鬪十三騎を殺し、七騎を傷け、竟に本所左馬介野間五郎太夫の爲めに倒る。年六十九。法名鐵巖道一。初め信玄、勘助の善く兵を用ふるを見、歎じて曰く、兵法

の鬼人なりと。勘助信玄に従ひ。剃髮して。號を道鬼と賜ふ。甲斐の宿將馬場山縣の諸士。勘助に従つて兵法を學ぶ。其他師事して名を著すもの。竹中重治。穴山梅雪。真田幸村等あり。本編の後半は。勘助を以て主人公と謂つべく。又本段の眼を扶り。足に手裏劔を立てしは。彼れが一目跛足なりしより作れるなり。

直江兼續 樋口兼光の後にして。上杉謙信に仕へ。美童を以て寵せらる。長ずるに及び。直江大和といへる者。嗣子なくして死せしかば。謙信其後を繼がしむ。よつて直江山城守と稱し。智謀すぐれしゆゑ。老臣に列せらる。謙信死して其子景勝に仕へ。關が原の役。石田三成に通じ。東西相應じて。家康を夾み撃たんと圖る。景勝聽かざりしを以て。遂ぐる事を得ず。後大阪の役。東軍に従ひて功あり。干戈戢りて後は文事を娛み。元和五年十二月卒す。年六十。彼れにつき最も面白き話は。閻魔王に書を贈りしといふ事なり。景勝

の臣三寶寺勝藏といふもの。一日其僕を殺す。蓋し其罪にあらざるなり。親族之を怒り。兼續に訴へて其死を返さしめんと請ふ。兼續再三之を諭して。白銀二枚を與へ。以て葬費に充てしむ。親族肯かずして。死を返さん事を強請す。兼續怒て曰く。然らば訴の如くせんと。其三人を捕へ。一書を托して曰く。使に冥途に當つる者なし。汝等三人閻魔の廳に往き。彼れを得て還るべしと。遂に之を斬る。其書に曰く。未得御意候得共。一筆令啓上候。三寶寺勝藏家來何某。不慮の儀に付相果申候。親戚共歎き候て。呼返し吳候様に申候に付。則三人の者迎に遣し候。彼死人御返し可被下。恐々謹言。慶長六年二月七日。閻魔王様。宜敷獄卒へ御披露。直江山城守兼續判編首に直江山城を美男に書けるは。謙信に寵せられしよりの事なるべし。

王祥臥氷求鯉

王祥字は休徵。瑯邪臨沂の人なり。不慈の繼母に

仕へて孝を盡す。繼母嘗て生魚を求む。時に天寒くして氷厚く鎖せり。王祥衣を解きて氷上に臥し。之を破らんとす。氷自ら解けて。二尾の鯉躍出しかば。之を捕へて繼母に供す。人以て天の感應となす。武帝の時大保に拜せらる。事晋書列傳に見え。蒙求にもこれを引けり。

孟宗泣竹生笋たけのこ 孟宗字は恭武。夏の人なり。天性至孝。宗の母筍を嗜む。時冬にして筍未だ生せず。宗竹林に入り哀歎せしかば。筍爲めに生ず。之をとりて母に供せし由。吳錄に見えたり。

郭巨爲母埋兒 郭巨は後漢の人なり。家貧にして母に孝を盡す能はず。或る日妻に謂ふて曰く。子は再び得へけれども。母は再び得へからず。今子を埋めて。以て母に孝養を完せんとすと。妻これに従ふ。共に穴を掘る。二尺ばかりにして黄金一釜を獲たり。釜上に「天孝子郭巨に賜ふ」と記せしかば。官も奪ふ事を得ず。人も取る

事を得ざりしと。孝子傳に見え。蒙求にも引けり。釜はもと量の名にて。黄金一釜だけの量を穫たるなるを。俗に黄金の釜を穫たりといひならはせり

張良孔明などの事は通解の中にあり

景勝下駄の段

「雪の中なる白髪しらぎの雪」これ所謂「縦得たてえ」春風はるかぜ又不利ふり消けの雪、
 「男おとこのすなる」土佐日記に「男おとこのすなる日記にてふものを女をもして見みんと云々」これより書けり
 「人毎ひとごとに岩間いわまの水みづの云々」とかけたり、冬景色ふゆがし見るが如し
 「寢兒ねねの守まもりば云々」子守り歌こもりうたにて前まへに出いせり「山やまを越こえてを、山やまの薪かきといひつゞげたり、
 「横藏よこざう」これ名なは實じつをあらはすもの
 しらるゝはせらるゝ

秋あきの末すえより。信濃路しなのぢは野山のやまも家いへも降埋ふりうづむ。雪ゆきの中なかなる白髪しらぎの雪ゆき女をんなながらも故有ゆゑあつて。男おとこのすなる名なを名乗なる。山本やまもと勤助かんすけと人毎ひとごとに。岩間いわまの水みづの音おとたえて。木この葉はの飴こたま二つ三つ。年としも幼氣いたいげ稚子わさなこを。賺すかすお種たねが手枕たまくらに。寢兒ねねが守まもりは何所どこへ往いつた。山やまの薪たきぎをゑいさつさ。さらば爰こゝらで一休ひとやすみ「お種たね女郎ざよう冷ひえますの。ナ、正五しやうご郎様らうさま戸助とすけ様。雪吹ゆきふで外そとは歩ありかかれまい。お茶ちやも沸わいてござんす。イヤく構かまふまい。子供こどもは手てが放はなされぬ。慈悲藏じひざう殿どのは留主るすか。今日けふもけふと寄合よりあふとあの人ひとの噂うはさ。お袋ふくろへの孝行かうくは申ますも愚おろか。兄あにへの深切しんせつ。ほんの子こは次つぎにして。兄貴あにきの息子むすこの其次そのじ郎吉らうきちを。大切たいせつにしらるゝ女夫めをとの衆しゆの心意氣こゝろい。名なも慈悲藏じひざうといふは尤もつとも。サレバイノ。夫それに又また兄あにの横藏よこざう殿どの。兄弟きやうだい迎むかふの様やうにも違ちがふ物ものか。親おやへの

「だぐれ込み」は思むのもかまはず入こむをいふ。「ぼした」も下女のこと。「おこもり」とは、面白くないひたり。「口はさがなき山道」とかけたり、さがなきはつしみなきさかしきは險しき「武士の梓弓胸の袋に押包む、孝なばづさぬ」皆縁の語、巧に書きたり、「獵漁も母の爲め」これ孝子王祥が、水上に鯉をとらへし故事より書く、總解を見よ。「鳩に三枝の禮あり」は鳩は孝の鳥にて、親の止まれる枝より、三枝下に止まるといふ、これ鳩は均一の徳ありて、其子を食せしむるに、且には上より下り、暮には下より上るといへるを、上中下三つの枝あるものと

不孝さ。弟へのむごさ。親兄弟にさへあれぢやもの。村中で持餘すが尤。外を家と出歩いて。隣邊へだぐれ込。人の娘下女婢當り合に孕まし。其おこもりのあの小倅も。親に似た子の鬼子である。口はさがなき山道を。ゆがまぬ武士の梓弓。胸の袋に押包む。孝をはづさぬ慈悲藏が。獵漁も母の爲。流に添て立歸る。「チ、孝行者お歸りか。佛性な慈悲藏殿。殺生に出られたも。お袋への養ひか。夫程にさつしやつても。氣に入らぬあの婆様は。去とはきつい片意地者。ア、これく。勿躰ない事いふて下さんな。譬身を粉に砕いても。胎内に有るから。今日迄の親の苦勞に。くらべて見れば百分一。あの鳩部屋の鳥でさへ。鳩に三枝の禮有る迎。諸鳥に勝れて孝行な鳥。何處からとも無ふ此家の軒へ集つて來のもの。慈悲藏が心少しは通じ。類を以て集つたかと思ふて。嬉しう思ひます。成程夫れはこちとらも。

解したるより、起れる説なりと、又いふ、これとは出典自ら別なりとなほ尋ぬべし、學友抄に「烏有^二返報^一孝^一、鶴有^二三枝禮^一」
 「何處^一からともなう云々」
 鳩の集り來るは、後に「兵器ある所には鳥群をなす」といはしむる伏線、
 「烏は親の養をばこく^二み反^一へす」は烏に反哺の孝ありといへるより、鳥の中形小にして群をなし、腹下白き者を鴉鳥と名づく、其母を反哺するゆゑ、慈鳥と呼ぶとぞ、
 「毎晩女房に孝行云々」よくいひたり、されど餘り孝行過ぎると、却つてきはるべし、
 「未練」は練れ熟せざる意より、轉じて思ひ切りわるきないふ、

去る書物で見つて置いた。鳥は親の養ひを。育かへすといふ本文。
 おれが毎晩女房に。孝行にする心が通じて。鳥がかあ〜かゝの顔。いんで見やうと。出て行く。「母者人は最前から。まだお休みなされてか。炬燵でお風ひかしますな。お目の覺めぬ其中に。お肴料理して上ん。次郎吉も寢入たか。ハイ此子が機嫌よふ育つに付けても。氣にかゝるは峰松が事。「眞に兄御の横藏様。いかに我子でない迎。捨て仕舞と無理計り。お前が外へ出やしやんと。私を女房にせうの何のと。辛い悲しい事聞くも。お前の孝行立る爲と。辛抱するにもしられぬは。眞實な子を胴欲な。餘所へやつたといはしやんすが。まあ其先は何國の誰。「ハテ夫れを問ふが最ふ未練。氣遣ひ仕やんな。此貧家に置ふよ。乳母に乳母を付る結構な内へ養子にやつた。彼奴はきつい果報者。最ふ思ひ出さずと。とんと捨たと思ふて居や。病煩ひ

「又と類は嵐吹く、音も雪吹の高足駄」よく書きたり味ひあり

「長尾三郎景勝」は父や

政景といひ、謙信の姉の子なり、政景謙信を滅さんと欲して、却つてこれが爲めに滅さる、よつて謙信に養はれて嗣となる、元和九年三日薨す、年六十九、法名は宗心、覺上院と號す、序ながら記す、
「万卒は求め易く云々」三略などにて見たる心地す、寧ろ後にて載すべし
「二重の腰の白妙に云々」白髪のお母が腰の曲れる状巧みに書きたり、注意して

といふ事も有る。萬一先で死だら。無い昔ちやと諦て。俺や居る氣ちやと。云ひながら。犬狼の餌食共。成はせぬかと子を思ふ。心は一つ一間の中。そつと窺ひ。是は扱。「寐入ござるかと思へば。裏へ出て御氣丈千萬。お炬燵に火も有るか。追付御膳の用意も仕やと。片時忘れぬ孝心は。又と類は嵐吹く。音も雪吹に高足駄。踏分尋ね来る人は。長尾三郎景勝。萬卒は求め安く。一將は得がたしと。此隱家の弓取を。慕て一人門の口。二重の腰の白妙に。枝も撓の雪折竹。杖と我子に助けられ。庭に千む老女の風情。「申し」此大雪に。去とては冷まする。蒲團の上にござつてさへ。御老體の身の上。平にあれへと取る手を拂ひ。「七十に餘つて愚鈍には成つたれど。子供に物は教へられぬ。すべて親に仕へるに。起臥の介抱は誰もする。何事に寄らす。親の心に肯かぬ様に。するのが誠の孝行。寐て計り居るも

見るべし。
「何事に寄らず親の心に云々」
よく親に事ふる、
これを孝といふ

「谷川のますくお達者」
漁りしは鱒なるを知る

「裏にある竹藪の筍」 孝
子孟宗が、雪中に筒を掘りし故事より書く、總解を見よ。

氣詰りさに。雪の景色も見やうと思ふ。母が心を妨るは。何と
不孝で有るまいか。ア、一々誤り奉る。其段には心付す。お年
寄れて一日く。御氣力の落るが悲しく。今日も獵に出。元氣を
養ふ谷川の。ますくお達者成る様と志の捧物。賞翫なされ下さ
れかし。イヤく物の命を取。夫れが何の養ひ。眞實親の養ひな
ら。遠い山川の珍物より。つい裏に有る竹藪の。筍を掘て來い。
ハア夫れは御意ではござれ共。此寒の中に筍が。サア有る物を
取つて來るは。子供でもする事。ない物を取寄るが眞の孝行。斯
ういはゞ母が難題。吩咐ると思はふが。此位の難題に困る様な
器量では。智者と呼ばれて人に知らるゝ。弓取にはならぬぞよ。
わらはが夫は天が下に聞えし軍師。一生主人を取らず。過され
た忘筐。兄弟の子が器量を見定る迄は。女ながらも夫の名を付
け。山本勘助と名乗る此母。二人の内に勘助といふ名を譲り。

「苗跡」 はあと目の意

「苗氏」は 俗にいふ姓のこと、子孫を苗裔といふより、先祖の名乗り始めたる氏を、苗氏と稱するなりと、別記を見よ

「杖振上げて打んとす」孝子伯瑜が杖にてうたれし時、痛みを感じずとて、泣きし故事に、おもひつきて書けるなるべし、

父の軍法奥義の巻を傳へうとは思へ共。夫では中々勸助にはな
 られぬ。サア其苗跡を受たさに。心を盡す此慈悲藏。ソレく。
 其名がほしさに孝行を盡すは。眞實の孝ではない。上皮の偽り
 表裏。コレ夫れはお情ない。苗氏を望むも出世して。母人の悦
 び顔。拜みたいばかり。兄者人の心入れと。一つに思し下さる
 ゝは。餘り無情い御心と。雪に喰付き落涙に。老母は猶も腹立
 聲。「コリヤ何ば利口に云廻しても。此年月膝元を離れ。他國し
 て居て。今日此頃俄の親切。是が偽といふ證據。儕が心に引く
 らべ。兄を不孝と云なす悪心。思へば見るもいまはしと。杖振
 上て打んとす。老の力身に踏挫く。駒下駄飛でよろめく足。コ
 ハあぶなやと抱きとむれば。「イヤくく」。己が世話は受ぬわ
 い。そこ退おれと親と子の。心合ざる片端の下駄。景勝隙さず
 拾ひ取。御召物是に候ふと。老女が前に押直し。しきつて頭を下

「黄石公に沓をあたへし張良」張良は韓の人、邳下に在りて圯上に遊ぶ、一老翁履を圯下に墜し、良に命じて之を取らしむ、良其老たるを憐み、取りて之を與ふ、老翁大に悦び、後一卷の書を授く、披き見れば太公望の兵法なり、乃ち日夜習讀し、遂に漢の高祖を助けて、天下を一統す、所謂三傑の一にして、智謀及ぶものなし、下駄の事は、此おもひつきなるば、本文にいへるが如し、

「何か仔細ばありく海」とかけたなり、ありそ海は荒磯海の約

「惣領」は長子の稱、群子弟を惣領する意か、

げらるゝ。母つくゞと打守り。「人品骨柄只人共見えぬお侍。賤い婆々に履物を直されしは。黄石公に沓をあたへし。張良が佛。ハテ奥床しい御方じや。お近付にも成て。篤とお禮も申した。い「コリヤ慈悲藏。其方に用はない。立て行け。ハアはつと。何か仔細は有磯海。母の心を計り兼。是非なく奥に入にける。いざこなたへと請ずれば。辭する色なく座に直り。「御推量少しも違はず。黄石公にも劣らぬ軍者。山本氏の御子息を召抱へて。一方の大將と頼まん爲。身不肖なれ共越後の城主。長尾謙信が嫡子三郎景勝。是迄參上仕ると。禮義正して述らるれば。「扱こそ始より自然と備はる御眼相。シテ御望みなさるゝは。兄弟の中。兄か弟か。イヤ景勝が望む所は惣領の横藏。ハテナ最前より御覺の通。孝行な弟慈悲藏を指置。不孝な兄の横藏を。御家來になされふと。おつしやるお前のお心は。イヤそりや其

「誣訪明神の社内にて面體云々」我身ははりにたつる覺悟、

「主従となるからば云々」のつびきさせぬわな、

「威風尖き北國武士」凍乎たる風骨見るか如し、「越後縮の物馴れて」とうけ、名物にかけて和げながら「引かぬ其場の信濃路や」と張強くつゞけたる筆のさぬ味ふべし、

方に覺え有る事。誣訪明神の社内にて。面體恰好とつくりと。

見届け置た横藏。是非に身共が所望致す。ム、左様おつしやれば思ひ當る。よくくくに思召せばこそ。大名のお手づから。いやといはさぬ此婆々に。下駄を預け給ひしは。天晴敏き殿ぞかし。

「兄は只今他行なれど。此母が成かはつて。御家來に差上ふ過分く。其箱是へと取寄て。いかに老女。」主従と成るからは。

一命を捨てても忠義をはげむ。武士のならひ。いふに及ばず。此方

迎も一身を任すといふ。かための一品受取られよ。若違變あら

ば身の上たるべし。「御念に及ばず。其時は母が皺首差上るか。

家來にするか。二つの安否。後程く。老女さらばと詞詰。威

風尖き北國武士。越後縮の物馴て。引かぬ其場の信濃路や別れ

て「こそは歸らるる」

勘助住家の段

「木曾山木立あらくれて」
面白く書きたり、あらくれ
にくれを含めたり、くれは
伐りしまゝの材木、筏など
に組む、木曾山は信濃西筑
摩郡、木曾川に沿へる山谷
の惣稱、中世木曾殿の所領
なりしが、元和年中尾張侯
に屬し、方今帝室御料に編
入せられ、地域三十四萬餘
町歩あり、古來有名の山林
にして、檜、楠、杉、榎、松、柏、
を五木と稱し、就中檜の良
材を以て著る、
「無徹」は無轍とも書く
べきか、條理にはづるゝを
いふ、元來無手法の音便、
むてつげふの略なりといふ
「しにや」はしきたりの
癖といふ意、
「名も横藏の筋街道」と

勘助住家の段

木曾山木立あらくれて、無法無徹をしにせにて。名も横藏の筋
街道。草鞋の日もふり埋む。餌竿かたげて門口より。母者人今
戻りましたと。聲に老女がほやく、顔。「チ、兄待兼ました。此
間はマア何處へ行って居やつた。ハテこな和郎は。おれが足でお
れが歩くに。何處へなと飛次第。飛ついでに戻りがけ。小鳥十
羽程捕ふと思ふて。顔も足も切る様な。道理く。サ、ハ、ち
やつと上りやく。と草鞋の紐。手づから母の慈悲藏も。足の
湯を取り機嫌取る。「兄者人。お足洗ひましよ。イヤコリヤく。
孝行な兄が體に。不孝な弟が手をさへるは穢らはしい。母が洗
ふてやりましよと。一人に辛く一人には。甘い女子の鼻の先。
泥脚突付。「エ、若い女子の手のさはるは好い物ちやが。干物の

勘助住家の段

かけたり、

「日も一に紐をかけたなり
「おれが足でおれが歩くに」

勝手な足、

「手づから母の慈悲藏」と
かけたり、

「母が洗ふてやりましよ」

これ親の意に逆はぬが孝行
とて、孝子が母に足を洗は
せしといへるより、書ける
なるべし、

「甘い女子の鼻の先泥脚つ
きつけ」 無法の状よく寫
したり、

「情の罪科じや」 語頗る
味ひあり、

「何の恩にさせる事云々最
うこなたも追つけ火屋へ云
々」 不孝の骨頂の語、火

屋は火葬場、

「ほんそ息子」 はいたは
りかあいがる息子、父母の

奔走し世話するよりの稱

様な母者の手で。情の罪科ぢや。いか様おれは孝行者。此小鳥

も晩の夜食に。こな様に喰すのぢやない。焼て貰ふておれが喰

ふ氣。兎角おれが口さへ養へば。こな様の氣が休まる。のふ母

者人。さう共く。あのマア孝行な事わいの。サアく炬燵に

火もして置た。ム、こな様が今迄あたつてゐて。何の恩にさせ

る事。エ、こりやぬるい水炬燵ぢや。イヤく。あんまりきつ

い火は上つて悪い。夫れがたわけといふ物。最ふこなたも追付

火屋へ行く體。稽古の爲に嚴い火にも。當つて置しやれ。サア

足揉で下あれと。踏出す兩臍慈悲藏見兼。ドン私かと立寄れば。

又差出るか小癩者。兄や斯うかくと撫さする。ほんそ息子の

くはびら足。「ア、迎もなら美しい。お種がもんでくれりや好い

に。ハア貴様子守か。峰松はどうした。ハイお差圖の通り。思

ひ切て一昨日。主が何處へやら。ム、捨て仕廻ふたか。よい事

「くはびら足」 は鐵の平の如くだゞびるき足、ほつきまはるゆゑなるべし、
 「そげ」 は妻を罵る語、俚言集覽に「そげ者、奇僻の行ひあるものないふ、平常をさげはづすといふ意、即ちそむくなり」
 「てこれる」 は死をいふ續無名抄に、手杵寢の字を書きたれど、當字なるべし
 「子といふものは親よりちつと可愛い」とは、勿體なし、
 「此母にあたるぞ」とは何處までもすれもの、
 「大僧正」 はもと最上の僧官なるが、戦國の世法林にて軍に臨む者あり、信玄も其一人にて、諏訪明神の社頭僧となり居たれば、かく自ら稱せしなるべし、飛んだ大僧正があればあるも

く。一躰おりや貴様に惚てゐる。時に幸と。かゝのそげめはてこねて仕廻ふ。跡に残つた小悴の其次郎吉。邪魔な餓鬼奴。しめ殺さうかと思ふたれど。味な物で子といふ物は。親よりもつと可愛い物ぢや。又大きう成たら。おれに似て孝行にも仕おろかと思ふて。貴様に育さすからは。ノウ慈悲藏。畢竟わがみと相合の子。迎もの事に女房も相合にする合點。お種顔振らずと。ムンと言やいの。夫れを否やと言ふと。慈悲藏が大事がる。此母者に當るぞよ。コレしつかノと揉しやれ。エ、まだ火がぬるいと戀の意趣を。炬燵にあたる非道者。持餘してぞ見えにける。折ふし表に先走。「山本勘助殿に用事有て。大僧正武田信玄參上也と案内に。思ひがけなき夫婦が不審。仔細あらんと横藏が。起も直らず空寐入。「ハテ扱。思ひ寄らぬ大身のお入り。卒爾には母も逢れまい。慈悲藏饗せ。横藏是はしたり。何やらい

の、
 「匂ふ留木の高坂」とか
 けたり、留木は衣のほひ
 をいふ、昔は衣に香を焼し
 めて、ほひをつけたり、
 委しくは菅原傳授にいへり

〔師範〕は師匠のこと、
 師となり範となる意、

ひく寝人たさうな。風ひきやんなど一間の障子。引立窺ふ表
 より。匂ふ留木の高坂が。妻と知せて堆高き。雪の懷稚子を。
 抱て幾重の柴の庵。家來は先へと追かへし。行義正しく打通る。
 訝しながら手を付て、「信玄公の御入と。思ひの外なる女中のお
 名は。ヲ、成程御不審尤。偽りならぬ信玄公の。コレ此寐顔に
 對面なされと。いふに女房立寄て。ヤア峰松か。戻つたかと。
 飛立許の胸押しづめ。「是はく御苦勞様や。そんなら峯を貰ふ
 て下さりましたは。お前様か。いかいお世話様に。コレく麤
 相いふまい。甲斐國へ養ふからは。最早一國の世繼。則ち今日
 の信玄公。孝心深き慈悲藏殿。殊に軍術の達人と聞及び。師範
 共お頼みなされん爲。わざく見やしやんせ。コレ愛らしい此
 信玄が抱へに來た。お受申されてよからうと。恩をかけたる名
 將の。情は肝にこたゆれど。啞けた顔で、「是はしたり。私は此

「やまがつ」は山里に住む、樵夫(しやうま)人(ひと)など、賤(せん)しきもの、稱(なづ)。

「未(ま)だ生(な)もかへぬ中(なか)」此(こ)句(く)前後(ぜんご)に應(お)じて味(あじ)ひあり、「山(やま)の芋(いも)を蒲(か)焼(や)にする」塵(ちり)添(そ)搗(た)糞(ふ)抄(しやう)に「山(やま)の芋(いも)の饅(まん)になる」といふ事(こと)もあり」と見(み)ゆ、古(ふる)くよりの諺(ことわざ)にて出世(しゅっせ)するをいふ、饅(まん)になりて蒲(か)焼(や)にすれば、味(あじ)あるべけど山(やま)の芋(いも)の中(なか)にては、とりはなかるべし、至(いた)極(ごく)面白(おもしろ)し「慈悲(じい)藏(ざう)とて虫(むし)さへ云(い)々(々)」これ名(な)詮(せん)自(じ)稱(じやう)の言(ごん)譯(やく)。

在所(ざいしょ)の山樵(やまがつ)。鋤(すき)鉞(くは)の外(ほか)何(なん)にも存(ぞん)ぜぬ者(もの)を軍術(ぐんじゆつ)の師範(しはん)なぞとは。勿(も)躰(たい)ない事(こと)おつしやります。コレく此方(こち)の人(ひと)。お前(まへ)の器量(きりやう)を聞(き)及(およ)んでと有(あ)からは。きつい譽(ほ)な事(こと)ちやぞへ。卑下(ひげ)するも事(こと)に寄(よ)る。ハテ軍法(ぐんぽう)奥義(おくぎ)は母(は)様の(さま)の。傳授(でんじゆ)の卷(まき)を讓(や)請(じゆ)て。さればいやい。夫(そ)れを貰(もら)ふて。山本(やまもと)勘助(かんすけ)に成(な)つたれば。抱(か)えられまい物(もの)でもなけれど。未(ま)だ生(な)もかえぬ中(なか)に。軍術(ぐんじゆつ)の大將(たいしやう)のと。そりや山(やま)の芋(いも)を蒲(か)焼(や)にする様(やう)な物(もの)。名(な)さへ慈悲(じい)藏(ざう)虫(むし)さへ得踏(えふみ)殺(ころ)さぬ者(もの)が。軍(いくさ)に出(で)て人(ひと)の首(くび)が。何(なに)としてくと、取(と)つても付(つか)ぬ顔(かほ)付(つき)に、唐織(からおり)はつと胸(むね)せまり。不調法(ふてうはふ)な女(め)の使(つかひ)。お氣(き)に入(い)りておつしやるのか。「どう有(あ)つても。味(あじ)方(かた)に付(つ)いて貰(もら)はねばならぬ。といふ其(その)譯(わけ)は。桔梗(ききやう)が原(はら)に此(この)捨子(すてこ)。山本(やまもと)氏(うぢ)と有(あ)る書付(かきつけ)を。印(しるし)に拾(ひろ)ひ取(と)り取(と)つたれど、サアどうも力(ちから)に及(およ)ばぬは。肝心(かんじん)の乳(ち)に吞(の)み付(つか)ず。なんぼ抱(だ)いて突(つき)付けても。あつちくと指(ゆび)さして。泣(な)いてはつかり。此(この)大將(たいしやう)に

「其兵糧をつどける謀」もとより心一つにあり、これ血を呑む處、

「縋る乳房は一人にて、子の手柏の二面」頗るの名句味ふべし、一人の乳房に、義理と情の二人の子、何れをそれとわけかれし、胸中の苦悶思ひやらる、子の手拍に其葉ひげに似て、兒の手をひろげたる如きゆゑ稱す、色兩面とも縁にて、裏表分ちがたきより、兩面ともいふ、萬葉に「奈良山の

兵糧がなければ。命も危し。其兵糧を續ける謀は慈悲藏殿。お前の心に有さうな事。甲斐の國へ味方に附て。夫婦して守育てふと。思ふ心はござんせぬか。此マアちつとの間に。コレ何處もかも。細つた事を見やしやんせ。道理でも有る。眞實の母御の懷を離れて。他人の手に何の育たう。夜は得寐ず。晝はうつ／＼泣寐入に。寢た顔のいぢらしさ。ほんに見る目が悲しいと語る中より女房が。ナ、可愛や。左様でござんせうと。わつと泣出す母親の。聲に目覺しゝがみ付。縋る乳房は一人にて。子の手柏の二面。儘ならぬこそ恨なれ。一間に母の聲高く。「コリヤ／＼慈悲藏。子供を餌に。恩にかけて味方にせんと。後穢い信玄に奉公しては。武士が立つまい。去ながら。軍法與義も傳はらず。實の苗跡を繼ぐ氣がなくなれば。勝手次第ともぎどうに。云捨障子はたとさす。ハアはつと立上り。我子を取て引はなし。

「兒手拍のふたおもに云々」
 「もぎどう」 は邪見などの意、無義道又漫義道など書けり、當字なるべし、
 「知行」 はおふち、もと領地の意より轉ず、
 「竹に雀と離れぬ中云々」の比喩頗るよく出来たり、
 曹子建が七歩の詩「煮豆燃豆箕、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急」これと同意なり、竹に雀はもと繪の取合せに起ると、

「表にも心に残る雪中へ頑是涙の子」とかいたり
 「後紐垣に結ぶは義理の綱云々」よく書きたり、「神や捨て置く竹の子笠」何たる妙句ぞ

勘助住家の段

「須彌山滄海の大恩を受けば迎。母の恩にはいつかなく。信玄に仕ふる事存じも寄らず。變改申す。ユリヤ女房。一旦捨た此悴に。見苦しい何吠える。縁に引れて知行取ては。末代迄の名折。親子の縁をさつばりと。切てしまへば信玄に。恩もなく義理もなし。是此竹も其本は。竹に雀と離れぬ中。今餌さし竿と成る時は。鳥の爲には怨敵。事によつたら親子兄弟。敵味方と成も武士道。お返事は此通。稚子連て早歸られよと。詞尖に言放す。「ハア此上は力なし。とはいへ歸つて御主人や。夫に何と詞さへ。なくく抱き立出る。コレのふ峯松。一世の別れせめてマア。此乳が一口呑したいと。慕ふ女房を引退て。枝折戸ぴつしやり表にも。心は残る雪中へ。頑是涙の子を抱おろし。襠の下ぐより。くより添たる後紐。垣に結ぶは義理の綱。神や捨置竹の子笠。いたいけ頭に打着せて。「日本の氏を繼ぐ慈悲藏

「しづ」は垂絹たれぎぬの事をいふか、多く旅の具に用ふ、風塵を避け寒氣をふせぐめ、笠のふちに縫つけて垂れたる絹なり、又おもりの事をしづといへば、詞のおもりをかけたる意ならん、

「六韜三略」は周の太公望の兵書、六韜は文韜、武韜、龍韜、虎韜、豹韜、犬韜、三略は上略、中略、下略、「袖にする」はふりつけ邪魔にする事、衣の身と袖とな

殿を。軍術ぐんじゆつの師しと頼たのまんと。是迄こゝまで來給きたたまふ信玄しんげん公。どうも此儘までは歸かへられず。是非ぜひ共味方ともかたに付つくといふ。一言いちごんを聞きく迄までは。此信玄このしんげんは其元そのもとの門口かどぐちを立ちさらず。雪ゆきに凍こゝへて死しす迄までも。爰こゝに座ざをしめ返事へんじを待まつ。大將たいしやうの命助いのちすけふと殺ころさうと。御思案ごしあん次第だい。よい返答へんとうを頼入たのめいると。しづをかけたる雪ゆきの笠かさ。思おもひを殘のこし捨すてて行く。「ヤアそんなら坊ぼんは未だ往いなぬか、コリヤく門かどには誰たれもない。假かし居かてからがあかの他人たにん。今傍いまそばへ寄よとナ。信玄しんげんの恩おんを受うけたになつて。母の一言反古いちごんぼごに成なる。此簀戸このさしどの外そとへ。一寸いっすんでも出でるがいなや。夫婦ふうふの縁えんも是限こゝれかぎりと。腰こしさげの紐ひも鑢かぎを。括くる慘せつさは我われながら。いかなる惡魔あくま鬼おにか蛇じやか。六韜三略りくとうさんりやくの望のぞみ有ある慈悲じ藏ざう。慈悲じも情なさけも知しては居かれど。母の詞ことばは背そむかれぬ。「どうで乳房ちちぶに離はなれた物もの迎むかへない命いのち。凍こゝへて死しなは死しに次第だい。そちもソレ。其子そのこを袖そでにしては。兄貴あにきへの義ぎが立たぬぞ。ハア何なにかに紛まれて。大事だいじの孝行かうかう

分つより、身にするといふ
うらなるべしと、いかゞ、
「あつき親子の縁を断つ鉄
ふりかたげ」 句よし。
「またけもない」 は幼く
小きからだをいふ。
「子を捨る藪はあれど」 子
を棄つる藪はあれども、身
を捨つる藪はない、といへ
る諺よりかけり、犬子集に
「垣の外に立てるは竹の捨
子かな」

「ちゝたいくも絶えぐの」
「またなくあはれなり、」

怠つたり。 ドン裏へ行て雪の中の。 笥掘て進ぜうと。 蓑笠取て

打かづき。 あつき親子の縁をたつ。 鉄ふりかたげ。「此寒氣に。

荒男でさへたまらぬ物。 よたけもない體に。 ア、子を捨る藪は

有れど。 親の詞は捨がたき。 裏の藪へと踏わける。 雪より先に

最愛子の。 埋れ死ん不便やと。 見合す顔に降る涙。 鬩争ふ濡翹

しほるゝ夫の後かけ。 いかに望が有れば迎。 天にも地にも一人

子を。 能ふ慘たらしう捨られた。 今の女中も氣の強い。 置いて往

ぬ程なら。 お家に寝さしていんだがよい。 可愛やくゝひもじか

らふのに。 ちつとの間なと抱たいと。 任せぬつらさ次郎吉を。

漸そつと下に置。 さし足ながら庭に下り。 覗けば門にしよんぼ

りと。「ヤンぼんよ。 夫がマア。 何と命が有る物と。 明んとすれ

ど鑿に。 錠の代りの眞結びは。 慘やつれなとあせる程。 雪にし

めつて明かぬ戸に。 ちゝたいくも絶えぐの。 風にうたてや

ち○○○○は乳を頂戴と

いふ幼児のかた言、

「雪やころん云々」

守り唄なるべし、

「此子憎いにやなけれ共我

子に乳が呑したい」義理

恩愛の二道に、苦悶せる胸

中を披瀝し、讀者をして血

を吐かしむ、千金の名句、

「心も空にかきくらし云々」

かけてよく書きたり、さも

あるべし、

「外に泣く聲八寒地獄云々」

身にしみて覺ゆ、

「八寒地獄」は咆、無乳、

寒砒聲、患寒聲、虎々婆、

青蓮華、紅蓮華、大紅蓮華、

「義理も情も最ふこれまで」
かくては取亂さざるを得ず

次郎吉が、わつと泣聲ハア悲しやと。又かけ戻り抱上て。雪や

ころゝん霰やころゝん。こはそも何たる因果ぞや。此子憎いぢ

やなけれ共。我子に乳が呑したい。コレ些との間ノ。寐入て

たもいのと。心も空にかきくらし。又降しきる白雪に。外に泣く

聲八寒地獄。劍を呑より身にこたへ。思はず知らず轉びおり。

砕けよ破れよの念力に。はづるゝ戸より身は先へ。コリヤばん

よくくと。我子を肌を抱きしめ。流涕こかれ泣聲に。唐織木蔭

をつとと出。信玄公を抱上。乳房をふくめ參らすからは。慈悲

藏は最早此方の味方。夫にしらせて悦ばせんと。勇んで館へ立

歸る。はつとお種も心付き。うろつく隙に何國より。懐劍てう

と峯松が。肝先貫き息絶たり。コハ何事と驚く中。次郎吉引立

横藏が。一間をさしてかけ入れば。ム、扱は我子の害に成ると。

横藏の所爲ぢやの。義理も情も最ふ是迄。敵を取いで置ふかと。

「弱き女氣」強き力帶」

相應す。

「鐘孝行の道」 とかけた

り、「古き例の跡を追ふ」は孟宗が親の爲め雪中に笱を掘りしといふ故事、總解を見よ、「子故の闇に白妙の」句よし。

「底は白羽の鳩」 とかけ

たり、軍事によく鳩の出づるは、弓矢の神八幡大神のつかはしめといへるよりか

「兵器ある地には鳥群をなす」 耳にする語なれど、

其出典を知らず、心得の方は御教示ありたし、いづれ支那の小説の如きものより出でしなるべし。

「野に伏勢ある時は歸雁行

死骸を小脇にかい込て。常には弱き女氣も。恨につよき力帶。

奥へ窺ふ忍び足。早日も暮に近付いて。鐘孝行の道ぞ迎。古き

例の跡を追ふ。子故の闇に白妙の。道も涙に見えわかず。「なん

ば掘ても笱が。有ふ様はなけれども。親を思ふ一心を憐み。天よ

り授る事もやと。心に込て一尺二尺。底は白羽の鳩一羽。飛で

おりしも飼なれし。鳥も心の有るやらんと。又掘かへせば又一羽

友呼誘ふ生類の。有様つくく打守り。最早入相。諸鳥罫に歸

る頃。一羽ならず二羽三羽。集り來るは。ハテ心得ず。誠や兵

器有る地には。鳥群をなすといへり。我父は日本の軍師。此所

にて世を去り給ふ。一生暗じ置れたる。六韜三略の秘密の卷。

此下に埋み置れしやらん。扱は我孝心天に通じ。鳥類是を知ら

せしか。ハア有がたし忝しと。心勇んで掘穿つ。雪も散亂群雀。

ばつと立たる藪の中。窺ふ兄が頼魂。ム、「野に伏勢有る時は。

「を亂る」孫子に「鳥起てば伏なり、獸駭げば覆なり」と見わたるがもとなるべし大江匡房が八幡太郎義家に飛雁列を亂るれば、野に伏兵あるを知れと訓へたるは、これを敷衍したるものなるべし、なほ別記を見よ、「窺ふ悪鳥」は兄横滅前をうけて書けり、

「無理いふが兄の威光」これ承知の無理、

「阿呆鳥の孝行ごかし」極めて面白し、おぼう鳥とは鳥の啼聲よりの名なるべし、反哺の孝の事は前段に解す、

「道と非道の二筋を」よ

歸鷹行を亂る。油斷の罫を窺ふ悪鳥。殺さうと生さうと。手の内の雀。慥に手ごたへ此下を。コリヤ待て慈悲藏。埋て有る傳授の一卷。われにはやらぬ。兄が出世の種にするわい。兄者人そりやお前。無理でござりましよ。サイヤイ無理いふが兄の威光。阿呆鳥の孝行ごかし。邪魔なうぬから仕廻ふて取る。どつこいさうは成ますまい。苗次を次ぐは此慈悲藏。見事われが。繼いで見せう。小癩な退けと鋤と鍬。落花みぢんの雪とんで。掘出す箱の二人の争ひ。道と非道の二筋を。滑りつ轉つ擱あふ。はづみにがはと取落し。池にさんぶと水煙。さはぐ群鳥兄弟も。不思議と見とる、後より。障子ぐはらりと母の老女。兩人待て兄弟共に武士と成る。主人を取べき時節到來。雪の中の筈を。掘出したる慈悲藏。今こそ母が心に叶ふた。天晴孝行。出かしたく。其方は最前言付た通り。裏口四方に氣を付よ。ナ合點

「白臺に無紋の社袴云々」
これ切腹の時の装束なり、
なほ別記を見よ、

「景勝公の御身がはり」百
度参りの段にて、横藏の面
体をよく見て助けしは、此
身がはりにせんと爲なり
「室町の御所に於て云々」
百度参りの段の總解を見れ
ば明なり、

か。ハア委細承知仕ると。驅入る弟横藏は。池中の箱を引上げて
母の御前に差出せば。「サア〜兄。そなたには別てよい主を取
らす。則主人より下されし。装束も更めさせんと。しづく
奥の白臺に。無紋の社袴白小袖。傍に三方九寸五分。我子の前
に直し置く。母者人こりや何ぢや。いやさコレ此白装束は何の爲
ナ、夫れこそは冥途の公服。只今其方が首打て。身がはりに立
てるのぢやはやい。エ、イ滅相な事計り。此首を身がはりとは。
そりやマア誰が。今日其方が主人と頼みし。長尾三郎景勝公の
御身がはり。聞及ぶ武田信玄。越後謙信。室町の御所において。
互に我子の首討つて。心底を顯はさんと契約有る由。最前そちを
召抱んとて。來られし景勝の面體。そちが顔にさも似たり。扱
はと母が推量違はず。箱の中に残されし此一通に。委細の様子
詳に記されたり。主従と成るからは。命は君に捧し物。武士の

「日外諏訪の森に於て云々」
百度参りの段を見よ、

「籠中の鳥の云々」 隙を
見て逃げ出さんとする状見
るが如し、句調の爲め籠を
こと讀せたり、

因果と諦めて。潔ふ死んでくれ。コレ〜。能ふ思ふても見
やしやれ。いかに主ちや迎。まだ知行もくれぬ中に。殺さうと
いふ様な。胴欲な主が有る物か。イヤ〜。最ふ此主従とんと
變改。イ、ヤそうは成るまい。日外諏訪の森において。殺さる
〜そちが命。助置れし景勝の恩忘れはすまい。其時の情は今身
がはりに立ん爲。智謀の毘にかゝりしとは知らざるか。恩を知
らねば人ではないぞよ。譬逆ても此家のぐるりは。景勝の家來
取巻で。一寸も遁れはない。切腹するか。但母が手にかけうか。
サア〜。なんと〜と詰かけられ。籠中の鳥の目はうる〜。
隙を見て迷出す。膝口はつしと手裏劍に。尻居にとつさり詮方
なく。「是非に及ばぬ最ふ是迄と。腹切刀取るより早く。右の眼
に突込だり。道の老母も不審顔。流るゝ血を押し拭ひ〜。母者
人景勝に似たによつて。身がはりに立たがる。小面倒な此頼に

「相好」は顔かたちも
と佛經の語なる事前に解せ
り、

「長社祢」は秋草に「今
世肩衣長袴の事を、長上下
といふ人あり、長き下はあ
れども、長き上はなし、お
かしき詞なり」

「公達」
は貴族の子息の
稱、

かう疵付て相好變へれば。もう身がはりの役には立つまい。今
日只今。父が苗氏を受繼ぐ。山本勘助晴義。軍法奥義を胸に貯へ。
三略の巻より大切な此命。ヤア、謙信の家來。直江山城介種
綱。夫れへ出よ。言聞す仔細有りと呼はる聲に一間の内。見參
さうと慈悲藏が。優美の骨柄。長社祢さはやかに。「某長尾の家
臣たる事。深く包みて古郷へ歸りし其仔細。母人には密に語り
兼て申し受たる兄者人の命。現在の子を捨て。否應いはさぬ
命の無心。去ながら眼を括つて。身を全ふする大丈夫の魂。あ
つたら勇士を殺すは殘念。長く謙信に仕へ。忠勤を盡さるべし
と。言はせもあへず冷笑ひ。「おろかく。謙信づれが家來には。
汝等が分相應。身が主には釣合ぬ。誠山本勘助が崇むる主人は。
忝くも足利十三代の公達松壽君。是へ誘ひ申されよと。詞の下
に高坂が。妻の唐織次郎吉を。傳き申せば山城親子。ハアはつ

「武田信玄大僧正姿をやつし云々」蜀の玄徳が、孔明の草廬を訪し事などに、思ひつきて書けるなるべし、總解を見よ、

「領掌」はおうげの意

「大魚は小池に住まず 鶴は枯木に巢なくばよ」此語もと、吞舟の魚は汚池に住まず、鴻鵠は高く飛んで網に入らず、などいへる句より、出でたるならべし、なほ尋ねべし、
「懷胎の賤の方人手に云々」

と計飛しさり。恐れ入たる計なり。眞中にとつかと直り。「ヤア山城。只今打たる此手裏劔は。先年室町の館にて。此公達の御母。賤の方を奪ひ取り。立退く折から。景勝目當に打かけたる我小柄。只今我手へ慥に落手。山本の苗氏を引興さんと。軍學に心をこらす所に。武田信玄大僧正。姿をやつし只一人。密に庵へ來らせ給ひ。足利の行末覺束なし。汝我力と成つて事を謀れと。名將の一言心魂に徹し。ハ、ア畏奉ると。即坐の領掌弓矢の誓。「ナ、其時に此母も。只人ならずと思ふたが。扱は武田信玄公と。主従の契約仕やつたの。ナ、サ大魚は小池に住まず。鶴は枯木に巢をくはず。智勇兼備の大將に。頼まれ申せし身の面目。直様都に馳上り。窺ふ時しも館の騒動。義晴公はあへなき御最期。ハツア詮方なし。懷胎の賤の方。人手には渡さじと。忍び入つて御家の。白旗諸共守り奉り。立退く館は八方に挑

義晴統殺せられし時、何者とも知らず賤の方を奪ひ去れり、總解を見れば明かなり、

「御家の白旗」 足利は源氏にて白旗にの紋、

「遠近の雪の信濃路」 と

かけたり、

「月の更科」 更科は月の名所、信州更級郡にあり、

「我が心慰めかれつ更科や 姥捨山にてる月を見て」

「空恐ろしさ」 勿体なさの意、(神明の罰にてもうけんかと思ふ程の意)

「神明を頭に戴く義兵の旗上げ」 語頗る厳正、

「一つの眼に天が下云々」

語頗る壮大、威富士を壓す、彦鷹が片廂に「晴行は(勤

燈松明ちる花の。都を跡に遠近の。雪の信濃路爰かしこ。月の

更科の片山里に。人しらず構ふとは。さしもの母も御存知有る

まい。「しらなんだく。コレくさうして。御母賤の方の在所

は何國。サ、サ、どうぢやく。ハア申すも便なき事ながら。

憂き事つもる産後の腦み。はかなく此世を去給ふ。「跡に残りし

あの公達。勿體なくも我子と偽り。次郎吉よくと。呼ぶ度々

の空恐ろしさ。口惜さ。弟嫁が乳を幸ひ。我子を捨させ。他家

のあの子を養育さする我心底。我儘無法は一物有りと悟りし老

母。雪の中の筍を。掘て見よとは天晴明察。實に勤助が母人ぞ

や。穢れを厭ひ今日迄。埋置たる雪中の筍。是に有りと。箱押取

て差上る。源家正統武將の白旗。神明を頭に戴く義兵の旗上げ。

謙信親子只今より。此勤助が幕下に付けと。立歸つていひ聞せ

よと。一つの眼に天が下。見下す富士の山本勤助。三國無双の

助)一眼ながらよく見ゆき
たり」と、いへるに思ひ合
されて、面白く感ぜし、

「三國」は日本、唐土、天
竺、

「廿四孝」は帝舜、漢文、
曾參、閔損、仲由、董永、剡子
江革、陸績、唐夫人、吳猛、王
祥、郭巨、楊香、朱壽昌、庾黔
婁、老萊子、樊順、黃香、姜詩
王褒、丁蘭、孟宗、山谷の二
十四人、

弓取也。山城大きに感じ入り。「信玄景勝不和成るも。互に心を疑
ひあふ。忠臣割符を合すがごとし。君御在家知るゝ上は。景勝
公の言譯立て。身がはりにも最ふ及ばぬ。追付兩家和睦の基。
成程く。最前裏で直々に様子を聞た。信玄公と勘助様。言合
せの有る事は。一家中へもお隠し有れば。夫高坂も露しらす。
抱に來た慈悲藏殿は。思ひも寄らぬ長尾の御家來。君の御事。
初めて聞た使の面目。此上なしと悦びの。中に歎きは一人の孫。
斯う心がとけるなら。仕様模様も有ふ物。「此婆々が偏屈から。
信玄方の恩受ては。立ぬといふた一言で。直江が手にかけ殺し
やつたは。則ち母が殺した同然。コレくく。嫁女赦して。ア
勿體ない。乳房に離れて死ぬ命。思はず知らずお主様の。お
役に立たも因縁と。泣ぬ顔するいちらしさ。母は一問の一卷携
へ。「不幸と見えし勘助は。却つて父の名を上る。廿四孝に優り

「規模」は面目といふ程の意、

「二君に仕へぬ」 説苑に
「王蠋曰、忠臣不事二君」
「天目山に楯籠り出合ふ所
は川中嶋」 ねらい所へ取
合せたもの、天目山は東山
梨郡にあり、勝頼切腹して
武田家の亡びし處、川中嶋
は信濃國更級郡にあり、信
玄謙信の自ら奮闘せる古戦
場にして、勤助も此時討死
せり、

し孝。器量も揃ふ二人の子供。軍法傳授の此一巻。頂戴しやと
差置けば。勤助取て押戴き。「父の苗氏を給はれば。勤助が身の
規模は立。母方の氏をつぐ。弟直江が母への孝。其徳によつて
此一巻は。其方に下さるゝ。御恩を忘れず猶此上。孝行怠る事な
かれ。景勝の忠心は。我胸中に徹したれ共。「心得がたきは親謙
信。君に弓彎く逆心ならば。汝も従ふ心や如何に。言ふにや及
ぶ。我子を切つて。二君に仕へぬ此山城。兄とはいはさぬ敵味
方。此三略の恩を仇。一合戦仕らん。ヲ、さもあらん出かす
く。我又主君に仕ふる甲斐の。天目山に楯籠。出合ふ所は川中
島。運に乗じて越後の出城。諏訪の城迄押寄せく。さも目ざ
ましき勝負をせんず。「ホ、潔し。去ながら。假にも一旦景勝に。
請たる恩は何とく。ヲ、日月にたとへたる。右の眼は越後へ
進上。二心なき勇士のかため。母にあたへし片端の下駄。景勝

「おり立つ庭の高低も」其
ちんばなるを見る、

「道は歪まぬ弓取の云々」

其正しきないへるかきぶ
り、頗る味たあり、

「ゆぶつて」 はゆすぶつ
て、

「かへらぬ昔もろ、この」
とつとけたり、

「孟宗の筍、王祥の魚、郭巨
が釜」の事は、總解を見よ

此等の事を取りて作れるよ
り廿四孝と題せしなり、

「黄金の釜より逢がたき其
子寶を切はなす」名旬、白銀

も黄金も玉もなにせんに子
にます寶世にあらめやも」

「弟が慈悲の胸慾と 兄が不
幸の孝行は」これ一篇趣向

の根元、匾號の來る所、

の志。捨るは武士の道ならずと。左の足にしつかと履き。おり

立つ庭の高低も。道は歪まぬ弓取の。直なる竹の根もとより。

はつしと切たる旗竿は。青雲目出たき大將の。さそふは賢き御

笑顔。眠れる花の死顔に。抱てゆぶつてすかしても。返らぬ昔

唐土の。廿四孝を目のあたり。孟宗竹の筍は。雪ときえ行く胸

の中。氷の上の魚を取る。それは王祥。是は他生の縁と縁。黄

金の釜より逢がたき。其子寶を切離す。弟が慈悲の胸慾と。兄

が不孝の孝行は。我日の本に一人の勇士。今に名高き山本氏。

武田の家の礎と。事跡を世々に殘しける。

本朝二十四孝 十種香の段

總 解

此段は廿四孝中最も有名の段なれど。由來を知らざれば。解し難き處あるゆゑ一言せんに。百度參りの段の總解にいへる如く。板倉兵部身代りを求めて。勝頼の蓑作に。諏訪明神の社前に遇ひ。件ひて急ぎ歸りしも。手後れて我子の勝頼は切腹し。其首は使者に渡されたり。こゝに信立突如として顯はれ。兵部を刺して其罪狀を數ふ。兵部も亦身の罪惡を懺悔するに至る。此時濡衣自害せんとせしが。兵部の遺言により。法性の兜を取かへさん爲め。遂に謙信の家に住ふるに至れり。又勝頼は民間に育ちて。人に面影を知られぬを幸ひ。將軍義晴の敵搜索と。謙信が迎ふる松壽君(義晴の忘れがたみにして幼君といへるこれなり)を。陰ながら守護する爲

め。花作りとなつて入込みしなり。

勝頼八重垣姫の許嫁は。篇首に義晴の後室手弱女御前が。武田上杉兩家の不和を直さん爲めに。取はからへるなり。されば姫が廻向の畫像は。無論兵部の勝頼なれど。實際通ぜし濡衣さへ。見紛ふはかりなれば。よく似たりしものとおもふべし。

蓑作の名は。民間に育ち蓑笠に身を隠くす。といふ意にてつけたる事しるし。濡衣はあまり濡衣にてもなし。八重垣姫は。八雲立つ出雲八重垣の御歌より。取れるか。

武田上杉兩家の不和は。諏訪明神より武田家に賜はれる。法性の兜を。謙信借りて返さざるによる。

花守りの關兵衛は。濡衣の父なり。放ちし鐵炮は。手弱女御前を打ちしなるが。濡衣身代りとなりて死し。遂に勘助に。美濃の齋藤道三にして。義晴を仆せし曲者なる事を見破らるなり。百度參りの

段の總解參照。

もとより作りものなればいふに足らねど。謙信が松壽君を迎へしなどは。彼れが將軍義輝の公達を戴きて。關東を鎮めんと請ひしも。義輝聽かさりしゆる。關白藤原前久父子を迎へて。關東の管領となりし事などより。思ひつきて書けるにはあらざるか。そは兎も角。勝頼の如き愚暗の暴將が。日本一の色男に仕立られたるは。此上なき仕合者といふべし。

諏訪の湖の事。法性の兜の事等にて。本社に間合せたれば。左の回答ありたり。

諏訪の湖に氷張詰めたる時。一條の潰裂を生じ。これを神の御渡りと申し候。其筋によりて。來年の治亂豊凶を占ひ。上代は朝廷へ奏問し。鎌倉以後は幕府へ注進狀差出し候。維新以後は何れへも届出づる事無之候も。古來の傳説によりて。占をなし居り候が。豊

凶の兆相見え候は。奇中の奇と申すべく。當國の人々。今なほこれを敬信いたし候。狐の渡初めなど申すは。俗書にも見ゆるにや。本社には只神のつかはしめの獸と申し傳ふるのみに御坐候。法性の兜は天文中に武田信玄當社の社頭僧となり。兜の前立に。諏訪正一位南宮大明神と記せしより。其名を得たりと申し傳へ候。其白毛も何の毛なりや。一向分り申さず。兜も當社には所藏せず。所々に傳はれる由いへど。信偽判明致さず候。

諏訪縁起繪詞に「上下兩社の間に。五十町の湖水あり。氷閉かさなりて。厚き事或は四五尺。或は三四尺餘あり。氷の上に雪降り積みて。凍ること彌厚し。行人征馬の通路とし。大笠懸の馬場となす。漁人網を下すとて。假令五六尺切ひらくとき。十人許り斧鉞を以て。切つて魚を取る。然るに神幸の跡は。廣さ四五尺。南北は五十丁あきて通れり。其氷水底にいらす。兩方にあがりて山の如し。又佐久の

新開社は行程二日ばかりなり。彼の明神と郡内小坂の鎮守の明神と。二神湖中に御參會あり。然らば大小通路。三の跡辻の如くにして歴然たり。誠に人力の及ぶ所にあらず。

これによれば、法性の兜は、諏訪明神より武田家へ賜はるものにして。八百八狐これを守護すといへるも、湖水の氷上を狐渡初めをなすといへるも、皆狐がつかはしめの獸といへるより、孕み出せる説なるべし。されど作者が作り出せるにはあらで、俗説より取りて書けるやう思はる。唐土の説話にも、狐は猜疑深き獸にて、氷の下の水音にて、其厚薄を聞分けて渡るゆる。彼れが渡りし跡をゆけば、溺るゝうれひなしといへり。これ等の事のもとゝなれるにてもあるべし。

本朝廿四孝

十種香の段

十種香の段

「行く水の流れと云々」水の流れと人の身の未知るべからず、車づかひの製作、變じて長上下となれり、妙味水の如く渾々として盡きず、長上下の事は前にいへり、見かはすば見ちかへる、大阪地方の俗語、
 「我れ民間に育ち云々」養作は諏訪の民家に育ちしなり、百度参り及本段の總解を見よ、
 「幼君」は足利義晴の公達松壽君、勤助住家の段の本文及本段の解總を見よ、
 「いひなづけある勝頼」勝頼八重垣姫の許嫁の事は總解を見よ、
 「床に繪姿かけまくも云々」よくかけたなり、よくつづけ

行水の。流れと人の製作が。姿見かはす長上下。悠々として一間を立出。我民間に育ち。人に面を見しられぬを幸ひに。花作と成つて入込しは。幼君の御身の上に。若過ちやあらんかど。餘所ながら守護する某。夫れと悟つて抱えしや。ハテ合點の行かぬと差俯伏。思案に塞がる一間には。館の娘八重垣姫。許嫁有る勝頼の。切腹有りし其日より。一間所に引籠。床に繪姿かけまくも。御經讀誦の鈴の音。此方も同じ松虫の。鳴音に袖も濡衣が。今日命日を吊ひの。位牌に向ひ手を合せ。廣い世界に誰れ有つて。お前の忌日命日を。吊ふ人も情なや。父御の悪事も露しらず。お果なされたお心を。思ひ出す程おいとしや。嗚や未來は迷ふてござらう。女房の濡衣が。心計りの此手向。

たり、りんはこれ鈴の唐音、
以て鈴虫にあて、「こなたも
同じ松虫」とうけ來りて、「鳴
く音に袖も濡衣」といへり、
何たる妙句ぞ、

「廣い世界に誰あつて云々」
濡衣が契りし勝頼は、板垣
兵部の子なり、百度参りの
總解を見よ、

「千部萬部」 は前に解せ

「南無幽靈出離生死頓生菩
提」 廻向の語なり、死者
の靈魂生死を解脱して、頓
に菩提を證得せん事を、念

じ頼むと、ふ意、

「こんな殿御と添臥の云々」
人口膾炙の句、誰か知らざ
る者あらんや「月にも花に
も樂みは」の句如何様にも
意得べけれど月にも花にも
まして樂みはと解したる方
味深かるべし、蝶花形に「月

千部萬部のお経ぞと。思ふて成佛して下さんせ。南無阿彌陀佛

誠まことに今日けふは霜月廿日。我身わがみがはりに相果あひけてし勝頼かつよりが命

日にち。暮くれ行く月日つきひも一年餘り。南無幽靈なむゆうらい。出離しゆり生死しやうじ。頓生とんしやう菩提ぼだい

申まをし勝頼かつより様。親おやと親おやとの許嫁いひなづけ。有ありし様子やうすを聞きくよりも。嫁入よめいり

する日ひを待兼まちかねて。お前の姿すがたを繪えに書かし。見みれば見る程ほど美しい。

こんな殿御とのごと添臥そひの。身みは姫御前ひめごぜの果報くわほうぞと。月つきにも花はなにも樂たのし

みは。繪像えぞうの傍そばで十種香じゆつかうの。煙けむりも香花かうけと成なつたるか。回向かいかうせふ迎むか

お姿すがたを。繪えには書かしはせぬ物ものを。魂返たまひかへす反魂香はんこんかう。名畫めいぐわの力ちからも有あ

るならば。可愛かあいとたつた一言ことの。お聲こゑが聞ききたいくと。繪像えぞう

の傍そばに身みを打うちふし。流涕りうてい焦こがれ見みえ給たまふ。彼あの泣聲なきこゑは。八重垣やへがき

姫ひめよな。我名わがなを呼よびし勝頼かつよりを。誠まことの夫つまと思おもひ込こみ。吊とむらふ姫ひめと。吊とむら

ふ濡衣ぬれぎぬ。不便ふびん共とも齋いらし共とも。言いはん方かたなき二人ふたりが心こゝろと。不覺そいろ涙なみだに

くれけるが。「ア、我われながら不覺ふかくの涙なみだと。矜えりかき合せ立たちあ上ある。後うしろ

にも花にもかへむたき[○]。華美しく情濃[○]かなり、十種香は梅、檀、沈木、蘇合、薰陸、麝金、白膠、青木、零陵、甘松、鷄舌の十種より成れる名香、煙も香花となつたるか[○]。あはれにはかなし「回向せう」とて「云々」さもあるべし。反魂香は、死する者其香氣をかげば、蘇生すといへる香、道士漢の武帝の爲めに此香を焼き、死せる李夫人の姿を、煙の中より顯せる由、漢武内傳に見ゆ、故に「魂反へす」といへり、「名畫の力も云々」切なる心根、極めていぢらし、意は死者の靈魂を招き反すといふ、反魂香もあれば、此名繪の力もあらば云々といふこと。此文「月にも花にも」と美麗に書き出し、回向の「十種香」にて巧

にしよんぼり濡衣が。「申し蓑作様。合點の行ぬは貴方のお姿。どうした事で此様に。チ、不審尤。はからずも謙信に抱えられたる衣服大小。テモ扱も衣紋付なり。社祢の召様迄。似たとは愚。やつぱり其儘。筐こそ今は仇なれ是れなくば。忘るゝ事も有らなんと。詠しは別れを悲しむ歌。筐さへちやに我夫に。みぢんかはらぬ此のお姿。見るに付ても忘られぬ。わたしや輪廻に迷ふたさうな。御赦されてと伏沈む。泣く聲洩て一間には。不審立聞く八重垣姫。そつと襖の隙間もる。姿見まがふ方もなく。ヤア我夫が勝頼様と。飛立心を押しづめ。正しうお果なされし物。似たと思ふは心の迷ひ。繪像の手前も耻しと。立戻つて手を合せ。御経讀誦の鈴の音。勝頼公は濡衣が。心を察して聲曇り。「はかなき女の心から。歎くは理り去ながら。定めなき世と諦よと。勇むる詞此方には。心空成る其人の。若しやながらへ

みに歎かしめ、遂に「反魂香」を呼び起して、其故事より「名畫の力も」といひたる筆才、感嘆に堪へたり。加ふるに語句流麗にして、追慕の念溢るゝが如し、實に千歳不磨の美文、

「吊ふ姫と吊ふ濡衣」 人生情あり、泣かざるを得んや、されどいづれも我勝頼にあらす、

「衣紋」 はもと衣服着用の法、今は襟の合せ目なにいふ、

「似たとは悪か云々」 迷はざるを得ず、

「簞こそ今は云々」 古今集「形見こそ今は仇なれこれなくば忘るゝ時もあらましものを」

「形見さへじやに我夫に」 さへじやにの下に「その通りまして」の語を入れて見る

おはずかと。思へば戀しく。なつかしく。又覗ては繪姿に。見くらへる程生寫し。似はせてやつぱりほんくの。勝頼様ぢやないかいのと。思はず一間を走出で。すがり付いて泣き給へば。はつと思へどさあらぬ風情。「こは思ひよらざる御仰。我等蓑作と申す花作。漸々只今召抱へられ。衣服大小改めし新參者。勝頼とは覺えなし。御麁相有るなと突放せば。「ム、何といやる。今父上に抱えられし新參者。花作の蓑作とや。自とした事が。餘り能ふ似た面さしの。若や夫れかと心の煩惱。二人の手前耻かしながら。「コレ濡衣。此蓑作とやらいふ人を。そなたは疾うから近付か。エイ。いやいの。知る人で有ふがの。アノお姫様とした事が。たつた今見えたお人。何のマア私が。イヤ隠しやんな今の素振。忍ぶ戀路といふ様な。可愛らしい中かいのと。思ひもよらぬ詞に悔り。「ナ、お姫様のおつしやる事わいの。人

べし、句調の爲め省きたるにて、加へざれば意通ぜず、「私しや輪廻に迷ふたさうな」愛着の念、身に纏ふを見る、

「不審立聞く」とかけたり、八重垣姫が裸ごしの隙見に、狂ふ心の駒を押へかれて、飛び出つる状、よく書きたり

「心空なる」は有頂天「御粗相あるな」けんもほろゝ

「いやいの知る人であらうかの」忍ぶ戀路といふやうな」語頗る艶深し

「人にこそよれ云々」意は人によれば兎も角、何のあの方に勿體ないといふこと、箋作が只人ならぬをほのめく。勿體ないといふを「勿體ないといやるからは」

にこそよれ。何のあなたに勿體ない。ム、勿躰ないといやるか

らは。どうしても和女の知るべの人か。イ、エさうではなけれ共

大事のお主の目を掠め。忍び男を拵へるは。勿躰ないと。申す

事でござります。ム、すりや知るべの人でなく。殿御でもない

人なら。どうぞ今から自を。かはゆがつてたもる様に。押付な

がら媒を。頼むは濡衣様々と。夕日眩く顔に袖。あてやかなり

し其風情。「ナ、お姫様とした事が。まだお子達と思ひの外。大

それたあの蓑作殿を。「サア見初たが戀路の始め。後共云はず今

爰で。媒せいとおつしやるのか。我をれ。ほんにお大名のお娘

御迎。油断はならぬ戀の道。品に寄つたらお取持致しませうが

コレく濡衣。必鹿相いふまいぞ。サア何もかも。私が吞込んで

で。吞込んでお取持致すまい物でもないが。眞實底から蓑作殿に

御執心でござりまするか。問れて猶も赤らむ顔。勤めする身

と押へ「イ、エ、そうでは」と切ぬけるを「ム、ソリや知るべの」と追窮して「どうぞ今から」と切出す詞の呼吸、其味何ともいはれず、感服云々

「濡衣さま、」とわけ夕日にいふを、あてやかに當てを含めたり、耻らひて顔をおふ状見るが如し、余が昨年箕尾紅葉見の新調に「耻らひて妹がわざせる袖の上に色濃き紅葉二つ三つ散る」あてやかは品のよきなにいふ、
「大それたあの眞作殿を、サア見初たが戀路の始め云々」これも得意の呼吸の筆、味ふべし
「むれ」ばあきれたる時の嘆辭我折など書く、
「勤めする身は云々」深窓の姫君、よく覺れたもの

はいざしらず。姫御前のあられもない。殿御に惚たといふ事が。嘘偽りにいはれうか。「其お詞に違なくば。何ぞ慥な誓紙の證據。夫れ見た上でお媒。ヲ、夫れこそ心安い事。其誓紙さへ書たらば。「イエ、」夫れもこつちに望みが有る。わたしが望む誓紙といふは。諏訪法性の御兜。夫れが盗んで貰ひたい。ヤア何といやる。諏訪法性の御兜を。盗出せといやるのは。扱はあなたに勝頼様と。言ふ口押へて。「ハテ滅相な勝頼呼はり。微塵覺えぬない蓑作。倉忽ばしの給ふなど。云ふ顔つれく打守り。許嫁計りにて。沈かはさぬ妹背中。お包み有るは無理ならねど。同じ羽色の鳥翅。人目に夫れとわからねど。親と呼び又つま鳥と。呼ぶは生有るならひぞや。いかにお顔が似れば迎。戀しと思ふ勝頼様。そも見紛ふてあられうか。世にも人にも忍ぶ成る。御身の上といひながら。連添わたしに何遠慮。つい斯うく

「法性の兜」は總解を見よ、こゝには諏訪明神より武田家へ賜はりたる兜にて八百八狐これを守護する由作れり、狐は明神の使獸といへれば、かゝる傳説もありしなるべし

「盗み出せといやるか」らは「云々」姫察したり、兩人これが爲めに入込めるなり、「ハテ滅相な勝頼呼ばり」ど、迄も色男

「つれづれ」はつくづく

「同じ羽色の鳥つばさ云々」意は同じ羽色の鳥類も、人目には分られど、尙よく親子夫妻を見知れるは、これ生ある者の常なり、まして人にして、如何にお顔が似たりとて、戀思ふ勝頼様を見違へる事あらんやといふ事、かゝる斲筆は半二手に入つたものなり、

とお身の上。明して得心さしてたべ。夫れも叶はぬ事ならば。いつそ殺してころしてと。緋り付いたる恨み泣。勝頼態と聲あらゝげ。「ヤア聞分なき戲事。いか程に宣ふ共。覺えなき身は下主下郎。餘處の見る目も憚り有り。そこ退給へと突放せば。「スリヤどの様に申しても。勝頼様ではおはさぬか。ハア、はつと計りに蓑作が。指添逆手に取り給へば。こは御短慮と留むる濡衣。

イヤく放して殺したも。勝頼様でも無い人に。戲言の恥しや。心の穢れ繪像へ言譯。どうも生ては居られぬと。又取直すを猶も押留。「チ、道は武家のお姫様。天晴成るお志。其お心を見るからは。勝頼様に逢せませう。ソレそこにござる蓑作様が御推量に違はず。あれが誠の勝頼様。ちやつとお逢なされませと。突やられては道にも。始めの恨み百分一。聞えませぬが精一杯。跡は互ひに抱付。つい濡初に濡衣も。心ときつく折から

「ヤア聞分けなき」 何處までも、勿體ぶれり
 「下主下耶」 ば前に解せり
 「指添遊手に」 此場合かう來なくては始末かつかず情歌に「死ぬとをどすは女の常よ云々」と、此事むかしより然り
 「勝頼様でも云々」 貞節無双
 「得了は武家の云々」 よくほめたり、否ほめしにあらず、そのかせしなり
 「始めの恨み萬分」 さすがはあどけなし「聞ひませぬが精一ばい」よくいひたり、満身の精力只此一語、しかも其情千萬無量「ついで濡そめの濡衣も云々」語頗る味ひあり、真味は一層深からん
 「鹽尻」 は東筑摩郡にあ

に。父謙信の聲として。「蓑作はいづれにをる。鹽尻への返答。時刻移ると立出れば。はつと蓑作飛しさり。「御支度よくば直様參上。ホ、委細の事は此文箱に。片時も早く罷越せ。はつと領掌文箱携へ。鹽尻さして急行く。謙信跡を見送つて。「ヤアく者共。用意よくば早來れと。仰せにはつと白須賀六郎。原小文治。更科なんどの譜代の郎等。御前に進めば謙信勇んで。「今此諏訪の湖に。氷閉れば渡海は叶はず。鹽尻迄は陸路の切所。油斷して不覺を取るな。ハア、畏り奉ると。勇進でかけり行く。跡に不審は八重垣姫。申し父上。とくしい今の有様。何事やらんと尋ぬれば。「ホ、あれこそは。武田勝頼討手の人數。何勝頼様を討手とは。這は开も如何に何故にと。驚く二人をはつたとねめ付。諏訪法性の兜を。盗出さんうぬらが工。物かけにて聞たる故。勝頼に使者を云付。歸りを待て討取らさんと。牒し合

りて、馬洗の東二里餘、鹽尻峠の險阻あり。

「白須賀、原」 等皆謙信の郎等にありし名なり、

「諏訪の湖」 は諏訪郡の西部にあり、周圍四里二十餘町、其水流れて天龍川となる、

「武田勝頼討手の人数」 兩人驚かざるを得ず

「けふはいかなる云々」の歎き、よく出来たり、此場合此別れ、必ずかくあるべし、

「優曇花」 は三千年に一たび花開くといふ、佛典に見えたり、極めて珍らしき事に譬ふ、なほ前に解せり、

「帳臺」 は室内に高座を設け、四方に帷を垂れたるもの、貴人の座所なり、

「思ひにや」がれて云々」思ひに火をかけ、姫の心よ

せし討手の手配。エイそんなら今の討手の者は。勝頼様を殺さん爲か。ハア、はつと計に撞と伏して。今日は如何なる事なれば過去給ひし我夫に。再び逢は優曇花と。悦んで居た物を。又も別れに成る事は。何の因果ぞ情なや。父のお慈悲にお命を。どうぞ助けて給はれと。くどき歎くに目もやらす。ヤア武田方の廻し者。憎き女と濡衣引立。うぬには尋ぬる仔細有り。奥へ失せうと小腕取り。情用捨もあら氣の大將。帳臺深く入給ふ。ウタ「思ひにや。焦れて燃る。野邊の狐火小夜更けて。狐火や。狐火野邊の。野邊の狐火小夜更けて。幾重洩くる爪音は。君を儲の奥御殿。こなたは正體涙ながら。「アレあの奥の間で。檢校が諷ふ唱歌も

全身の上。おいとしいは勝頼様。かゝる工の有るぞ共。知らずはからぬお身の上。別れと成るも難面上。諫ても歎いても。聞入れもなき胸欲心。娘不便と思すなら。お命助けて添せてたべ

り、狐火につゞけたる所頗る妙、野邊の狐火さよ更けて云々」これ法性の兜を守護する狐の火、點々として燃ゆる状見るが如し、句調已に文として味ひ深し、音曲に於ては、定めて好調微妙の箇所ならん、芝居にては、多くこれより人形振りをなす、

「まうけ」は饗臨、

「爪音」は琴の音、爪にて弾くよりの稱、

「檢校」は盲人の最も高き官、昔琵琶法師より以來

音曲の事は、盲人多くこれをなせり、前にいへり

「イヤ、泣ては云々」こ

のあたり上乘の文

「唱歌も今身の上」思ひにやこかれてもゆる云々「アア翅がほしい羽がほしい云々」切なる情を寫し得て

と。身を打ふして、歎きしが、「いやく泣ては居られぬ所。追手

の者より先へ廻り。勝頼様に此事を。お知らせ申すが近道の。

諏訪の湖舟人に。渡り頼まん急がんと。小褌取る手も甲斐く

しく。かけ出せしが。イヤくく。今湖に氷張詰め。舟の往來

も叶はぬ由。歩路を行つては女の足。何と追手に追付れふ。知

らすにも知らされず。みすく、夫を見殺しに。するは如何なる

身の因果。ア、翅がほしい。羽がほしい。飛んで行きたい知ら

せたい。逢たい見たいと夫戀の。千々に亂るゝ憂思ひ。千年百

年泣明し。涙に命絶れば迎。夫の爲にはよも成るまじ。此上頼

むは神佛と。床に祭り法性の。兜の前に手をつかへ、「此御兜は

諏訪明神より武田家へ。授給はる御寶なれば。取も直さず諏訪

の御神。勝頼様の今の御難義。助け給へ。救ひ給へと。兜を取

つて押戴き。押戴きし佛の。若しやは人の咎んと。窺ひおりる飛

餘蘊なく、字句亦好調、花底に驚語を聞くの感あり淨曲吾半二以外に見るべからざるの明文。つま戀は通常妻戀と書けど、こゝは夫戀なり、夫をも妻をもつまといふ「千年百年泣明し云々」何たる妙句ぞ「此上頼むば云々」思ふても及ばぬ女の身、最後の頼みは必ず神佛なるべし。

「今のげ儘に云々」 狐ののりうつる状、よく書きたり、上乘の出来、

「ありく有明月」 とかけ、且調をととのへたり

「胸もにこり江」 とかけ「池の汀に」とつゞけたり、縁の語味ふべし。にこり江はいぶかしく思ふをいふ、「狐を以てつかはしめ」これは眞なり「八百八狐云々」これは俗説なるべし、總解

石傳ひ。庭の溜の泉水に。映る月影怪しき姿。はつと驚き飛退しが。「今のは儘に狐の姿。此泉水に映りしは。ハ、テめんよふなと、きつく胸。撫おろしく。怖くながらそろくと。差覗く池水に。映るは己が影計。たつた今此水に。映つた影は狐の姿。今又見れば我儂。幻といふ物か。但迷ひの空目とやらか。ハテあやしやと右つ左つ。兜をそつと手に捧げ。覗けば又も白狐の形。水にありく有明月。不思議に胸も濁江の。池の汀にすつくりと。眺入つて立たりしが。「誠や當國諏訪明神は。狐を以て使はしめと聞つるが。明神の神軀に等しき兜なれば。八百八狐付添ひで。守護する奇瑞に疑なし。ナ、夫れよ。思ひ出したり。湖に氷張詰むれば。渡初する神の狐。其足跡をしるべにて。心安ふ行來ふ人馬。狐渡らぬ其先に。渡れば水に溺るゝとは。人も知つたる諏訪の湖。たとへ狐は渡らず共。夫を思ふ念力に。

を見よ、

「渡り初めする神の狐云々」

此事は神社に問合せたれどいひ傳へなむとぞ、狐のおつかひ獸といへるより、出でたる俗説なるべし、總解を見よ、

「忽ち姿狐火の」 とかけたりものすこし

「手弱女御前」 は將軍義晴の後室にて、謙信が迎へしなり、ムは濡衣が身代りに死するなり、

「神さる狐」 は神通力の添はりて、飛行くをいふなるべし、もと神去るは崩御の事にて、所詮あてはまらず、例のみだらなり、

「せき立つ關兵衛」 調をととのへたり

「鐵砲」 は後奈良天皇天文年間、南蠻より大隅の種子島に傳へしが始めなり

「仁王立」 は仁王の如く立はだかるをいふ、仁王は左を密迹金剛、右を那羅延金剛といひ、佛法守護の神とぞ、

「有財餓鬼」 は罵しる語、餓鬼の中に「有財餓鬼無財餓鬼あり、

神の力の加はる兜。勝頼様に返せと有る。諏訪明神の御教。ハ

ア、忝なや。有難やと。兜を取つて頭にかづけば。忽姿狐火の

爰に燃え立ち彼所にも。亂るゝ姿は法性の。兜を守護する不思議の有様。こなたの間には手弱女御前。終始の様子窺ふ共。い

ざ白菊の花の番。小屋にとつくと關兵衛が。付廻しても神通力

花のまにく。見えつ隠れつ。神さる狐。南無三寶とせき立つ

關兵衛。ねらひの的は手弱女御前。どつさり響く鐵砲の。音を

相圖に遠近より。俄に響く鐘太鼓。亂調に打立つれば。騒め關

兵衛。廣庭に二王立。程なく馳來る雜兵原。我討取らんとひし

めいたり。「ヤアしほらしきうざい餓鬼。此世の暇取さんと。

大刀すらりと拔放し。當る任せに薙ぎ立く。御殿をさして」行

先の。

關取千兩幟 猪名川内の段

總解

此淨瑠璃は明和四年八月四日竹本座の興行に上せしものにして作者は近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出、八民平七、竹本三郎兵衛、後同六年江戸の森田座にて興行せり。取調べ不満足の點多ければ、總解は後に譲る事とせり。

猪名川の名は池田のほとりを流るゝ猪名川に取れる事しるし。昔官家に調進せし。有名なる池田酒は。此流をくみて釀醸れるものなりとぞ。

關取千兩幟

猪名川内の段

「芝居は南」は道頓堀のこと、道頓堀は大坂南區にあり、五座の芝居小屋軒をならべ、市中最も雑踏の地なり、此所の芝居の始めを名所圖會に「寛永中京より段介といふ者大阪へ下り、下難波の傾城に都踊りを教へて假芝居を始たり、これ難波歌舞妓のはじめなり」と見ゆ、なほ別記を見よ、「米市は北」は堂島のこゝ、堂島は大坂北區にあり此米市の最も盛なりしは、舊幕藩侯の倉屋敷ありし頃にして、天下を動かせり、今もよく時價を上下す、なほ別記を見よ、「相撲」は垂仁天皇の御宇、野見宿禰當麻蹶速に始

猪名川内の段

芝居は南米市は北。相撲と能の常舞臺。堀江くと國々へ。鳴響たる猪名川が。角力の中は夫婦づれ。爰に堀江の假住居。店は初日のかざり物。半紙毛氈煙草盆。羽織脇差取禪。酒は杉葉へ米だはら。餘所の軒端をかり初の。賑々しくぞ見えにける。詞扱積だの。見事じや。何羽織脇差米もあり。ゑらひ張込じやの。イヤ又二三年こつちの相撲に。めつたに負けた事のない猪名川。シタガ今度の相撲には。千田川が病氣ゆる。はづむまいと思ふたが。思ひの外きついはずみ。ソリヤ其筈いの。勸進元の顔はよし。江戸方九州方残らず登り。猪名川といふ鼻負のつよい。力の強い。あんな男を持つ者の。顔が見たいと表から。内を覗いて高くと。夫の噂女房おとは。出合頭に聞く嬉しさ。

猪名川内の段

るといへり、昔朝廷にも相撲の節會ありて、七月に行はる、今の大阪勸進相撲は元祿五年袋屋伊右衛門が、堀江の高木屋橋にて興行せるを、始めとすといふ、「能」はもと猿樂より出で、足利義滿の時、觀世々阿彌に始まるといふ、後に其流派四に分れて、四座の猿樂と稱し、徳川時代の禮樂となる、なほ別記を見よ「堀江」は西區にあり、仁徳天皇の堀り給へる、難波の堀江より名づく、相撲の堀江に始る事は諸書に見わたれど、能の常舞臺ありし事は知らず、「羽織」は古へ胴服といひしものにて、帶をせずに上にうちかけ着るゆゑ、はふり(放)と呼びしが、音便にて、はなりとなれるなり

顔かほに少すここしは紅桔梗べにきぎやう。前垂まへだれの紐ひも繩なは暖簾のれん。上あひてにつこり。詞きた北

野屋のや七兵衛べんべでござります。ヲ、是これはく島しまの内うちの七兵衛べんべ様さま。よ

ふお出いで。サアく爰こゝへと打うち通りとほり。詞ことば扱さマアきついはずみやう。

千田川ちだがはがで出でぬ故ゆゑに。どふ有あふと思おもふたが。近年きんねんの大入おほいり。けふは

大方おほかた爰こゝの關取せきとりが。とらしやるで有あろと思おもふて。見物けんぶつにきたついでながら。ちよつと悦よろこびに寄よりましたが。關取せきとりはもふ往いてかへ。

イエく。けふは叶かなはぬ用事ようじに付つき。つい近所きんじよ迄まで參まりました

が。最も辰とつて御ごさんせふ。ほんにマア日外いっげはいかいお世話せわで

練物ねりものを緩ゆるりと見物けんぶつ致いたしまして。忝かたじけなござります。いつでも島しまの

内うちの祭まつりは。俄にわかが多おふて賑にぎやかな事こと。わたしらは在ざい所じよ者もの故ゆゑ。物もの

見みだけいと。モゑてはこちの人に呵しかれます。イヤモこちらの方ほう

も。門かどがざはつく斗はりで。奉公人ほうこうにんがいこかねば。肝心かんじんの商あきひが少す

ない。ヤ斯かういふ中うちに遅おそなつたら這入はいれまい。關取せきとりによい様やうに頼たのみ

されば羽織と書くは、假字なる由、秋草に見ゆたり

「取廻し」ば化粧廻し、

又単に廻しともいふ、これに織紋縫模様の華美をなす

は、正徳年間に始り、享保に至つて大に流行せりとい

ふ、

「酒は杉葉」酒と杉とは

縁深きもの、妹背山杉酒屋の段にいふべし、

「はづむ」の語、色道大

鑑に「蹴鞠より出でたる語なり云々、凡て機に乗ずる

とこみに用ふ」俗に乘氣になること、

「勸進元」は興行主の稱

もと神社佛閣などの、建立修葺の爲め興行せるよりの

稱、

「顔に少しは紅桔梗」うれしくはづかしき状、よくいひたり

ます。チ、せはしない。マア御緩りとなされませ。イヤ遅いと

よい場がござりませぬと。搦接そこへ歸りける。町中の。鼻

負に肩も猪名川か。鐵ヶ嶽陀多右衛門と。打連歸る我家の内。詞

ヲ、こちの人戻らしやんしたか。陀多右衛門様ようお出。初日

からまたお目にかゝりませぬが。きつい大入でお目出たうござ

ります。アイそりやモウ互ひでこんす。見物の足が早さに。そ

ろく行ふと出かけた道で。猪名川に逢たによつて。それでち

よつと寄ました。それほマアくようこそお出。シタガまだ漸と

今の先。櫓太鼓を打出しました。マア緩りとお茶成共と。會釋

に汲出す花香より。心の花香ぞあいそ有る。詞コリヤ女房共。

留主の内へ。けふの角力割はこなんだか。イエくまだ何にも

持つては。テハ埒の明かぬ。今迄知れぬは。何ぞもめでも有か

いの、陀多右衛門。サアおれも初日に。どんな相撲を取つたに

「前垂の紐繩暖簾」 とつ

「なうれんの約、のれんとな

れりと、又いふ明代の音と

「島の内」 は南區にあり

當所の祭りは、三津八幡宮

なるべし、

「關取」 は大關のことな

るが、幕の内一般に稱し、

又相撲取の敬語にも用う

「叶はぬ用事」 はのがれ

がたき用事、

「練物」 は祭禮の時の行

列をいふ、練り行くゆゑの

稱、

「こゑで」 はといふて

「肝心」 は大切の意、諺

草に「五臓の中、心の臓は

神をかくし、肝の臓は魂を

かくす、故に此二を擧げて

肝要の義に取れり」と見ゆ

れど、いかに

「鼻貧」 は引きの延語、

よつて、何でもけふはと思ふて居るが。誰とあはすか相人によつ

ては。魂膽も工夫もして見にやならぬ、いつそ聞にやらふかい。

ハテマアようござんす。其内には持つてきませう。幸貰ふた肴

も有る。主と一所に飯上て行しやんせ。ドレ拵ふと夕襷。かけま

く神に有らね共。ぼさつ廻りの女房は。勝手へ立つて入りにけ

り。詞猪名川様お宿にござりますか。新町の大阪屋から参りま

した。佐右衛門申ます。錦木太夫が身請の跡金。けふ中に遣は

されませう。ちとこちらに身請の客衆がござります故。其方

へ相談致しますが。お前のお顔を立まして。けふ中は待ます。

あすになつたら。こちらへ太夫をやります程に。其時意地無地

のない様に。念を入れいと申されました。いひ捨て使は立歸

れば。詞ヤア其身受外へさして。猪名川が立つ物かと。かけ出

すを。詞コリヤ、待て。其身請の譯も其客も。此鐵ヶ嶽がよう

ひいきのあて字なりと
 「樺太鼓」の打かたは、
 なかくむつかしき由、或
 書にて見たる事あれど、忘
 れたり、後に記すべし、
 「汲出す花香云々」よく
 用ふる句なり、
 「塔の明かぬ」物の滞り
 て、方のつかぬをいふ、もと
 春日明神の祭禮より出でた
 りと、別記を見よ、
 「魂膽」は心のたくみを
 いふ、
 「工夫」は考の意、もと
 考へる手間をいふなるが、
 思惟工夫など熟するより、
 考の意となれるなりと、
 「どれ拵ふと木綿襦云々」
 どれ拵へようと襟をかけて
 飯ごしらへを掌る女房は、
 勝手へ立つて行くといふ
 意、木綿襦とかけて、かけ
 まく神とつゞけ、神をうけ

ちて居る程に。マア行かず共よいわいやい。ム、すりや其身受
 の相談を。われがよふしつて居るか。シテ其身請の客といふは。
 イヤ外でもないおれじや。ナ、此鉄ヶ嶽陀多右衛門じや程に。
 マアそふ思ふて貰ふかいと。俄にこつきもふしくれ立。頬髭撫
 てのさばり顔。詞ム、聴えた。コリヤ九平太が腰じやな。尤も
 われがためには。大事にかけにやならぬ人じやが。爰をよふ聞
 てたも。あの錦木太夫は。おれが親方禮三殿とは。モきつう深
 い中じや。其錦木ゆる勘當迄。請られた事。コリヤモウいはい
 でも。わがみよふ知つて居やる事じや。そこらはまあ取てほつ
 て。五百兩といふ金迄渡し。跡金の二百兩。才覚する其内に。
 太夫殿を外の手へ渡しては。どふもおれが顔が立ぬ。わがみが
 中へ這入ったこそ幸。どふぞ、つちの身請を。じやみさす様に
 いひ廻してたもるまいか。ヤコレ鐵ヶ嶽。頼むくと詞をさげ

て、菩薩こゝろまはりといひ、面白くあやなしたる筆の妙、味あじひ頗る深し、半二にして始めて書き得べし。木綿こゝろ襪はかけの枕辭、拾遺「れぎかくる神の社の木綿こゝろ襪かけても六つの道にかへすな」菩薩こゝろは米の異名、「新町」は大阪西區にある女郎町、「錦木」はもと、昔陸奥にて男女相逢はんとする時、其家の戸口に立て、文の代りに用ひたる、まだらに色どれる木、遊女の名には妙、「太夫」女郎を大夫と呼ぶ事、京の島原に始る、委しくは第一篇にいへり、「いちむち」はかれこれの小言をいふ、「こつきも節くれ立ち」威猛高に構ふるをいふなるべし、骨氣は小説の語にて、

事を分けたる一言を。鼻はなであしらふ悪者作り。詞ことばチ、此身請このみうけはどふせふと斯かうせふと。おれがまゝじゃ。我が頼たのむ様やうにしてやるといふたら。勝手かつてはよからふがマアいやじゃ。わりや惠海庵ゑいあんで九平へい太様ださまを。ひどいめに合あしたげな。チ、つよいこつちやく。其仕そのしかへしを頼たのまれて居ゐる此鉄このてつヶ嶽たけ。あんたらくさい事こといふない。ム、すりや其時そのときの事ことが根葉ねはに成なつて。それゆる身請みうけの邪魔じゃまするのか。イヤ邪魔じゃまするとは。何なんのこつちやく。錦木にしきぎが身請みうけは金かねづくじやぞよ。わづか二百兩斗りやうはかりの跡金あとかね。團子だんごの咽のどに詰つまつた様やうに。ぎちかはくと。ほへづらかはくとは違ちがふて。七百兩りやうといふ金かねを。がらりと出だして身請みうけするのじや。成程なるほど尤もつとも。とかく銘々めいめい親方おやかたを。大事だいじに思おもふからおこる事ことじや。ガナント斯かうしてたもらぬか。どふぞおれを。九平へい太様ださまへ連つれて往いて。あなたの胸むねの晴はれる様やうに。ぶたし成なりと又踏またふしなりとさして。身請みうけはこつちへ

よき素性、よき家筋などの

ことなりと、

「頬髭撫で」

悪者づく

りの紋切形

「のさばり面」

はづうづ

しく剛慢なる面をいふ、和

訓葉にノサバノスの義、バ

リはアリの轉なりといへ

ど、いかゞ

「腰」

は腰推しの略

「じやみさす」

は事の成

らんとする時、妨げこはす

をいふ、前に解せり、

「鼻であしらふ」

馬鹿に

したあしらひをいふ、小町

踊に「香は鼻であしらふも

よし梅の花」

「悪海庵で九平太様を」

猪

名川の若旦那那禮三郎が、錦

木身受けの事により、村岡

團右衛門と九平太とに、打

擲されし仕返しに、猪名川

が蒲團の中に隠れ居て、禮

さしてたも。モわがみのいやる通り。金づくの事なれば。けふ

中に跡金さへ。出来れば頼む事も何にもなければ。サちつと急

には出来にくい。尤在所へいふてやつたら。工面の出来る事も

有ふが。親供の耳へは入とむない。夫でわがみを頼むのじや。

又折角身請仕やつてからが。とても太夫が九平太様の。女房に

や成らぬ。スリヤコレ畢竟が費えと云物じや。だまりあがれやい。

太夫がしたがふがしたがふまいが。それにや構はぬ。九平太

さまにや金がたんと有る。サ小判がたんと有るによつて。其金

でわいらが頬をはり廻すのじや。サイノ。金で面をはらずとも

此猪名川をどう成と。腹のいる様にして。どうぞ身請をさして

たも。一生の頼じや。恩にもきよ。コレ手を下げる鉄ヶ嶽と。

頭を疊にすり付けて。頼む心ぞ切なけれ。詞ム、そんなら何か

踏れてもふたれても。わりやいひ分はないといふのか。イヤモ

三耶をたすけ、九平太を散々の目に合せたり、

「あんだらくさい」は阿房くさい、大阪地方の俗言

「團子の咽に」悪口面白し、

「金で頬を張る」、此事世間に多し、歎くべし

「厄病の髪も頭も」とか

「厄病神は人の弱みつけこみて、厄病のたよりをなす、悪神なりといふ、此神々道の書には見ゆすと別記を見よ」

「いふも心に一思案」自

聞譯てさへたもれば。たとへ此身はどふ成つても。ム、ム、ヤ

コリヤ相談が面白い。あの九平太様の名代に。トちよつと斯せ

ふかいと。立げにどうと踏飛ばし。何じやくく。何をびこ

くさらすのじや。エ、わりやたつた今。云分ないといふたぞ

よ。但云分があるかい。イヤサ何の云分が有る物で。有るまい

く。何の有るぞい。惠海庵での意趣返し。わりや九平太様を

かうくらはしたか。ヤ斯踏んだかくくと。よわみを付込む厄

病の。髪も頭も引しやなぐり。さいなむ折から表へいさせき。

詞ハイ今日の角力割でござります。もう追付け土俵入じや程に。

早ふお出なされませと。書付ほり込み立歸れば。陀多右衛門押

ひらき。何じや鉄ヶ嶽に猪名川。ム、スリヤけふの角力は。コ

リヤ見い。おれと我とが角力じやといやい。ム、時も時折も折

わがみとおれが立合ふとは。ハテ氣味合な事じやのと。いふも

いふも心に一思案

ら及ばざるを知る。

「池田」は攝津國池田郡

猪名川の東畔にあり、酒を以て聞ゆ、別記を見よ

「大名のかゝへ」徳川時代には、諸大名争つて、勇

力の力士を召かゝへたり、「水心あれば魚心あり」そ

ちらに情心あれば、こちらにも情心ありといふ意、三

國志に「玄徳、孤之有孔明、猶魚之有水」これより出

で、轉じたるものなりと「叩きまばして」は頼み

まばして、

「つよい詞の云々」強く怒鳴りし詞の中に、味な色

氣を含ませて、鷹揚に出で行く状、見るが如し、よく

いひたり、よく書きたり。「鐵棒引する雪駄」とかけ

「ぐわらつかせてぞ」とつゞけたり、鐵棒引は僅の事を

心に一思案。詞コリヤ。われも池田の猪名川といはれては。國

々へ名の通つた者。おれも又大名のおかゝへ。殊に大阪は始め

てなれば。此角力しくじるが最期。扶持放れじや。スリヤコレ

二人ながら大事の角力。九平太様の名代に。惠海庵の仕返した

れば。此算用は濟て有るが。又錦木が身請の事はおれ次第じや。

ナ、此鉄ヶ嶽が心次第じや程に。水心有は魚心有り。頼む事も頼

まれる事も。マけふの角力仕まふてから。其うへのことにせふ

わい。われも隨分神佛でも叩き廻して。おれに勝様にせい。し

たが可愛やおれと取つたら。骨身が碎けて。重て土俵踏とはなら

ぬぞよ。どふぞ頭取衆を頼んで。ふりかへて貰ふて成と。取ら

ぬ方が勝じやあるが。それ共にとつて見様と思ふなら。サ魚心

有れば水心。ナ猪名川。土俵で會ふと。つよい詞のどこやらに。あちな鐵棒引する雪踏。ぐわらつかせてぞ。詞コリヤ猪名川。

仰山に騒ぎ立つるものゝ稱
 祭禮などの時山車の前に、
 鐵棒を突き鳴らし行くより
 いふなるべし、ぐわらつつか
 せての語、鐵棒と雪駄とに
 かゝれり、かゝる文の妙は、
 味ふの外なし、弱みに崇る
 鐵獄の、にくくし、
 何處迄も下手に出る、猪名
 川の辛抱さ、よく顯れたり、
 又相撲割を見てより、詞の
 中にあちを含まする一轉、
 顯る上出来、
 「やらざなるまい」 やら
 ればなるまい、
 「いはゞ一生懸命の云々」
 これ段中有名の美文、猪名
 川の心の中、思ひやられて
 あばれなり、一生懸命は命
 かけの意、もと一所懸命に
 て、一所の領地を命にかけ
 て、頼みにすることなるか、
 所を生と書けるより、今の

ソレ今いふた。魚心有ればナ水心。必ず忘れてくれなよ。ハ、ハ、
 出て行く。跡に猪名川諸手を組。思案にくれて居たりしが。詞
 だんぐ日切の切れた跡金。親方が催促するも。九平太が皆所爲
 とかく鉄ヶ嶽を抱こんで。あつちの身請を。延して貰ふより外
 はない。といふても一筋繩では行ぬやつ。抱込む仕様は。ム、太
 夫が身請はおれ次第。魚心有ば水心有り。ム、こりや今日の相
 撲をふつてやらざなるまいわいの。ソレく。あれとおれとが
 立合こそさいはい。美しうふつてやり。あいつに勝を譲つて置
 て。其うへでのつ引させず。頼むが近道上分別。とはいへ名取の
 鐵ヶ嶽。どふごんたんしてなりとも。投げねばならぬ曠の角力
 いはゞ一生けんめいの。大事の角力を金ゆゑに。振てやる猪名
 川が。心の内のせつなきたな。摩利支天にも見はなされ。
 角力冥加につきたかと。思はず拳をにぎり詰。身をふるはして

意に轉ぜるなりと。

「廢利支天」は梵天帝釋

の眷族にして、常に日月の

前驅をなし、四天下を巡行

して、護國護民兵戈等の難

を救ふ神、勇力ありて迅速

なる神とて、武士相撲等、

これを祭りこれを祈る、別

記を見よ。

「そしらぬ顔」のそは助

辭、知らぬ顔

「お前の心のもつれ髪云々」

この謎頗る妙々、讀者意を

用ひて味ひたまへ

「高が女の手業」といは

しめたるは、後に女の手業

男泣。始終立聞く女房が。涙かくして。詞「ナ、ちこの人とした

事が。さつきにから。飯こしらへて持て居るのに。爰で上るか奥

へ据うかと。何氣なければそしらぬ顔。詞「イヤモ飯なら喰たふ

ない。ヤホンニ角力から呼に來た。ドレ行てこふと立上れば。

詞「コレ待しやんせ。ソレ髪がきつう亂れて有るぞへ。人中へ見

ぐるしい。結ふて上ふと取出す櫛箱。詞「イヤ〜。結ふて居た

ら隙が入る。つい撫付て置ても。ナ、おまへもこんな髪して

行しやんした事はないが。いつその事何も角も。云て聞かして

下さんせぬか。詞「ヤいへとは何を。サイナおまへの心の。ナそ

れもつれ髪。撫付て置ふより。詞「いつそさつぱり。云しやん

せぬかといふ事じや哩な。イヤ〜。いふまい〜。何ぼわし

にいへといやつても。高が女の手わざ。いふたら大方後れが出

よふ。つい撫付て置ても。傍に直れば女房も。押てはいは

にて、此雅儀を救はしむる
伏線、

「押してはいほぬ」結ほぬ
を含む、最も妙

「櫛の背より夫の胸云々」

「寫せば寫る云々」鏡に

顔を見合せての間立て、こ

ゝの味何ともいはず、且

夫思ひの情あふるゝを見る

ぬもつれ髪。鬢のほつれを撫付ける。櫛の背より夫の胸。うつ

して見たき立鏡。寫せばうつる顔と顔。詞申し猪名川殿。色も

あをさめ。そしてまあ目の内もうるんで。どふやら氣色の悪そ

ふな顔付。もうけふの角力へは。斷いふて往てくださんすな。

何をあんだら盡すぞい。いつはともあれけふの角力。鐵ヶ嶽と

此猪名川。初日の出ぬ先から。町中が待て居る晴の出合。何で

も鐵ヶ嶽を。土俵の砂へうづまにや置かぬ。イヤそりやうそじ

や。けふの角力は鐵ヶ嶽に。ふつてやるお前の心。コリヤ聲が

高い。スリヤさつきにからの様子残らず。アイ一間で聞ており

ました。わづかな金に手詰りて。難義さしやんすが。わしや悲

しいわいなく。いつそ此譯親父様に。たわけめが。それいふ

程ならば此様に。人に擲れ踏れはせぬはい。昔質氣の親父様。

打明てもものいふと。禮三様に異見の何のとやかましい。若いお

「千日に蒔つた萱じやわやい」長らくの辛者を、一朝に無にするをいふ。和漢古諺に「千日に蒔る萱も、一日にほろぼす」世話盡に「千日蒔つた萱が、一日に亡ぶ」
 「相撲取を男に持てば云々」淨瑠璃界有名の文句なれど丸本には、去ながら、夫程の大事のこと、連添ふ女房に隠して居る、お前の心が聞ぬぬ」とあり、後人の加筆なるべし、そは兎も角、夫思ひのおとは、胸中、説きつくして餘す處なく、覺ゆる落涙したり、金玉の女なれど、讀み來りて「案じて夜を寝ぬ女房の、今此切なる苦みを、連添ふ私しいはしやんせぬ」の句に至れば、てになはの誤用あるゆゑ文を爲さず、甚だ拙きを

人の水の出端。もし命生害に成た時はナ。コリヤ千日に蒔た萱

じやわい。ア、急な事できへなくば。工面の仕様も有らうのに

わづか二百兩の金故に。大事の角力をふつてやらざ成るまいと思へば。腑甲斐ないやら口惜いやらで。おりや胸がさけるやう

なわいく。ナ、道理でござんす。尤でござんすわいな。角力

取を男に持た。江戸長崎國くへ。行しやんすりや其あとの。角力

留主は猶さら女氣の。ひとりくよく物案じ。夫に怪我のない様

にと。祈る神様佛様。妙見さまへ精進も。戻らしやんして顔見

る迄。案じて夜を寝ぬ女房の。今此せつなる苦しみを。連添ふ私

に云しやんせぬ。お前はそれ程つれないと。女夫に成つた今迄

を。かぞへ立く。恨涙に時移り。早追々のよび使。詞ヤ、土

俵入りでござります。早ふお出なされませ。ちやつとくには

非なくも。詞女房共往てくるぞや。エ、そんならどうでも行し

覺ゆ、これ玉に瑕といふべし「案じて夜を寝ぬ女房に、今此切なる苦しみな、なせ明しては下さんせぬ」と、

改めては如何、

「妙見」は北斗星の本地にして、國土を擁護し貧窮を救ひ、願として成就せざるなしといへり、妙見尊星王と稱す、別記を見よ、

「精進」はもと餘念なく行を修して、怠らざること

なるが、今は専ら神佛を念する爲め、肉食せず又火だち斷断ちなどするをいふ

「これが暇乞に」此語、

おとほの胸に、いかにこたへしならん、

「とうから」は大阪の櫓太鼓、上方丈にやさし、東京

はどぐんかどか〜、と調を「張紙も張さく」と調をととのふ

やんすか。ホ鐵ヶ嶽を抱込んで。工面通りいきや格別。もしも行かねば絶躰絶命。エ、コリヤ是が暇乞に成うも知れぬ。さらばと斗り一聲を。跡に残して出て行く。コレノウ待つて下さんせ。たつた一言いひたい事。猪名川殿くと。見れども跡は雲霞。詞夫の命にかゝはる大事。コリヤ斯しては居られぬと。帯引しめて夫の跡。したふてこそは行く空に。響く櫓のとふからと打仕廻ふたる大鼓より。鳴渡たる。猪名川と。鐵ヶ嶽との相撲わり。表にべつたり張紙も。はり裂く木戸口押合へし合。早土俵入事終り。角力の数々取盡し。中入前ぞいさましき。詞東西く道頓堀宗右衛門町北野屋七兵衛様。急用でござります。又ともよび出す角力の名乗。入れかへく勝負も。今一番と夕日につれて。猪名川く鐵ヶ嶽くと。名乗上げられ。しこ踏ならす鐵ヶ嶽。こなたは猶もしよげ鳥の。しほく上がる土俵のうへ。

「今一番と夕日につれ」と

かけた

「しよげ鳥」

の枕辭、

はしほく

「諸差」

は双方の手を、

下手にさしこみたるをいふ

「力士の如く」

は仁王の

如く、前に解せり、樺太鼓

もうち出し」とかけたり、

すは千番に一番の。角力と力む幾萬人。しづまりかへつて見物
す。詞片や猪名川く。鐵ヶ嶽く。やつと引たる行司の團扇
直に付入る鐵ヶ嶽。づつと兩腕差込す。元より覺悟の猪名川が。
既に危く見えたる所へ。詞進上金子二百兩。猪名川へひいきよ
りと。聞よりぐつと猪名川が。始の氣色どこへやら。鐵ヶ嶽が
もろさしを。ほぐして土俵へ引くり返し。力士の如くつゝ立て
ば。よいやくく。くくくと數萬人。一度に立つて手を叩き。ど
よみを作る関つくる。樺太鼓も打出しの。表は人の山なせり。
次第くにある人の。中に紛れていきせきと。駕をかゝせて北
野や七兵衛。來かゝる向ふへ猪名川が。胸のもやくやさつぱり
と。我家へ歸る戻り足。詞ヨウく。關取様。出來ましたと。
跡から付いてくる人に。見付けられじと駕片よせ。七兵衛がそ
しらぬ顔。詞ハア關取。扱々けふはきついお手柄。ホ七兵衛殿

「あぢな事とは二百兩の云々」この前後、頗るよく書きたり、味ふべし「何にもいばぬ忝ない」さもあるべし、胸にせまつて出ざるなるべし、妻を娶らば、よろしくおとはの如き者を娶るべし、彼れが男を磨く角力取を夫に持ち、始終心を盡してこれを助け、遂に身を賣つて其難儀を救ふに至つては、あはれにもいぢらし、

「北野屋が氣轉きかして」といへり

見てじや有つたか。見た段かいのく。どふやら取口は悪かつたが。ひつくりかへした其つよき。ゑらい物じや。イヤモけふの相撲は。譯が有つてきつう取にくかつたが。あぢな事が張合に成て。あぢな事とは二百兩の花かい。コレ其花やつた且那殿が。幸爰にじや。逢ふて禮を云しやりませと。垂を上れば。詞ヤアわりや女房か。猪名川殿。随分まめで居て下さんせ。そんなら今の二百兩は。コレ關取。お内儀の勤奉公。志の二百兩女房共。何にも云ぬ忝い。サア駕の衆。やつてと北野屋が。氣轉きかして駕の垂。内は歎に暮近く。入相告る鐘諸共。別れくに行末は。

淨瑠璃通解第參編別記

八方行燈 物類稱呼に「江戸にてハチケンといふものあり竹をもて丸く輪をつくり菅笠の如くたてに骨を組みて紙にて張り灯を點じてうつばりなどにかくるものなり加賀にてカサアンドン越前にてツリアンドン又ハツパウ又ニッホンといふ津國にてもハツポウ武藏にてサントクともいふ」と見ゆ

六角堂 名所圖會に「六角堂頂法寺は六角通り烏丸通の東にあり天台宗にして開基は聖德太子なり本尊如意輪觀音は金像にて長一寸八歩なり西國十八番巡禮札所洛陽巡の三十三番抑此像は昔淡路國岩屋浦に夜々光あり漁人之をあやしみ網をおろすに朱の唐櫃を得たり其櫃の上に正覺如意輪の像一躰謹上日本國之王家と書せりよつて内裏に献るに太子早く見給ひ是こそ我前生七世の持尊なりと尊崇し常に隨身し給ふ時に攝州四天王寺を造らんとて材木を所々に求めらる其頃此所を山城折田郷土車の里といふ太子此邊を徘徊しこゝに來り清水に口すゝがんとてかの尊像を解樹にかけおき浴みすすみて像を取給ふにいと重くして離るゝ事なし其夜の夢に本尊告て曰く我れ太子の爲めに持せらるゝ事七世今又此地に因縁あり願くばこゝに

ありて衆生を利益せんと宣ふ。然るに東方より一人の老嫗來つて曰く。此傍に大木の杉あり。毎朝紫雲覆へり。これこそ靈材なりといへば。太子これを見給ひ。則伐らしめ。他木の枝も交へず六角堂を營み給ふ。其後三百五十餘歳を経て。桓武天皇都をこゝに定めさせ給ふ時。官使條路を極むるに。六角堂小路の中に當れり。皆これを愁しかども。太子建立精舎を。他所に移さん事いかゞ沙汰しければ。俄に黒雲下りて。此堂自ら五丈ばかり北の方に退けり。故に事故なく。小路を通して都となりにけり。一説には高麗國光明寺にありし尊像なり。然るを彼國の僧德胤これを迎へて。太子に奉りしともいふと見ゆ。池の坊立花は。當坊の住職專慶法師にはじまり。爾來家本として。都鄙の門人に許しを與ふ。

眉間尺 祖庭故事に見え。太平記にも載せたり。昔楚王武を好み。其夫人鐵の柱に倚りて懷妊し。鐵丸を産めり。楚王之を見て鐵の精なりとし。干將といへる有名の鍛冶工に命じて劍を作らしむ。干將妻の鑢耶と共に。三年を経て雌雄の二劍を鍛へ。雌劍を隠して雄劍のみを献ず。事顯れて楚王大に怒り。干將を殺せり。干將の子に眉間尺といふ者あり。身の長一丈五尺。力五百人を兼ね。顔三尺にして。眉間一尺ありしかば。人眉間尺と呼ぶ。雌劍を持して。父の仇を報せんと。楚王をねらふ。楚王大に懼れ。軍を起して之を攻む。

といへども殺すこと能はず。于將の知音に。甌山人といふものあり。眉間尺に語りて曰く。汝父の仇を報せんと欲せば。雌劔の鋒三寸をくひ切り。口に含みて死すべし。我汝の首を楚王に獻せば。楚王必ず之を見るべし。其時含める劔の鋒を。楚王に吹きかけて。共に死すべしと。是に於て。眉間尺其言の如くす。太平記に。客。眉間尺が首を取りて。則ち楚王に獻る。楚王大に喜びて。是を獄門に懸けられたるに。三月まで其頭爛れず。隣目切齒常に齒喫をしける間。楚王是を恐れて。敢て近づき給はず。是を鼎の中に入れ。七日七夜までぞ煮られける。餘につよく煮られて。此頭少し爛れて。目を塞ぎたりけるを。今は子細あらじとて。楚王自ら鼎の蓋を開あかせて。是を見給ひける時。此頭口に含みたる劔の鋒を。楚王にはつと吹き懸け奉る。劔の鋒誤らず。楚王の頭の骨を切りければ。楚王の頭忽ち落ちて。鼎の中へ入りにけり。楚王の頭と眉間尺が首と。煎え揚る湯の中にして。上になり下になり。喫ひあひけるが。動もすれば眉間尺が頭は。下になりて。喫負けぬべく見えける間。客自ら己が首を掻き落して。鼎の中へ投げ入れ。則ち眉間尺が頭と相共に。楚王の頭を喫ひ破りて。眉間尺が頭は。死して後父の怨を報じぬと呼はり。客の頭は。泉下に朋友の恩を謝しぬと悦ぶ聲して。共に皆煮え爛れて失せにけり。と見ゆ。

寒夜に御衣を脱ぎし帝 大鏡に同じ帝と申せど。その御時に醍醐天皇うまれあひてさ

ふらひけるは、あやしのたみのかまどまで、やむごとなくこそ。大小寒のころほひいみじう雪ふりさえたる夜は諸國の民百姓いかにさむからむとて、御衣をこそよるの御おとゞよりなげいだしおはしましければ、おのれらまでも、めぐみわはれひられ、たてまつりて侍る身とおもたゞしうこそは、さればその世に見給へしことは、なほすゑまでもいみじきこととおぼえ侍る。

琵琶 四絃の樂器とも胡中より出で、馬上に彈せしものとも、魏の武帝の造る所ともいひて、詳ならず、其名は琵琶錄に、以手前曰琵琶、引手却曰琴、因以爲名と見えたり。我國に傳はるは、三代實錄には、仁明天皇承和二年、藤原貞敏遣唐使准判官として入唐し、琵琶の妙手劉二郎に學び得て歸れるが始めなりといひ、琵琶血脈には、貞敏琵琶博士簾承夫より、うけ傳へたる由を載す。東齋隨筆にも、妙音院入道相國が、貞敏を師祖といはれたる旨を記せば、玄妙の音曲を傳へしは、此人なるべけれど、南都正倉院の寶物中にも、此器ありといへば、渡來せしは、奈良朝時代なるべし、遂には、玄上牧馬などいへる、名器もいで、博雅三位の如き、妙手もあらはれたり、後盲人の、平家に合せて語る、平家琵琶といふもの出來れるが、これは、雅樂に用る物より、小形にして、柱も一つ多く、五柱なりとぞ。今は平家琵琶廢れて、薩摩琵琶などいふもの行はる。さて、女媧氏の作などいへるは、禮

の明堂位に「女媧之笙簧」とあるより、笙は女媧氏の造る所といへれば、これより推あてに書けるものか、此種の作者には、かゝることいくらもあるべし。

神樂歌 歌舞音樂略史に「其歌は、大方三十一言の歌にして、奈良朝より今の京の始めへかけての調と覺しく、其後の世なるも交れり、其歌の初なる、柳の本方の歌に「柳葉の香をかぐはしみとめくれは八十氏人ぞまとゐしにけるまとゐしにける」末二句はうたひ物なるによりてかくうたひかへせるなり」とあるは拾遺集の神樂歌に見え、末方の「霜やたびおけどかれせぬ柳葉のたちさかゆべき神のさねかも神のさねかも」とあるは、古今集の神あそびの歌に載せたり云々と、委しくは同書を見よ。

苗氏 貞丈雜記に「苗氏といふはうぢ也、たとへば伊勢、細川、島山などの類也、苗氏といふ子細は、稻麥などの生え初の時を苗といふ、其の如く先祖は、其の家々の苗の如し、其の先祖の名乗り始めたる氏なる故、苗氏といふ也、又名字といふは、別の義也、是は氏の事ばかりに限らず、すべて人の氏も、名も、實名も、おしこめていふ詞也、舊記の内には、苗氏の事を名字と書きたるもあり、勘辨して心得ざれば、其の書の義理本意違ふ也。」

野に伏勢ある時は、歸雁行を亂る、孫子に「鳥起者伏也、獸駭者覆也」とあるより出でたるなるべし、古今著聞集に「同朝臣（源義家十二年の合戦の後、宇治殿關白頼道）へ参りて、戰

の間の物語申しけるを。匡房卿よく／＼聞きて。器量はかしこき武者なれども。猶軍の道をばしらぬと。獨言にいはれけるを。義家の郎等聞きて。聞けやさけ。ことをの給ふ人かな。とをもひたりけり。さる程に江師(匡房)出でられけるに。やがて義家も出でけるに。郎等かゝる事をこそ。の給ひつれ。と語りければ。定めて様あらんといひて。車に乗られける所へすゝみよ。りて。會釋せられけり。やがて弟子になりて。それより常にまうで。學問せられけり。その後永保の合戦の時。金澤の城をせめけるに。一列の雁飛びさりて。苜田の面におりんとしけるが。俄におどろきて。つらをみだりて。飛び歸りけるを。將軍あやしみて。くつばみをおさへて。先年江帥の教へ給へる事あり。夫軍野に伏す時は。飛雁つらをやぶる。この野に必ず敵伏したるべし。からめ手をまはすべきよし。下知せらるれば。手を別ちて三方をまく時。あんの如く。三百餘騎をかくしおきたりけり。兩陣みだれあひて。戦ふことかぎりなし。されどもかねてさとりぬる事なれば。將軍の軍勝に乗じて。武衛等が軍やぶれにけり。江帥の一言なからまじかば。あぶなからましとぞいはれける。(十二年とあるは前九年の役永保とあるは寛治にて後三年の役なり)

芝居は南 道頓堀のこと。芝居は歌舞伎の異名にして。五條河原に芝居して演せしよりの名なりといへど。舞臺より見物の所をさしていへるものゝ如し。攝津名所圖會に歌

舞妓は慶長の頃より名古屋山三、お國などいふ者、京都北野祇園株五條河原にて始て
戲場興行し、其後彼等が弟子、村山又八、松本名左衛門、京屋万太夫、大阪太左衛門、鹽屋九
郎次、同九郎左衛門など、伏見の城山、指月亭、豊太閤の御前にて、狂言盡を初めけり、其後
寛永年中、京より段介といふ者、大阪へ下り、下難波の傾城に都をどりを教へて、假芝居
を初めて立てけり、是難波歌舞妓の始なり、それより女藝を禁じ給へば、鹽屋九郎右衛
門、同九左衛門、犬和屋甚兵衛、河内屋與八郎、松本名左衛門、大阪太左衛門等、京都より大
阪へ下り、芝居興行す、其頃は皆濱芝居なり、次第に繁昌して、人數も増し、若衆、變童、五
十、大ばかりつゝ、入替へく踊らせたり、其頃は名代座本の極りもなく、勝手にこれをな
す、然るに慶安五年に至りて、名代も改りけるとぞ聞えし、今は昔に變りて、衣裳も美を
つくし、鬘もさまざまに作り、道具立の見事なるは、古へに十倍せり、室の梅咲初ひる霜
月の頃は、夜の顔見世とて、万燈を照らし、笹瀬が幕北濱の手打櫓太鼓の音に、樓船を早
めての芝居ゆき、色長は大振袖にて、樂戸入、たち、役且那がた、やつしがた、あくまがた等
は、皆顔の色に、おらはし、角の芝居中の戲場とて、互に大入の札を出し、角丸は切難扮と
て、果てるわり始まるわり、いろは茶屋の暖簾は、今は見えぬと、此濱側は昔よりほひに
して、春秋の賑ひ、遠近大阪へ至れば、兩三日は芝居にて日をふるなるべし、和漢事始に

「白拍子しろはつしといへるは、近世の歌舞妓の類なり。歌舞妓の始は、僧衣を着て鐘をたゞき、佛號をとなへて念佛おどりといひしに、その後名古屋山三郎といひしもの出雲巫お國といふものに密通し、國に刀をさへせ、頭をつゝみて、早歌をおしへ舞せければ、歌舞妓といふ(其始め慶長十九年なりと)かの歌舞妓の歌に、比田の横田の若苗と歌ふも、皆出雲の國の里の名にて、かの國より始まれるゆゑなり、淫佚いんいつの舞なれば、寛永年中にこれを禁制し給ふ。其後又小童こわらを女の形に出でたゞせて、舞はせける程に、世の放蕩はうたうの子弟男色しやくに耽かり、淫風猶甚し。なほ三浦淨心翁のそゝる物語に見えたり。

道頓堀は攝津名所圖會に「道頓堀島の内の夕景色は、都に劣らぬ難波女の色白く、清らかに立立ちて錦繡をまとひ、珠の髮指露散るばかり。女伶にんじやうあり男倡やらうあり、送りあり迎ひあり。芝居側の囂しきは四時たえまなし。まづ初春の十日蛭子むしこより、梅匂ひ初花開く頃、天王寺の聖靈會、彼岸參り、寺社の開帳、住吉の汐干、五月の御田植、水無月の夏祭、船遊びの花火、難波の夕涼、名月、後の月、魴魚釣さかなづりり、煙まきとり、十夜講、蛭子講、雪の曙に夜の顔見世、おるは月毎の大師巡り、藥師、宵庚申、勸進能、大相撲まで、皆此里の賑にして、下風の聲色こゝろいろ、法師の琴の音常にして、難波江の流れ絶えずして、もとの流れにわらず、其流れの身のしばしとゞまりて、垣に花の散かゝる條なるべしなほ、からくり芝居、あやつり芝居、淨瑠璃

璃等の事を載せたり。

米市は北堂島の事なり。北區堂島川と曾根崎との間にあり。攝津名所圖繪に「堂島の市立は雜穀を糶糶せりうりなり。其市人を見るに早旦より斜陽まで。街に聚りて指頭を搖かして。百万の斛數を相對す。其囂しき事いはん方なし。其年の豊凶。又は時候の幸災。天地の順不順によりて。尊さわり卑さわり。其高下の極を市諷といふ。之を須臾に。遠き國々までも知らずとかや。如何なる術にや知らず。粗此市の始元を原ぬるに。俗諺にいはいく。天正年中に今の淀屋橋爪に。淀屋巨菴といふ豪富の者あり。豊太閤の旗下に。多くの軍糧を運送する事年久し。其恩賞として名畫の鶏を賜ふ。多くの黄金の代となれば世に賞して黄金の鶏といふ。これは昔遣唐使の時。唐の玄宗帝より。本朝へ献せられし寶器なりとぞ。巨庵が家ますく繁昌して。國々の米粟菽麥を買積て。此橋爪にて毎朝市を立て。諸人に買ふ事。其數限りしられず。此家絶て後。今の堂島にて市を立つる事は。淀屋が遺風なりとぞ聞えし。或はいふ今の淀屋橋も。此家より架初めしとぞ。又堂島といふは。近歲五花堂といふ風流者あり。もとは洛に住みしが浪花に移りて。庭に梅櫻牡丹蓮菊を植えて。五花堂と號す。羅山文集に見えたり。其頃此邊はまだ原野なりしが。貞享の頃。公命によりて市中となれり。今は北濱といふ。大江橋渡邊橋。田養橋。玉江橋等は。堂島開

發の後、元祿年中掛初めしなり」と見ゆ。

相撲 公事根源に「これは諸國の供御人イッパンを召しあつめて、七月に相撲節といひて、天子の御覽する事なり。先づ十六七日(七月)の間に召仰あり。上卿勅を奉りて、左右の次將に相撲あるべき由を召し仰せらる。左右の近衛方をわけて、國々へ使を下して相撲を召す。これを萬葉には「ことり使」と申すなり。廿六日に内取といふ事あり。主上仁壽殿に出御なる。左右の相撲人犢鼻の上に狩衣袴を着て、一度に相撲を取りて勝負あり。廿八日に召合あり。天皇南殿に出御なる。王卿參上す。大將相撲の奏を取り。十七番取りて勝の方亂聲あり。又廿九日に拔出ぬきだとして、相撲をすぐりて御覽せらるゝなり。神龜三年、聖武天皇に始めて諸國より召しのぼせらる。寛平七年には童相撲を御覽ありき。すべて相撲のおこりを申すに、日本紀に垂仁天皇七年七月に、當麻たいまの村に勇士あり。名をば當麻蹴ひ速はやといふ。力つよきこと角をもさきつべし。天皇この由を聞し召して、これにつかふべき人を、群臣に尋ねられしかば、出雲に猛き男あり。野見宿稱と申すもの侍る由を奏す。則ちこれを召して相撲を御覽せらる。野見宿稱力やまさりたりけん。蹴速が腰をうちくじきて、立所にふみ殺し侍りき。これ相撲のはじめならんかし」と見ゆ。醍醐天皇の七月に崩せば、其忌にかゝりて、相撲の節會のとまらんが、口惜しと仰せられし由。大鏡に

見えなければ、なか／＼面白き行事なりしなるべし。

江戸相撲 寛永七年、大關明石志賀之助仁王仁太夫なるもの始めて寄せ相撲と號して、徳川幕府に出願許可の上、江戸四ッ谷鹽町に於て、晴天六日の間興行をなせり。後三十年間中絶せしが、寛文元年に相撲年寄協議の上、幕府の許可を得て再興す。

京都相撲 正保元年、山城國愛宕郡田中村干菜山光福寺の僧宗圓なるもの、同寺境内八幡宮の堂宇再建の爲め出願し、翌二年下加茂會式中興行す。

大阪相撲 元祿のとし大阪の袋屋伊右衛門なるもの、南堀江高木屋橋筋立花通りに於て興行せり。後三十年間程中絶せしが、天保八年に至り太山次郎右衛門なるもの再興せり。以上三都の勸進相撲起原なり。

能 猿樂の能の略にて、足利義政頃よりいひはじめ、堪能の意なりといふ。猿樂はもと伊勢加茂、住吉、奈良、其他處々に座ありて、俗の神樂の如く、神前に奏して神慮を慰め奉りしものなりとぞ。殊に奈良四座の中、結崎家なる觀阿彌清次世阿彌元清父子、足利義満の寵を受け、古作を増補し新作を出し、斯道の進歩を圖りしかば、節定まり舞整ひて、大に世に行はれ、遂に將軍家の式樂として用ひらるゝに至れり。義政の頃はます／＼隆盛を極め、前の四座は觀世、結崎、寶生、外山、金春、圓滿、井金剛、坂戸と改姓して、おの／＼流

派を分ち此道に従事して四座の太夫と稱せらる。豊臣秀吉いたくこれを好みて自ら舞はれし事あり。徳川時代には大に品格を高め將軍家の重き式樂となり。武士の一藝として幼稚よりこれを習はしむるに至る。前述の如く能を完全に組立てたるは結崎父子なれどこれ曲節を附し歌舞すべきやう作れる人にて歌詞の作者は殆ど詳ならず。

堀江 大坂勸進相撲の始は堀江なれど後は難波新地にて興行せしなるべし。名所圖會に「大相撲は毎歳三ヶの津にあれども殊に賑しきは難波新地の大相撲なり。最負の關取思の外の者に勝ちし時は花として云々」と見ゆ。能の常舞臺の堀江にありし事は未だ見當らず。恐らくは虚筆なるべし。御存じの方ならば御教示を乞ふ。難波新地にありし由は圖會に見ゆ。

取廻し 昔しは幘鼻褌とて布にて下帶を隠す袴を着したり。依つて別に風流をも盡さざりし。朝廷の相撲の時は上より賜りたれども勸進になりて私にこれを用ふると能はざるが故に別に織紋縫模様などの風流を物好みし初めたり。此事正徳年中に初り。享保年間に至つて大に流行せり。其頃武門の相撲を好ませられて諸國の大力士上手等數多召抱へありて。相撲取の懇望に任せ勸進相撲へも暫くの御暇賜はり。御搦もな

く出し給ふ。其御抱への相撲人が、彼殿より拜領の下帶を華麗に結び出立ちけるより、各我れ劣らじと。伊達を専らにぞしける。此時分御抱への相撲取の拜領まはしを、世に紀州まはしと稱したり。大名の事なれば、金銀にあかし。物數寄に織られけるゆゑ、美麗なること、目を驚すばかりなりしとぞ。

埒明く 諺草に「埒は竹を並べ立て結びたるものなり。今埒明くといふ詞は、古き詞なり。南都にて春日大明神祭禮の時、一夜神輿を外に遷す。其まはりに埒を結びて、人の猥りに近づき觸れん事を警む。其翌朝今春氏の猿樂幣を持ち來つて、始めて獨り神輿の前に詣で、埒をひらひて祝言を讀む。これより諸人共に入る。此故に物の屈塞の開きたるを埒明くといひ來れり」と見ゆ。

厄病神 貞丈雜記に「厄病神といふもの書に見えず。無き者なり。疫病は春温ならず夏涼しく、秋暑く冬温なる様なる。不相應の氣にあたり、人の病む事なり。神のなすわざにあらず。熱強ければ正氣を失なひて、色々の形も見えたわごとなどいふを、神のなすわざとおもふ事甚だ非なり」

池田 攝津國豊島郡にあり、名所圖會に「舊吳服の里といふ、豊島郡都會の地にして、交易の商人多し。これより北の方の山家より、所々の産物を運び出で、朝の市暮の市とて、商

家の賑ひ。特には酒造りの家多くありて、猪名川の流水を汲んで造る味美にして官家の調進とす。これを世俗池田酒と賞して名産とす。又北の方の山家より炭を多く製して出す。此所の市店人運び交易すれば池田炭といふ。茶席の爐中に焼て可なり。又藥種茴香名産なり」と見ゆ。

摩利支天 眞俗佛事編に「問ふ。武士専ら末利支天を守本尊とするは如何。答ふ。末利支天經に依るに。此天大神通力自在にして。常に日天の前を行けども。神通速疾にして。日天月天もこの天を見ること能はずといへり。又隱形印の深秘あり。夫れ武夫の事業たる兵法劍術のすみやかなる。逐奔電常の心とす。故にひとり此天を崇むるなり云々。作此像。戴於頂上。或戴臂上。或置衣中。以菩薩威神之力。不逢災難。於怨家處。決定得勝。鬼神惡人能無得便云々」と見ゆ。

妙見 神咒經に「成北辰菩薩。名曰妙見菩薩。今欲說神咒擁護諸國土。處於閻浮提。所作甚奇特。故名曰妙見。衆星中之最勝。神仙中之仙。菩薩中之大將」と見ゆ。
精進 上生經疏に「精謂精純。無惡雜故。進謂昇進。不懈怠故」と見ゆ。

明治三十六年十一月二十日印刷
明治三十六年十一月廿三日發行

淨瑠璃通解第參編

定價金參拾五錢

著者 山本信吉

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博進社工場

東京市小石川區久堅町百〇八番地

會社 博進社



發兌元 東京日本橋區本町 博文館

▲博文館發兌戲曲書類目録

謠曲及能狂言

大和田建樹君著

増補 謠曲通解

全一冊 脊皮上綴 正價壹圓八拾錢
大判一七入六頁 小包逢六頁 宛

次 目

- 第一 高砂 田村 東北 道成寺 龜通 實盛 野外 廿四番
 第二 老松 八島 江口 蓬月 紅葉狩 嘉城 知野外 廿九番
 第三 白樂天 服 楊貴妃 俊寛 堀風 難波 下野外 廿九番
 第四 養老 敦盛 井筒 關寺 小町 石橋 加茂 水野外 廿九番
 第五 三輪 鶴 蕉 草紙洗 葵上 禪師 曾我 佐保山外 廿九番
 第六 龍田 兼平 橋辨慶 檜垣 東岸居士 國栖 江島外 廿八番
 第七 玉井 橋源大 朝顔 佐々木 鍾引 紅葉 鶴岡外 十三番
 第九 鷓鴣 黑源大 朝顔 佐々木 鍾引 紅葉 鶴岡外 十三番

大和田建樹君著

謠曲文粹

全一冊 紙皮上綴 正價參拾五錢
小判五三〇頁 郵稅六

其文は金玉其曲は金襴誰か謠曲を一讀して三嘆せざるものありんらん大和田先生其文中に就き、題の粹なるものを抜き、之を四季戀雜の六種に類して一々に題を設け、文の妙處に批圖して味ふべく、論すべき點を示されたり、讀者若し夫れ百卷に撮げられたる、謠曲の國別、こと多からん、謠曲作者類別等を一覽せば更に便益を得給ふこと多からん

大和田建樹君著

謠曲

能

全一冊 洋並綴 正價貳拾五錢
大判二七六頁 郵稅六

幸田露伴君校訂

狂言全集

上、中巻既刊 下巻近刊
全三冊 和上綴 正價一冊五拾錢
中判九千三百頁 郵稅一冊七拾錢

上 卷 の 上					中 卷 の 中					下 卷 の 下											
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)							
鳥帽子折	渡福糊	末ひろくわい	あいくすり	栗口やい	伊文子	河原原	上原	成上	目近	役道	牛馬	素禰落	三本柱	かりわ	松の精	老武者	塗師六	餅酒	茶盃	對馬	八尾地藏
おぼん	かき酒	なす物	つり	なす物	武悪	秀盗	子立	鶴立	竹立	金野	櫻川	磁石	文相	種の	石神	水論	煮物	人馬	布た	布た	布た
おぼん	かき酒	なす物	つり	なす物	武悪	秀盗	子立	鶴立	竹立	金野	櫻川	磁石	文相	種の	石神	水論	煮物	人馬	布た	布た	布た
おぼん	かき酒	なす物	つり	なす物	武悪	秀盗	子立	鶴立	竹立	金野	櫻川	磁石	文相	種の	石神	水論	煮物	人馬	布た	布た	布た
おぼん	かき酒	なす物	つり	なす物	武悪	秀盗	子立	鶴立	竹立	金野	櫻川	磁石	文相	種の	石神	水論	煮物	人馬	布た	布た	布た

大和田建樹君著 每卷密備挿入 (三の巻迄出来四の巻以下続刊)

能のしをり 全六册洋並綴 正價一册四拾錢 一册二〇〇頁 郵稅六錢

一の巻 總説 能の種類、役者、地謡、子分、舞掛、形、位と號、急、中入と物着、次第、名乗、笛、一聲、出方、早笛、太鼓、下羽、來序、亂序、あしらひ出し、早鼓、祝詞、舞、舞動、形、立廻、イロへ、幕面、裝束、作物、小道具、替の形、離子と仕舞

二の巻 田村翁 兼平 八島 東北 蘆刈 船辨慶 江口清經 羽衣 安達ヶ原 蟻通 熊野 猛々 陽田川 融

三の巻 養老 忠夜討 曾我 松風 七落 鞍馬 天人 橋老 春榮 草子 富七 太鼓 山姥 紅葉 折

四の巻 賀茂 西王母 小袖 曾我 櫻川 二侍 野守 葛城 實盛 放山僧 雲雀 殺産 月

五の巻 山月 頼政 景清 二人 靜 雲雀 殺産 月 項羽 朝長 砥吉 詔 熊崎 善知 鳥

六の巻 大佛 供養 斑女 大原 御幸 江丸 山 大綱 阿清 鮫界 上 同

文藝雜著

大和田建樹君著 日本歌謠類聚 全三册皮上綴 正價一册拾錢 中判二〇四頁 郵稅一册拾錢

我國開國以來二千五百年間の歌謠に就いて本書にあり、時代を以て古今を分ち、種類に依て雅俗を別に、一讀人をして、其沿革を詳にせしむ、大和田先生が之を輯むるに、幾星霜の勞苦を費されしかば、請ふ一本を綴て、賞驗あらんことを

長井金升君訂 俗曲大全 全一册皮上綴 正價一册拾六錢 中判一〇九四頁 郵稅拾六錢

目次 義太夫の部 一八節の部 河東節の部 宮本津節の部 長津節の部 新内節の部 常盤節の部 大津節の部 清元節の部 端唄の部 流行唄の部 小唄の部 情歌の部 座部

聲曲自在 全一册洋並綴 正價貳拾五錢 大判二四八頁 郵稅六錢

琴曲獨稽古 全一册洋並綴 正價貳拾五錢 大判二四八頁 郵稅六錢

鶯亭金升君著 都々逸一千題 全一册紙皮上綴 正價參拾五錢 小判五六〇頁 郵稅六錢

鶯亭金升君著 風雅都々逸の葉 全一册紙皮上綴 正價貳拾錢 小判二九〇頁 郵稅四錢

風雅狂句の葉 全一册紙皮上綴 正價貳拾錢 小判二五二頁 郵稅四錢

風雅雜俳の葉 全一册紙皮上綴 正價貳拾錢 小判二七四頁 郵稅四錢

風雅冠句の葉 全一册紙皮上綴 正價貳拾錢 小判三四頁 郵稅四錢

風雅狂歌の葉 全一册紙皮上綴 正價貳拾錢 小判二九六頁 郵稅四錢

淨瑠璃集

水谷不倒君校訂

義太夫百番

近松時代淨瑠璃

次目
唐船陣今國性爺島國武性爺合戰國性爺兵衛後日合戰
賀古教信七墓冠婿平大磯虎稚物語常源田兵衛名所孟戰
曾我五人兄弟弟松家村雨束帶鑑鳥曾流小栗判

近松世話淨瑠璃

次目
曾根崎心中山崎與毒の門松心
生玉心中枕おなつ十年忌歌念佛
紙屋治兵衛天の綱島清十郎又水の朝日おふさ重井筒

水谷不倒君校訂

續近松淨瑠璃集

次目
日本武尊香妻鏡室町千疊敷源氏十二段長生島臺
最明寺百人以上騰吉雙生野隔田川傾城反魂香

水谷不倒君校訂

近松半淨瑠璃集

次目
役行者大峯櫻
山城國畜生塚

次目
關待新田系圖
關待新田系圖
關待新田系圖

水谷不倒君校訂

並木宗淨瑠璃集

次目
道成寺現在蛇鱗
道成寺現在蛇鱗
道成寺現在蛇鱗

水谷不倒君校訂

紀海音淨瑠璃集

次目
後安北七道
後安北七道
後安北七道

水谷不倒君校訂

江戶
者作 **淨瑠璃集**

次目

河井正宗由來志賀敵討
 芭蕉翁俳諧墨田神德
 矢口虎御靈新田神德
 伊達道鏡阿國戲場
 吉野靜人源氏千本鑑
 狸野勸化帳目競五滿鐘
 理向勸化帳目競五滿鐘
 化地藏畧綠記

全一冊脊皮上綴
 中判一〇六〇頁
 正價六拾六錢

鏡 山來重詰
 舊也血將宮大本
 錦物紅軍 附町紙青
 繪語歌配川

水谷不倒君校訂

竹田
雲出 **淨瑠璃集**

次目

小町炭燒深草土器師七小町
 白髮實盛加賀國篠原合戰
 黒髮實盛加賀國篠原合戰
 江戶文七結屋男作五雁金
 大阪文七結屋男作五雁金
 網目大塔宮 鍛
 大内裏大友眞鳥 鍛
 南朝正平四年北朝貞和五年太平記藥水の巻

全一冊脊皮上綴
 中判一〇四六頁
 正價六拾六錢

三 甲 賀 庄
 雙 栗 賀 庄
 菅 葉 賀 庄
 雙 栗 賀 庄
 菅 葉 賀 庄
 菅 葉 賀 庄
 菅 葉 賀 庄
 菅 葉 賀 庄
 菅 葉 賀 庄

全一冊脊皮上綴
 中判一〇四六頁
 正價六拾六錢

三 甲 賀 庄
 雙 栗 賀 庄
 菅 葉 賀 庄
 雙 栗 賀 庄
 菅 葉 賀 庄
 菅 葉 賀 庄
 菅 葉 賀 庄
 菅 葉 賀 庄

水谷不倒君校訂

文耕堂
淨瑠璃集

次目

河内御前國姥
 佛浦大紅扇
 信州御前國姥
 三浦大紅扇
 鬼州御前國姥
 須磨御前國姥
 車磨御前國姥

全一冊脊皮上綴
 中判一〇〇一頁
 正價六拾六錢

應 神 天 皇 八 白
 敵 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白

全一冊脊皮上綴
 中判一〇〇一頁
 正價六拾六錢

應 神 天 皇 八 白
 敵 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白
 伊 將 行 敵 應 神 天 皇 八 白

水谷不倒君校訂

林
子撰註

次目

櫻庭薫村君著
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集

全一冊洋並綴
 大判 四四二頁
 正價四拾貳錢

全一冊洋並綴
 大判 四四二頁
 正價四拾貳錢

全一冊洋並綴
 大判 四四二頁
 正價四拾貳錢

博文館編輯局校訂

淨瑠璃名作集

次目

菅原傳授手習鑑
 水背山婦女庭訓
 關取千兩轡
 藤原道滿大内職
 本朝廿四孝
 ひらまな盛衰記

竹田出雲 伊賀越中雙六
 近松半二 御所櫻堀河夜討
 近松半二 櫻田義典
 近松半二 櫻田義典
 近松半二 櫻田義典
 近松半二 櫻田義典
 近松半二 櫻田義典
 近松半二 櫻田義典

全壹冊脊皮上綴
 中判一〇〇頁
 正價六拾六錢

全壹冊脊皮上綴
 中判一〇〇頁
 正價六拾六錢

全壹冊脊皮上綴
 中判一〇〇頁
 正價六拾六錢

幸堂得知君校訂

忠臣藏淨瑠璃集

次目

若盤太平記 近松門左衛門
 假名手本忠臣藏 中村阿彌助
 假名手本忠臣藏 中村阿彌助
 假名手本忠臣藏 中村阿彌助
 假名手本忠臣藏 中村阿彌助
 假名手本忠臣藏 中村阿彌助
 假名手本忠臣藏 中村阿彌助
 假名手本忠臣藏 中村阿彌助
 假名手本忠臣藏 中村阿彌助

全壹冊脊皮上綴
 中判一〇八〇頁
 正價六拾六錢

全壹冊脊皮上綴
 中判一〇八〇頁
 正價六拾六錢

全壹冊脊皮上綴
 中判一〇八〇頁
 正價六拾六錢

水谷不倒君校訂

巢
林
子撰註

次目

櫻庭薫村君著
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集
 忠臣藏淨瑠璃集

全一冊洋並綴
 大判 四四二頁
 正價四拾貳錢

全一冊洋並綴
 大判 四四二頁
 正價四拾貳錢

全一冊洋並綴
 大判 四四二頁
 正價四拾貳錢

大阪 義太夫本 上等半紙 木版摺

○正價壹枚參厘五毛の割

第一號	忠臣	鶴	ケ	岡	大九判	正價六錢六厘
第二號	全	桃	井	館	二大判	正價八錢
第三號	全	けんくわ	場	場	四大判	正價拾六錢壹厘
第四號	全	鹽	谷	館	三大判	正價拾壹錢九厘
第五號	全	鐵	砲	場	二大判	正價拾錢壹厘
第六號	全	勘	平	切	四大判	正價拾七錢壹厘
第七號	全	茶	屋	場	四大判	正價拾六錢四厘
第八號	全	山	科	雪	五大判	正價拾九錢六厘
第九號	全	天	河	屋	四大判	正價拾四錢
第十號	全	夜	討	屋	二大判	正價八錢七厘
第十一號	忠臣	喜	内	家	三大判	正價拾壹錢九厘
第十二號	忠臣	宅	衛	上	大紙判	正價拾壹錢五厘

第十三號	二度	寺	岡	腹	三大判	正價拾壹錢五厘
第十四號	太	本	能	寺	二大判	正價拾錢壹厘
第十五號	全	局	注	進	三大判	正價拾貳錢九厘
第十六號	全	尼	ケ	崎	三大判	正價拾參錢六厘
第十七號	朝	濱	松	屋	二大判	正價拾錢壹厘
第十八號	全	宿	小	屋	四大判	正價拾五錢七厘
第十九號	菅	道	明	寺	二大判	正價拾錢壹厘
第二十號	全	車	曳	き	二大判	正價七錢參厘
第二十一號	全	佐	太	村	五大判	正價拾七錢五厘
第二十二號	全	松	王	敷	三大判	正價拾貳錢六厘
第二十三號	全	て	ら	や	五大判	正價拾九錢九厘
第二十四號	安	袖	萩	文	五大判	正價拾四錢七厘
第二十五號	全	一	ツ	家	四大判	正價拾貳錢九厘
第二十六號	一	小	次	郎	三大判	正價拾貳錢九厘
第二十七號	全	須	磨	組	三大判	正價拾錢五厘

第五十號	阿波順	禮歌	大判 正價拾八錢五厘
第五十號	三日太松	下住家	大判 正價拾五錢
第六十號	岸姬朝比奈上使	植原	大判 正價拾參錢六厘
第六十號	白石田	吉履	大判 正價拾錢壹厘
第六十號	全	新	大判 正價拾參錢六厘
第六十號	加賀見山草	打局	大判 正價八錢七厘
第六十號	全	長	大判 正價拾五錢
第六十號	全	亦輔住家	大判 正價拾四錢參厘
第六十號	覺仇討	新左衛門屋敷	大判 正價拾錢
第六十號	全	別	大判 正價拾錢五厘
第六十號	全	瀧	大判 正價拾七錢五厘
第六十號	腰越	の	大判 正價拾錢五厘
第六十號	泉	三郎館	大判 正價拾錢五厘
第七號	八	政	大判 正價拾參錢六厘
第七號	陣	清本城	大判 正價拾錢
第七號	合邦	邦	大判 正價拾五錢七厘
第七號	近江盛	網	大判 正價拾六錢四厘
第七號	源氏	館	大判 正價拾錢

第七十號	廻山	やべり	大判 正價九錢四厘
第七十號	伊賀沼津里の口の段	切腹	大判 正價拾錢五厘
第七十號	全	平	大判 正價拾錢五厘
第七十號	全	岡	大判 正價拾八錢九厘
第七十號	全	平	大判 正價拾錢
第七十號	阿漕	治住家	大判 正價拾錢參厘
第七十號	浦	平	大判 正價拾四錢
第七十號	松	俊寬島物語	大判 正價拾貳錢九厘
第七十號	姫小	作住家	大判 正價拾壹錢貳厘
第七十號	口蓮	勤	大判 正價拾錢
第八十號	卷	鬼一菊畑	大判 正價拾六錢八厘
第八十號	全	橋	大判 正價拾錢五厘
第八十號	花の志	渡	大判 正價拾五錢七厘
第八十號	上野	寺	大判 正價拾錢
第八十號	女舞	三勝酒屋	大判 正價拾四錢參厘
第八十號	戀飛	新	大判 正價拾錢
第八十號	紙屋	時雨	大判 正價拾參錢六厘
第八十號	治兵衛	村	大判 正價拾錢
第八十號	堀	猿	大判 正價拾七錢壹厘
第八十號	川	廻	大判 正價拾錢
第八十號	お染質	見世	大判 正價拾九錢貳厘
第八十號	久松	世	大判 正價拾錢

第八十號	新坂歌野	崎村	大五枚判 正價拾八錢五厘 郵稅貳錢
第八十號	佳連帶	屋屋	大五枚判 正價貳拾錢六厘 郵稅四錢
第九號	夕揚	屋屋	大三枚判 正價八錢 郵稅貳錢
第九十號	戀所八百屋	の段	大六枚判 正價拾錢壹厘 郵稅貳錢
第九十號	八百屋おちよ半兵衛	屋屋	大六枚判 正價拾錢九厘 郵稅貳錢
第九十號	昔八白	木屋	大五枚判 正價拾七錢八厘 郵稅貳錢
第九十號	鈴ケ	森屋	大七枚判 正價五錢九厘 郵稅貳錢
第九十號	播州皿敷鐵山館	の段	大五枚判 正價拾貳錢五厘 郵稅貳錢
第九十號	り山	中將	大五枚判 正價拾壹錢五厘 郵稅貳錢
第九十號	雙級	入	大三枚判 正價八錢 郵稅貳錢
第九十號	果物	生	大四枚判 正價拾壹錢九厘 郵稅貳錢
第九十號	詰	村	大四枚判 正價拾壹錢貳厘 郵稅貳錢
第九十號	全	土	大三枚判 正價貳拾錢貳厘 郵稅貳錢
第九十號	木下	竹	大三枚判 正價貳拾錢貳厘 郵稅貳錢
第九十號	全	壬	大四枚判 正價拾五錢七厘 郵稅貳錢
第九十號	梅の聚	樂	大七枚判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳錢

第三百號	あし狐	わかれ	大七枚判 正價九錢四厘 郵稅貳錢
第三百號	荊	高山	大三枚判 正價八錢 郵稅貳錢
第三百號	お妻八う	なぎ	大四枚判 正價拾六錢四厘 郵稅貳錢
第三百號	引布	綿	大八枚判 正價九錢八厘 郵稅貳錢
第三百號	國性	獅	大六枚判 正價拾貳錢六厘 郵稅貳錢
第三百號	龜山	在所	大三枚判 正價拾錢八厘 郵稅貳錢
第三百號	二代	秋津島腹切	大四枚判 正價拾七錢壹厘 郵稅貳錢
第三百號	佐倉	子	大五枚判 正價拾八錢五厘 郵稅貳錢
第三百號	反魂	吃	大二枚判 正價拾錢壹厘 郵稅貳錢
第三百號	和田	市若丸初陣	大三枚判 正價拾壹錢五厘 郵稅貳錢
第三百號	比翼	長兵衛	大三枚判 正價拾參錢六厘 郵稅貳錢
第三百號	娘景	日向島	大四枚判 正價拾五錢 郵稅貳錢
第三百號	劍著	幸	大四枚判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳錢
第三百號	待	内住	大三枚判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳錢
第三百號	老婆	馬追	大四枚判 正價拾四錢貳厘 郵稅貳錢
第三百號	餅	赤坂	大三枚判 正價拾錢五厘 郵稅貳錢
第三百號	藤栗	木	大三枚判 正價拾錢五厘 郵稅貳錢

淨 瑠 璃 通 解

●壇浦兜軍記……(琴責の段)
 ●伊賀越道中双六……(婚禮の段)
 ●伊賀越道中双六……(沼津の段口)
 ●伊賀越道中双六……(沼津の段切)
 ●伊賀越道中双六……(新關所の段)
 ●伊賀越道中双六……(岡崎の段)
 ●伊賀越道中双六……(伏見の段)
 ●伊賀越道中双六……(圓覺寺の段)
 ●伊賀越道中双六……(質屋の段)
 ●染模様妹背門松……(野崎村の段)
 ●新版歌祭文……(傳授の段)

壹

編

●菅原傳授手習鑑……(道明寺の段)
 ●菅原傳授手習鑑……(車曳の段)
 ●菅原傳授手習鑑……(佐太村の段)
 ●菅原傳授手習鑑……(飛梅の段)
 ●菅原傳授手習鑑……(寺子屋の段)
 ●菅原傳授手習鑑……(松王屋敷の段)
 ●近頃河原の達引……(堀川の段)
 ●傾城戀飛脚……(新口村の段)

貳

編

●桂川連理柵……(帶屋の段)
 ●源平布引瀧……(綿操馬の段)
 ●源平布引瀧……(松波琵琶の段)
 ●蝶花形名歌烏臺……(小坂部館の段)
 ●本朝二十四孝……(百度參の段)
 ●本朝二十四孝……(桔梗ヶ原の段)
 ●本朝二十四孝……(景勝下歌の段)
 ●本朝二十四孝……(勘助住家の段)
 ●本朝二十四孝……(十種香の段)
 ●關取千兩職……(猪名川内の段)
 ●近江源氏先陣館……(四斗兵衛内の段)
 ●近江源氏先陣館……(盛綱陣屋の段)
 ●近江源氏先陣館……(船長の段)
 ●義經腰越狀……(目貫屋の段)
 ●義經腰越狀……(泉三郎館の段)
 ●鎌倉三代記……(三浦別れの段)
 ●日本賢女鑑……(片岡忠義の段)
 ●八陣守護城……(政清本城の段)
 ●姫子松子の日の遊……(赦免狀の段)
 ●姫子松子の日の遊……(俊寛鳥物語の段)

第

參

編

●錢六稅郵錢五拾參金價正冊一
 ●稅郵要外▲錢拾八圓參冊二十●價貳冊六●

